誇り高き海兵隊と空を裂く魔女達

オッティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誇り高き海兵隊と空を裂く魔女達

【Ｎコード】
Ｎ５３７１Ｗ

【作者名】
オッティ

【あらすじ】
戦闘中に核爆発に巻き込まれた海兵隊がストライクウィッチーズの世界に転生する

プロローグ（前書き）

初めまして。オッティと申します。駄文ですが、どうぞ宜しくお願いします。

プロローグ

《西暦２０ＸＸ年東南アジア某所ＵＳＭＣ特別任務中隊〔シュバルツェア・ラファール〕中隊長都筑純一少佐》

簡単な作戦のはずだった。敵軍の基地を強襲して大量破壊兵器を確保し、ヘリで脱出というシンプルな作戦だった。だが敵は俺達がここに来る事を知っていたらしい。周りから怒号と悲痛な叫び声が聞こえてくる。

「敵機だ！撃ち落とせ！」

「脚を撃たれた！誰か支援を！」

「三等軍曹しっかりしろ！」

次々と倒れて行く仲間達。弾も尽きかけて居る。全滅するのも時間の問題だ。

「ジュン、このままじゃ！」

隣でＭ４を撃っていた副官のフレデリカが叫ぶ。

「わかってる！」俺は叫び返した。そして俺の後ろを守ってる最愛の妹、湊にこう囁いた。

「あとどのくらい残ってる？」

「付属の戦車隊は全滅、戦闘ヘリ部隊もです。歩兵は４４人で内、

負傷者は１３人です。これ以上は・・・」

言葉を遮って近くで迫撃砲が炸裂した。

「クソッ！何でこうなったんだ！諜報部は一体何にをしてるんだ。間違いだらけの情報を寄越しやがって！」

「スパイでも居るんじゃないか？」

「違ぇねえ。全くだよ」

絶望的な状況で在りながら皆の声は明るい。全員が死を覚悟しているのだろう。恐らくアドレナリンも手伝っているのかもしれない。

大隊長として俺は命令を下した。指揮官にとっては最も大切な命令であり、最も出したくない命令を。

「悪いが此処までだ。コレが最後の命令だ良く聞け。敵を一人でも多く殺してから死ね。未熟な指揮官でスマン。センパーファーイ」

「「「センパーファーイ」」」

最後の命令を出し皆で《常に忠誠を》を唱和した後俺がみたのは核爆発によってできたキノコ雲だった。そして次の瞬間意識が途絶えたのだった。

プロローグ（後書き）

オリ主やオリキャラは落ち着いた頃にキャラ設定を書きます。

キャラ設定修正版（前書き）

修正、追加しました。

キャラ設定修正版

キャラ設定

都筑純一（つづきじゅんいち）

２０歳

階級：少佐

ＵＳＭＣ特別任務中隊中隊長

中学生の頃に住んでいた街が大型台風に直撃された際に土砂崩れに巻き込まれ、両親と死別する。支援に来た在日米軍の海兵隊に救助され、その一年後救助に参加していた海兵の一人が孤児院で暮らして居た彼と湊に一緒に来ないかと誘い、湊と共に彼の養子になる。

助けられた事や両親の遺品回収を手伝って貰った恩を返すため海兵隊に入隊。下士官時代はフォース・リーコンに在籍していた。使用武器はＭ４Ａ１のカスタム品と退役した養父が使っていたコルト１９１１とＭ８２とＳＲ２５（養父はスナイパーだった）

基本的な事は何でもこなす。家事から戦闘まで何でもござれ。

高校２年の時に中退して海兵隊に入ったが、入隊した後も勉強は続けていた。

根は真面目だが書類仕事はよくサボる。そのためフレデリカが苦労している。

女難。叔父が海軍の戦闘機パイロットの為、ある程度の戦闘機の操縦をマスターしている。

都筑湊（つづきみなと）
階級：曹長
１９歳
ＵＳＭＣ特別任務中隊第一小隊第一分隊衛生兵
純一の妹で災害時は小学校の林間学校に行っていたため無事だった。

兄の後を追って高校卒業と同時に１８歳で海兵隊に入隊、衛生兵に。
養母が医者であったため高校時代に養母から応急処置や医療の技術を学ぶ。料理や洗濯といった家事が得意。性格は基本的クールでドライ。実はお兄ちゃんっ子。
純一に勉強を教えたのは彼女。

純一を兄ではなく一人の男性として見ている。

純一いわく「自分には過ぎた妹」との事

フレデリカ・ロックウェル階級：中尉
２２歳
ＵＳＭＣ特別任務中隊第一小隊第二分隊指揮官兼隊長付き補佐官
士官学校を首席で卒業した才女。純一の事を「ジュン」と呼ぶ。純一との出会いはとある国の将軍を暗殺する任務。下士官からの叩き上げの純一とは最初いがみ合っていたが、とある事件からは和解し良いパートナーになる。父親は海軍の提督で兄は国防総省で働いている軍人一家。何でもそつなくこなすが、料理だけは苦手らしい。
そのため割と家事全般をこなせる純一が作った料理を食べてショックを受けた。性格はちょいツン。周りの隊員からはフレデリカが長女で都筑兄妹がその弟と妹と認識されている。二人に年上ぶろうとするも湊にしか成功していない。

キャラ設定修正版（後書き）

修正した理由は物語の開始時点で主人公が２２歳だと４５年のロマーニャ編で２７歳になります。そうなるとルッキーニとの年の差が１３歳ぐらいになるからです。

神、そして旅立ち（前書き）

神様出しちゃった。ご都合主義の予感！？でもオリ主達は何の能力も有りませんし。あくまで一軍人としての能力です。

神、そして旅立ち

暗闇の中で俺は眼を醒ました。

「此処は何処だ？」

真っ先に思い付いたのは《あの世》だった。罪の無い民間人を守る為とはいえ多くの人間を殺し過ぎた。恐らく俺は地獄に行くことになるだろう。いや、此処が地獄なのかもしれない。ただただ暗闇だけが広がる世界。

そう思ったその時、一筋の光が射した。そして、

「眼を醒ました様ですね。初めまして私は神です。」

声が聞こえた。

「神・・・？」

「えぇ神です。」

「その神さまが何の用だ？最後の審判にでも来たのか？」

キリスト教に出てくる最後の審判。それは死んだ者を天国か地獄のどちらに行くかを決める裁判みたいな物だ。日本で言う閻魔大王だ。キリストでも閻魔大王でもどのみち地獄行きだな、と自嘲気味に笑いながら彼の返事を待つ。だが返って来たのは意外な返事だった。

「私を助けて下さい！」

一瞬神の言っている言葉の意味がわからなかった。
神が助けを求める？何かの間違いじゃ？
「私を助けて下さい！」
もう一度彼は繰り返した。聞き間違いじゃ無かったらしい。
「どうして神が助けを求めるんだ？ただの人間に。」
「平行世界を知っていますか？」
「あぁ、ある程度はな。何か関係が有るのか俺の質問に？」
「えぇ。助けて欲しいのはその事なので。」
そう言うと彼は説明を始めた。
「まず貴方達が神と崇めている存在はその平行世界の管理者なのです。基本的に管理者はその世界に干渉出来ません。世界を形作るのはその世界に有る在りのままのモノですから。おいそれと手を出す訳にはいかないのですよ。まぁ、死んだ物や壊れて捨てられた物は例外として別の世界へ持って行けますが。」
此処で一つの疑問が湧いた。
「あまり干渉出来ないなら、どうしてあんたが神って呼ばれてるんだ？」

「確かに私自身は干渉出来ません。ですがその世界にいるモノ達に囁く事が出来ます。世界をより良い方向に持っていくヒントを。と言っても本当にささやかなものですが。一言囁くのにかなりのエネルギーと時間を要しますので。」

「つまりそれが神の声って事か?」

「えぇ、その通りです。物分かりが良くて助かります。」

成る程その囁きが一人歩きして今の宗教になったのか。

「そろそろ、本題に入っても良いですか?」

「ん?あぁ、頼む。」

俺達の信じていた神について考えていると、彼が声をかけてきた。

「とある平行世界でその世界の管理者が囁きました。彼は良かれと思って囁いたのですが、それがアダになって仕舞った。幸いその世界は直ぐに元に戻りました。しかしその波紋は色々な世界に影響を及ぼしました。私の管理する世界もその一つです。」

「成る程な。それでアンタの世界を救えと?」

「いえ、手助けしてあげて下さい。」

「手助け?」

「私の世界でも戦争が在ります。彼等の・・・いえ、彼女達の手助けを。」

「片方を助けて戦争を早く終わらせろって事か？」

「はい。そろそろ時間の様ですね。」

時間？俺が平行世界に行く時間か？

「最後に、その世界はどんな世界なんだ？何一つ教えて貰って無いんだが。」

「貴方も偵察兵なら自分で調べなさい。では宜しく頼みますよ。」

「待っ・・・」

そして俺は再び意識を失うのだった。

神、そして旅立ち（後書き）

初めてメール執筆で書いたの読み難くなっているかもしれません。

到着、そして始まり前編（前書き）

誤字脱字等がありましたので気付いた分だけ直しました。

到着、そして始まり前編

「・・・ュン！、・・・ュンってば、起きてジュン！」

誰かが呼ぶ声がする。

「こうなったら！」

叫び声と共に鈍い衝撃が来た。

「ゴフッ！」

「あっ起きましたよフレデリカさん。」

「あら、そう？」

「良いパンチだ、俺と一緒に世界を目指さないか？」

そう冗談で言うと、

「何時もの兄さんですね。頭の方も問題なさそうです。」

最愛の妹にジト目で見られた。グスッ（涙）

「取り敢えず此処は？」

「分からないわ。それとあの作戦に参加した全ての兵器と兵士が無傷でこの砂浜に居たの。艦隊まで無傷で。今、第一分隊が偵察に向かって結構経ったからあと一時間ちょっとで帰って来るはずよ。」

「それと兄さん、ダグラス・ロックウェル提督が目を覚ましたら野

戦指揮所に来るようにと。」

艦隊や兵器、兵士は彼が何とかしてくれたのだろう。恐らく俺達は死んだ人間だし、兵器も全て核で破壊されたはずだ。今更もといた世界から消えても特に影響は無い。そういう事なんだろう。ダグラス・ロックウェル提督も巻き込まれたのか。海軍としてはかなりの損失だな。名字からも解るように彼はフレデリカの父親だ。合衆国海軍特別即応艦隊の司令官として何度も同じ作戦に参加した。というよりも俺達を戦場まで運ぶのが即応艦隊の任務だからな。艦隊司令官としてはかなり優秀な方だ。

「湊、お前達が目を覚ましたのは何時だ?」

「私が起きたのは2時間くらい前です。その時には既に野営の準備が出来ていました。」

「そうか。取り敢えず野戦指揮所に行ってくる。」

「待ってジュン!」

「どうした?」

「私たち死んだのよね?」

「解らん。」

取り敢えず言葉を濁しておいた。まだ自分自身でも心の整理が着かなかったからだ。だから言うわけにはいかなかった。俺が戸惑っていると、

「兄さん早く行かないと。」

湊がフォローしてくれた。ホントに俺には過ぎた妹だよ。

1時間後

野戦指揮所は重苦しい空気に包まれていた。あの作戦に参加した各国の部隊指揮官は皆、難しい顔をしている。俺は此処に居る全員にあの事を話した。沈黙を破ったのはロシア軍から派遣されたスペツナズの指揮官だった。

「我々は既に死んでいて、この世界の住民を助ける為に此処に来た、にわかには信じられんな。だがもし、それが本当なら我々が此処に居るのもつじつまが合う。」

皆口々に「確かに」と言っている。

「提督閣下、貴方がこの中で最高位です。命令を！」

ＳＡＳの指揮官がそう言うとダグラスは

「判断材料が少なすぎる当分は此処に留まり情報収集だ。」

と言い俺に命令を出した。

「都筑少佐、偵察に行ってくれると助かる。」

「サー・イエス・サー、第一分隊が戻り次第、部隊を編成して出撃します。」

俺はそう言うと指揮所を出た。先ずは情報収集だ。数分後先行偵察していた第一分隊が帰って来た。

「中隊長、此処から１５Ｋｍの所に街がありました。」

「了解だ。１５分後に再度出撃だ。今の内に休んでおけ。」

俺はそう言うと装備を取りに行った。そして部隊編成が終わり俺直率の第一分隊とフレデリカの第二分隊が出撃することになった。そしてスペツナズから3人、ＳＡＳから1人出して貰った。一個小隊は三個分隊から成り更に一個分隊はそれぞれ１２人ずつに編成されていて、そこからそれを４人ずつの射撃班にまとめている。因みに湊は第一分隊アルファチームだ。

「出発するぞ！」

ハンヴィーに乗り街から１０Ｋｍの地点を目指す。部隊編成中に提督があの会議の内容を全員に話したらしく、車内はその話しで持ち切りだ。

「ボス、俺達はどうなるんですか？」

「日本人の格言を教えてやるよ准尉、『何とかなるさ』」

「答えになって無いっすよ隊長。」

「二等軍曹、俺にだって解らんよ。正に神のみぞ知るだ」

あんたがその神に会ったんだろ等と准尉達がぼやいているが無視だ、無視！そんなやり取りをしていると第一分隊ブラボーチームのハン

ヴィーから無線が入る。
「ワン・ワン・ブラボーからラファールアクチュアルへそろそろ着きますよＯｖｅｒ」
「了解。アクチュアルから全車両へ停車しろ。此処からは徒歩だ。」
「「「了解！」」」
車両を下り警戒しながら徒歩で進んで行く。街が見える丘に着くと双眼鏡を使って街を観察していく。やけに人通りが少ない。ふいに彼の言葉を思い出す。『私の世界でも戦争は在ります。』つまりはそういうことなのだろう。そんな事を考えていると
「隊長！」
「どうした！？」
「あれを！」
ワン・ワン・チャーリーの班長が指差した所を見ると黒に赤い斑点の化け物がいた。
「なっ、何なのよアレ・・・」
フレデリカの声が震えている。俺も同感だ一体何なんだアレは？
続く

到着、そして始まり前編（後書き）

アクチュアルは隊長の意味です。シュバルツェア・ラファールは黒い疾風となります。名前の由来はＩＳです。次回はとある少女を助けます。ヒントはカールストラントのお姉ちゃんの〇〇〇〇です。

到着、そして始まり後編（前書き）

お姉ちゃん登場

到着、そして始まり後編

「ボス何なんです、アレは？」

「恐らくアレが俺達の敵なんだろ。」

黒い怪物からビームが放たれ街が焼かれる。街の中央にあった時計台が一瞬で崩れ去る。街の住民は急いで街を離れようと必死に走っていた。数輌の戦車が街から現れ砲撃を加えるがあまり効果は無いようだ。怪物は弧を描くようにビームを放ち、戦車を一掃する。

「隊長、どうします？命令を！」

部下がそう聞いてくる。

「第一分隊はもう少し街に接近する。他は此処に残れ。行くぞ、Ｍｏｖｅ！」

「「了解！」」

街に近づいて行くと子供の声が聞こえた気がした。

「二等軍曹、今の聞こえたか？」

「街が破壊されてる音なら聞こえてますよ。」

もう一度声が聞こえた、今度はハッキリ『助けて！』と。次の瞬間俺は駆け出していた。

「ボス！？一体何処に行くんですか？」

二等軍曹の制止を振り切って俺は声に向かって走り出す。そしてそこには幼い少女がいた。

「恐い、恐いよお姉ちゃん。誰か助けて！」

建物の瓦礫に隠れていた少女のもとにＵＦＯの形をした小型の化け物がやって来る。

「まずいっ！」

そう思ったその時、俺は魔女を見た。空を裂く魔女達を。

「クリス！」

髪をツインテールにした魔女がマシンガンを撃ち敵を撃破する。だが撃破された敵の破片が少女の上に降り注ぐ。しかし彼女はそれに気付かない。他の化け物との戦闘に気を取られているからだ。

「間に合えっ！」

俺はスライディングの要領で少女を捕まえると、そのまま抱きかかえ走り出す。破片を避けながら走っていると大型の化け物が一匹こちらへ向かってくる。俺は片手でＭ４を化け物に向かって撃ちまくる。だが余り効果が無い。戦車の砲弾すら効かなかったのだ、無駄な抵抗なのは解っている。だが俺の狙いは魔女達をこちらに気付かせることだ。そして魔女達もこちらに気付いたようだ。

「トゥルーデ、クリスが！」

金髪の魔女がツインテールの魔女に叫ぶ。

「なに！？」

「トゥルーデ、クリスちゃんの所に行って！」

赤く長い髪を待つ魔女も叫ぶが魔女達は敵に阻まれてその場を動く事が出来ない。

「まだ死にたく無いよ、お姉ちゃん！」

抱えた少女が泣きながら叫ぶ。

「クリス！クソッ！」

俺は少女に囁いた

「大丈夫、俺が絶対守るから。」

例え嘘でも安心させたかった。だが状況はどんどん悪化する。このままじゃ殺られる！そんな時、聞き慣れた音を聞いた。ヒィィィーンと高音が奏でるエンジン音、それはＦ／Ａ－１８スーパーホーネットが飛翔する音だ。通信機に無線が入る。

「こちらファング・クエイクリード、攻撃対象はあの黒い化け物で良いのか？Ｏｖｅｒ」

「そうよ。全て撃墜して。Ｏｖｅｒ」

「了解した。リードから各機へ交戦開始だ。」

「「「了解！」」」

戦闘機隊が攻撃を開始した。恐らくフレデリカが呼んでくれたんだろう。後で礼を言わないとな。

「2からリードへ小さいのはサイドワインダーでもいけますが、大きいのはアムラームを喰らってもまだ生きてやがる。」

大型の敵を見るとダメージを喰らっている様に見えるが、確かにまだ飛んでいる。ん？ダメージを喰らった箇所から赤いクリスタルが見える。俺はいったん少女を降ろし、背中からＭ８２を取り、クリスタルへ狙いをつけ発砲した。１２．７ｍｍの弾丸は吸い込まれる様にクリスタルに命中した。クリスタルが砕け、化け物は爆ぜた。

「ファング・クエイクリードから地上部隊へ敵は全て排除した。これより帰投する。」

「了解。支援に感謝する。」

戦闘機隊が旗艦空母に帰投していく。魔女達がこちらに向かって来る。厄介事はゴメンだ。此処から離れようとすると、

「助けてくれて有り難うお兄ちゃん。でも、お兄ちゃんは誰なの？扶桑の軍人さん？」

「俺は・・・俺達は《誇り高き海兵隊》さ」

そう言うと俺はその場を離れた。

フレデリカＳｉｄｅ

第一分隊の准尉から無線が入って来た。あのバカが子供の声を聞いたと言って何処かに行ったらしい。スペツナズのスナイパーが彼を見つけた。女の子を抱えながら化け物から逃げているらしい。私は直ぐに無線を艦隊に繋いだ。

「ラファールワン・ツーアクチュアルから空母アリアンロッドへ、複数の対空目標を確認。航空支援を要請します。」

「了解した。直ぐに送る。」

ホントにあのバカは、アタシが居ないと駄目なんだから。帰って来たら説教よ！

ＳｉｄｅＯｕｔ

皆と合流した俺は湊とフレデリカにこっぴどく怒られた。

「これからは一人で勝手に行動しないで下さい。次やったらお・し・お・き・ＤＥＡＴＨ☆」

湊さん笑顔で言わないでください恐いから。俺が小声で

「仕方ないじゃん。」

と呟くと

「何か言いましたか兄さん？」

と言ってきた。

『湊の耳は地獄耳か？』

「何か思いましたか、兄さん？」

「いえ、何も言っていませんし何も思っていません！」

もし湊が俺の奥さんなら尻に敷かれるんだろうな。そんな事を考えながら野営陣地への帰路に着くのだった。

到着、そして始まり後編（後書き）

次回はとあるウィッチと出会います。

ブリーフィング、そして出会い（前書き）

眠いです。誤字、脱字があるかもしれません。報告お願いします。

ブリーフィング、そして出会い

バルクホルンＳｉｄｅ

戦闘を終えた後、私は直ぐにクリスの所に向かった。クリスを救ってくれた見知らぬ兵士にも礼を言わなければならない。だがクリスの所に着くと既にあの兵士は居なくなっていた。

「クリス、無事か？」

「うん、お姉ちゃん。お兄ちゃんが助けてくれたから。」

お兄ちゃん？さっきの兵士か？そういえば彼は何処に行ったのだろう。

「あの男は何処に行ったんだクリス？」

「お兄ちゃん？わかんない。」

「名前は聞いて無いのか？」

「うん。ただ、俺達は誇り高き海兵隊だって言ってた。あと扶桑の人みたいだった。」

「そうか。礼が言いたかったのだがな。」

後からきたハルトマンが声をかけてきた。

「ねぇトゥルーデ、これ！」

そう言って渡してきたのはドッグタグだった

「ＵＳＭＣ・ＳＲ？」

「何処の部隊かしら？」

「ＵＳなら、リベリオンのはずだ。それ以外に合衆国はないからな。」

「トゥルーデ、名前は？」

「Ｊ・ＴＵＺＵＫＩと書いてある。」

「ローマ字かしら？扶桑人みたいな名前だけど。」

「あぁ、確かに扶桑人がアルファベットで名前を書くときはローマ字だもんね。」

扶桑人がリベリオンの軍に？謎が多い男だが絶対に見つけ出して礼を言うんだ。

ＳｉｄｅＯｕｔ

野営陣地に着いたときまず最初にしたことはフレデリカに礼を言うことだ。

「フレデリカ、さっきは有り難う。助かったよ。」

「別に貴方の為じゃ無いわよ。」

「それでもだよ、フリン。有り難う。」

肩を抱き寄せそう言うと彼女は顔赤くして何処かへ行ってしまった。

「隊長は女心が解ってないな。」

「確かにな～。隊長の欠点の一つだからな。」

「アレで本人は親愛を示してるつもりなんだろうな。」

「隊長から見ればゴールを決めたサッカー選手がチームメイトと抱き合うのと一緒、中尉からすれば好きな人にイキナリ抱き着かれてドキドキって所だな、中尉が不憫だよ。」

「「「頑張れ中尉」」」

隊員たちが何か騒いでいるフレデリカが何を頑張るんだ?あと俺のドッグタグは何処にいったんだ?

「少佐、会議の時間です。」

第二小隊第三分隊の分隊長が呼びにきた。

「やれやれ。帰って直ぐに会議か。」

指揮所に行くと見知らぬ男がいた。

「また会いましたね。」

「誰だ？」

「神ですよ。この姿を見せるのは初めてでしたね。」

「あぁ、あんたか。」

俺が椅子に座ると会議が始まった。

二十分後・・・

「敵についての情報は解った。次は我々の状況把握だ。艦艇としては超弩級空母一隻、大型空母二隻、ヘリ空母四隻、揚陸艦４隻、巡洋艦四隻、駆逐艦十二隻、潜水艦四隻、そして戦艦が三隻だ。さらにそれに付随する航空機と車輌、兵員だ。」

「揚陸艦二隻と潜水艦四隻はあの作戦に参加していなかったはずですが。それに戦艦？」

現代では戦艦は使用されていない。そして揚陸艦と潜水艦が増えている。

「君の疑問ももっともだ。それについては私と神が説明する。」

「ちょっと待って下さい。私だけ神と言われるのもはずかしいので、何か名前を考えません？」

俺は、

「ジョン・ドゥはどうだ？」

と提案した。

「名無しですか、まぁ良いでしょう。」

そんな会話をしていると、ダグラスが俺達に話しかけてきた。

「んんっ！もう良いかね？」

「はい。構いません。」

「えぇ、良いですよ。」

頷くとダグラスは話しだした。

「揚陸艦と潜水艦だが、揚陸艦は陸軍レンジャーを載せ我々の増援として来た分だ。潜水艦に関しては保険だ。」

「保険？」

「君の隊にもしもの事があったら、潜水艦からゾディアックを使ってネイビーシールズを送り込む様にと総司令部に言われていてな。」

「成る程。戦艦は？」

「私からの贈り物ですよ、大和、武蔵、ミズーリ、この三隻です。いずれも近代化改修を受けていますので安心してください。苦労したんですよ、貴方達の世界に行って船を再生して改造し、なおかつこの世界に持って来るのは。」

「大盤振る舞いだな。」

「彼女達の手助けをしてもらうのです。感謝の気持ちですよ。」

「彼女達ってのはあの空飛ぶ魔女達の事か？」

「えぇ、そうです。」

その後、状況確認や今後の行動方針を話し合いあった。数時間にも及ぶ会議も終わり、やっと休憩時間になった。俺は野営陣地から出て辺りをぶらつく。既に日も落ち、真っ暗だ。近くにあった大きめの石に腰を掛ける。西からプロペラが回るエンジン音が聞こえた。だが、うちのヘリじゃない。目を凝らすと空に人影の様な物が見える。コチラに向かって来るようだ。その後ろから赤い光りもやって来る。

「おいおい、ウソだろ！」

赤い光りの正体はネウロイだった。

「敵襲！敵襲だ！」

そう叫びながら野営陣地に戻る。夜間警戒にあたっていた兵士が戦闘体制を整える。俺がウィッチの方を見ると、ネウロイ達が放ったビームが彼女を掠めた。ストライカーに披弾したのだろうか、煙が出ている。このままじゃ墜ちて地面に突っ込んでしまう。俺は彼女を受け止める為に移動する。ギリギリだが間に合った。彼女はまだ少女だった。普通の世界の国ならまだ中学生だろう。そんな少女まで戦場に駆り出される、魔法力を持っているというだけで。つくづく狂った戦いだと思った。幸いネウロイは小型だけだったからスペツナズのＲＰＧとＭ２ブローニング機関銃だけでかたずいた。腕の

中の少女はかなり衰弱しているようだ

「衛生兵！コッチに来てくれ！」

湊とレンジャーの隊員が担架を持ってコッチに向かって来る。

「安心しろ、直ぐに医者が来る。」

彼女を湊に預け、俺は割り当てられたテントに向かいそして眠りに就くのだった。

ブリーフィング、そして出会い（後書き）

フレデリカの動かし難さに今頃気付きました。神とモブは動かし易いのに。次回は出会ったウィッチが誰なのかを書きます。

彼女の名は・・・そして行動開始（前書き）

ちっちゃいラル姉が登場。今更ですが物語の今の年代は１９４０年４月です。ホントに今更ですね。あとご都合主義が少し発生。ＧＰＳ衛星とか階級とか。

彼女の名は・・・そして行動開始

???Ｓｉｄｅ

カールストラントから避難する民間人を助ける為にしんがりを勤めていた私はネウロイに追撃されていた。何時間も戦闘をしていたから魔法力はもうほとんど無い。仲間ともはぐれて、たださまようだけだ。そんな時、海岸に明かりが見えた。大型の艦船も見える。場所からみてブリタニア軍だろうか？たしか今、ブリタニアの海軍がバルト海の辺りに居たはずだから。とにかく、これで助かる。眼下で兵士達が戦闘体制を整えるのが見えた。ホッとして気を抜いたその時ネウロイのビームが右のストライカーユニットを破壊した。何も出来ずに墜ちて死ぬんだ。

永遠にも思える時間が終わると、私は誰かの腕の中にいた。男性のようだ。

男らしい大きな背中とあったかい手、なぜだかとても安心した。彼は私を安心させるためだろうか声をかけてくれた。

「安心しろ。直ぐに医者が来る。」

かけられた優しい言葉を聞いた後、私は意識を手放した。

次に目を覚ましたのは硬いベッドの上だった。体のあちこちに包帯が巻いてある。起き上がろうとすると、サイドポニーの女性がコチラにやって来た。軍医なのだろうか？腕に赤十字の腕章をつけている。

「無理しないで下さい、背中に金属片が刺さって、全治九ヶ月の怪

我なんですから。」

「此処は？」

「アメリカ合衆国海軍即応艦隊旗艦超弩級空母アリアンロッドの医務室です。」

アメリカ合衆国？そんな国が地図上に有ったかどうか思い出していると女性が近くに居た兵士に声をかける。

「兄さんを呼んで来て下さい。」

「イエス・マム」

そう言うと兵士は部屋から出て行った。彼女が私の診察をしていると、先程の兵士とは別の男が入って来た。

ＳｉｄｅＯｕｔ

「湊、あの子が目を覚ましたって聞いたんだけど。」

「ちょっとだけ待って下さい。もうすぐ診察が終わるので。」

彼女の体には包帯だらけだった。ストライカーの破片が背中に刺さって全治九ヶ月の大怪我を負ったからだ。湊の診察が終わり、彼女の尋問を始める事にした。

「兄さん、３０分だけですよ。では、これで。」

湊はそう言うと医務室を出た。

「まず名前から聞こうか。」

「名前を聞くときはまず自分から名乗るべきだろう？」

「おっと、これは失礼。俺はシュバルツェア・ラファール陸戦隊司令官兼第一中隊指揮官の都筑純一少佐だ。これで君も名乗って貰えるかな？」

そう、先の会議で俺達の戦力は最高司令官兼艦隊司令官をダグラスに、そして陸上戦力の司令官を俺に決めた。ＳＡＳの指揮官は大尉だから除外されるのは解るがネイビーシールズとスペツナズの指揮官は俺と同じ少佐だ。それにレンジャーの指揮官に至っては中佐だ。それなのに俺が陸戦隊の司令官に選ばれた。理由は『神に選ばれたのはお前であって俺達はオマケだからだ』らしい。ちなみに第二と第三がレンジャー、第四がスペツナズとＳＡＳの合同部隊、後はレンジャー附属の戦車隊とヘリ部隊が各中隊についている。なお第一だけは戦車とヘリは自前だ。

「上官でしたか、てっきり下士官かと。私はカールストラント空軍ＪＧ５２所属、グンドュラ・ラル少尉です。」

「まず、年はいくつだ？」

「女性に年齢の事を聞くのはどうかと。一応１４歳です。」

「若いな。俺の生まれた国ならまだ中学生だな。」

「扶桑ですか？扶桑でも私位のウィッチはいるはずです。それに、私の仲間は１０歳で初陣です。」

１０歳で初陣か。この子を助けた時も思ったが、本当に狂った戦争だ。

「どうしてあの場所を飛んでいたんだ？」

「二ヶ月後に行われる《ダイナモ作戦》に先立ってカールストラント東部から中央部にかけての民間人避難の支援です。私は東部担当でした」

「ダイナモ作戦？」

「知らないのですか？」

「知らないも何も、この世界の人間じゃないからな。」

「この世界の人間じゃない？それにアメリカ合衆国とは何処に在るんです？」

此処で会ったのも何かの縁だ、俺は彼女に全てを話した。彼女は驚きこそしたものの冷静だった。若いのに大したものだ。

「成る程、まだ納得のいか無い所が有りますが貴方の言う事を信じましょう。」

「有り難う、助かるよ。わざわざ受け止めた甲斐があった。」

「こちらこそ有り難うございます。貴方が居なければ私はヴァルハラへ旅立っていたでしょうから。」

「別に礼を言われる事はしてないよ。」

そう言いながら彼女の頭を撫でる。サラサラとした髪が気持ち良い。しばらくそうしていると湊が呼びに来た。何故か少しムッとしている。俺が何かしたか？

「兄さん、時間ですよ。」
「了解。じゃあなラル少尉。湊、後は頼む。」

「はい少佐。」

「はい兄さん。」
医務室をあとにした俺は各指揮官をアリアンロッドの会議室に呼ぶのであった。ちなみに何時もの野営陣地の野戦指揮所じゃ無いのはジョンがＧＰＳ衛星を戦艦と共に持って来てくれたからだ。これによりＧＰＳとＧＰＳ誘導弾・ミサイルが使用可能になった。それで状況が把握・確認しやすい会議室に司令部を移したのだ。別に移動するのが面倒だとかそういうのじゃ無いからな、ホントだぞ。

会議室に指揮官が全て揃い、ダイナモ作戦について話し合う。会議の結果、俺達はダイナモ作戦を全力で支援することにした。作戦が始まる迄はこの辺りのネウロイの数を減らす。これで時間稼ぎをして民間人の避難を助ける。現在居る地点はカールストラント東北部のバルト海だ。此処で粘ればかなりの時間が稼げるだろう。

彼女の名は・・・そして行動開始（後書き）

この物語ではラル姉は周りには姐御キャラ、主人公には妹キャラになります。あとよく読むとまだストパンの世界に彼らが来てまだ二日しか経ってないｏｒｚ

お見舞い、そしてスオムスへ（前書き）

休み時間の教室と家のトイレ、風呂で書き上げました。というか何時もそうなんですけどね。

お見舞い、そしてスオムスへ

ラル少尉と出会ってから半月がたった。

俺達はいくつかの戦闘を経て、カールストラント中央部に向かって航海を始めていた。カールストラント東部のウィッチと一般兵達が中央部に撤退したからである。こちらの世界のデンマーク北にある海峡を抜けて北海まで後退する。その後ダイナモ作戦の作戦地域であるダンケルクで連合軍の支援を行う。その後は・・・考えていない、つまり行き当たりばったりの作戦だ。

おっと、考え過ぎて目的の場所を通り過ぎていた。目的地は医務室だ。ラル少尉のお見舞いにチーズケーキを作って来たんだ。

医務室に入るとフレデリカと湊が先に来ていた。

「フレデリカも来てたのか。ならもう一つ皿とフォークを持って来たら良かったな。」

「何を持って来てくれたんです兄さん?」

「チーズケーキだよ。紅茶は確か此処にも有ったよな?」

何故かラル少尉が驚いている。

「どうした?」

「料理が出来るんですか?」

「ある程度は出来るぞ、もしかして俺が戦闘しか出来ないヤツか何か思ってたんじゃ無いよな？」

「いえ！ただその・・・私は料理が出来ませんから、男の人なのにスゴイなって。」

少尉は少し俯いてしまった。

「別に落ち込む事は無いわよ、私も出来ないしね。」

「士官学校を首席で卒業してるのに料理だけはからっきしだったからな。」

「前に食材を消し炭にしましたもんね。」

確かダグラスの誕生日に料理を作ろうとした時に消し炭にしたのだ。俺と湊が教えて、である。正直、料理が苦手の域を超えている。

「それに料理が出来ないならこれから学べば良いさ。何なら俺が教えようか？」

「でも悪いですし。」

「当分陸戦隊の出番はなさそうだからな。暇なんだよ、書類仕事は全部優秀な副官がやってくれるからな。」

「に・い・さ・ん？まさかまたフレデリカさんに書類仕事を任せてたんですか？」

「えぇっと、いやぁ・・・テヘッ。」

「フレデリカさん、殺っちゃって下さい。」

「了解！日ごろの恨み！」

フレデリカの右ストレートが俺の脇腹に直撃する。

「ゴフッ！」

しばらく俺は悶絶するのであった。

ラルＳｉｄｅ

少佐が私のベッドのすぐそばで悶絶している。中尉も湊さんも笑いながら少佐の作ったケーキを食べている。何だかんだでこの三人は仲が良いのだ。

少し羨ましい。あの三人はまるで本物の兄妹の様な絆がある。湊さんは本当の妹だけど、中尉は違う。私が少佐の妹だったら、あんな風に互いを信じ、甘えさせて貰えるのだろうか？想像してみて、顔が赤くなるのが分かる。何故だろうか？最近少佐の事ばかり考えている気がする。

ＳｉｄｅＯｕｔ

「生活用品が足りない？」

補給部隊からそんな報告が入って来た。弾薬や燃料等の軍需品はジョンが一定量を決まった日に持って来てくれる事になったのだが、

《生活用品等は自分達で調達して下さい、当分のお金は用意しまし

たから。≫

と言って札束と軍需品を置いて帰って行ったのだ。

「わかった。必要な物のリストとＬＣＡＣ、内火艇と買い出しに行く兵員の準備を。」

「了解！」

ＬＣＡＣは上陸用のホバークラフト艇だ。

「さてと、俺も外出の用意をするか。」

持って行くのはＭ４とガバメントだな。買い出しに行くのはスオムスの大都市だ。スオムスは優秀なウィッチが多数集まっている為、比較的安全なのだ。そのため物資を集め易い。スオムスが選ばれたのはこれが理由だ。

取り敢えず揚陸艦の格納庫に移動する。艦隊が足を止め、揚陸艦から各自発進していく。出撃するのはネイビーシールズを加えて再編した俺直率の第一中隊だ。いざ行かんスオムスへ！ってな。

お見舞い、そしてスオムスへ（後書き）

短縮授業も終わり6時間授業が始まったので更新ペースが落ちます。
なるべく早く次話を投稿したいです。

買い出し、そしてスオムスいらん子前編（前書き）

スオムスが舞台です。でも作者はスオムスいらん子を読んだ事が有りません。どうしよう?後、短い。非常に短い。

買い出し、そしてスオムスいらん子前編

スオムスの海岸がみえてきた。ある意味久しぶりの上陸作戦だ。俺は冗談半分で命令を出した。

「上陸用意！」

「「「イエス・サー！」」」

皆も返してきてくれた。ノリの良い隊員ばかりだ。海岸に着き上陸を始める。怪しまれない様に全員が私服だ。いくつかの班に分かれ、必要な物を買いに行く。

俺は湊、フレデリカ、キャスパー准尉、スタング二等軍曹、要するに第一分隊のアルファの面々にフレデリカを足しただけだ。

第一小隊は食材等の買い出し担当で俺達は小麦粉や野菜、肉を確保しに来たのだ。ちなみに第二小隊は医療品、第三はシーツや枕カバーや布、第四はその他だ。近くの草原に運搬用のトラックとハンヴィーを隠して在るのでかなりの量が買えるはずだ。

「取り敢えず小麦粉からだな。」

「何処に在るんですすか？」

准尉が聞いてきたのでこう言ってやった。

「知らん！」

「断言しなくても良いっスよ。」

「うるさいぞ二等軍曹！」

「兄さんの方がうるさいですよ。」

湊に怒られた。悪いのは二等軍曹なのに。

「とにかく私たちは野菜と肉を探しに行くわ。そっちの男三人組は小麦粉よろしく。」

そう言うとフレデリカは湊と共に行ってしまった。

「取り敢えず小麦粉探そうか。」

「「へいへい。」」

先ずは店を探さないと始まらない。

「あの娘達に聞けばどうです？」

准尉がそう提案してきた。

「そうだな、そうするか。」

？？？Ｓｉｄｅ

「パスタ准尉、智子さんにくっつき過ぎです！」

「へっへ～ん。羨ましい？」

「はぁ～」

思わず溜め息が出る。隣の二人のせいだ。何時もこうやって争っている。私はノーマルなのに。そんな時柄の悪そうな三人組が近づいて来る。そのうち二人は左腕に同じ入れ墨が入っている。ギャングだろうか、二人も警戒し始める。ナンパ？それともカツアゲ？だが、かかって来た言葉は意外な物だった。

「小麦粉が大量に売ってる場所知らない？」

「へっ？」

「いや、だから小麦粉。」

小麦粉？

「えぇ～と、こっちの方向に行って三つ目の角を右です。」

「有り難う。おいお前ら、行くぞ。」

そう言って彼らは行ってしまった。ホントに何だったんだろう？

ＳｉｄｅＯｕｔ

彼女達に教えて貰った店に行って小麦粉をばかみたい買った俺達は湊とフレデリカに合流するために移動していた。

そんな時、無線が入る。

「そちらに多数のネウロイが接近中とのことだ。注意しろ。コチラも直ぐにそちらに合流する！」

「了解！」

無線の相手はトラックとハンヴィーのある草原に残してきた旧ネイビーシールズの連中だ。俺は直ぐに命令を出した。

「ラファールアクチュアルから第一中隊各位へ戦闘準備！」

「「「了解！」」」

買い出し、そしてスオムスいらん子前編（後書き）

次回は戦闘です。６時間授業のせいで眠たいです。後、感想を書いて下さるとありがたいです。ただ、誹謗・中傷だけは無しで。意見や提案、キャラ等を募集しています。

買い出し、そしてスオムスいらん子後編（前書き）

疲れた～
なかなか文章が書けないもんです。

買い出し、そしてスオムスいらん子後編

シールズがトラックとハンヴィーを町に移動させるために行動を開始した。車両部隊が来るまでは武器がほとんど無い。先ずは民間人の避難から始めないと。

「ネウロイが来るぞ！早く逃げろ！」

だが誰も信じようとしない。馬鹿がいきなり騒ぎだした、そんな位にしか見てないのだろう。

「後悔しても知らんからな！サージ、シールズは？」

「到着まであと6分！」

「中隊長、こちらツーアクチュアル。誰も信じてくれません。このままじゃ！」

「時間稼ぎをする！航空支援を要請する準備を！」

住民が避難しないなら出来るだけ時間を稼ぎ、被害を減らす事だ。

数分後シールズ小隊が到着した。

シールズは完全武装のため、周辺警戒に当てる。その間にハンヴィーから自分達の武器を取り出す。シールズを含め第一中隊全員が戦闘体制を整えると同時にネウロイの来襲を知らせるサイレンが鳴り出す。やっと住民達が避難を始める。だが、遅すぎる。ネウロイはもうそこまで来ている。

敵は陸戦型のネウロイと空戦型のネウロイの混成部隊だ。

「ラファールアクチュアルから各員、戦闘開始だ。ＲＯＥはガンズフリー、繰り返すガンズフリーだ。撃ちまくれ！」

隊員達が一斉に撃ち始める。ネウロイも攻撃を開始した。

「こちらラファールアクチュアル、航空支援を要請する！対空目標、対地目標を多数確認。座標はＸ１５８４Ｙ３６８５。」

「了解した。ヘリと戦闘機、攻撃機をそちらに送る。５分で着く、持ちこたえろ！」

「了解。ラファールアクチュアルから第一中隊各員へ航空支援機が５分後に来る。それまで持ちこたえろ！」

「「了解！」」

智子Ｓｉｄｅ

先程の三人組が『ネウロイが来るから逃げろ』と叫び始めた。市民達はいきなり馬鹿が騒ぎ始めたと思ったらしい。

だが私達の勘は彼らが本当の事を言っていると告げている。１０分くらいがたち町に警報が鳴りはじめた。市民は皆逃げ出すが、彼らはいっこうに動こうとしない。彼らにも逃げる様にと言おうと近づく。だがいつの間にか彼らの手には銃があった。そして防衛線を築き上げる。自分達を信じなかった市民達をネウロイから守る為に。

ネウロイとの戦闘が始まる。私達も護身用の拳銃は持ってきている。

だが小型以外のネウロイに対しては豆鉄砲だ。それでも私達にも出来る事が有るかもしれない。私達は行動開始した。

ＳｉｄｅＯｕｔ

待ちに待った航空支援機部隊が到着した。艦上での運用を可能にしたＡ‐１０攻撃機が街の外に居る地上型のネウロイを撃破していき、スーパーホーネットはその護衛として空戦型を排除していく。

だが街に入り込んだネウロイ達は俺達が排除するしかない。隣にいたキャスパー准尉がＡＴ‐４をぶっ放すとネウロイは粉々に吹き飛んだ。

「数が多過ぎます！航空支援機はこっちには来ないんですか？」

「街に被害が出過ぎる、俺達だけでやるしかない。」

そんな時先程小麦粉の売っている場所を教えてくれた女性達がこちらにやって来た。

「危険だから早く逃げろ！」

「私達はウィッチです。私達も戦えます！」

「拳銃一つで何が出来る？小娘共は引っ込んでろ！」

ネウロイのビームが彼女達のすぐそばの建物に命中する。

「「「キャアッ！」」」

「ストライカーの無い魔女は戦闘の邪魔だ！さっさと・・・」

振り向いた時俺は絶句した。先程ネウロイにやられた三階建ての建物がゆっくりと彼女達に向かって倒れていくのが見えたからだ。俺は彼女達の方へ走り、三人を突き飛ばす。

その直後、先程まで彼女達が居た場所は瓦礫の山とかした。俺は身体を起こそうとして、脇腹の痛みに気づく。建物に使われていた鉄の棒が刺さっていた。

「ッ～～～！」

声にならない叫びを上げる。だがこんな事をしている場合じゃない、敵はすぐ側まで迫っている。

「中隊長！待ってて下さい、今そっちに行きます。」

「来るな准尉！撃ち続けろ！」

「っ！了解！」

キャスパーが一瞬俺の怒気に怯む。いい子だそのまま撃ち続けろ。

戦っている間に痛みが引いてきた、アドレナリンのせいだろう。ウィッチ達も到着してきたらしい。大型の武器を装備している部隊が急降下爆撃を開始する。そのうちの一人、鼻の上に傷のあるウィッチが三人の所に向かう。

「無事か？」

「そんな事よりあの人が！」

俺の事を心配してくれているらしい。ウィッチ隊の増援も有り戦闘は終了した。

魔女達がこちらに来る。その間に准尉が衛生兵を呼んだ。

「衛生兵！こっちに来てくれ！」

近くに居た衛生兵が直ぐに駆け寄って、応急処置を始めた。

「私達のせいで・・・ごめんなさい！」

黒髪の魔女が頭を下げてくる。他の二人もだ。

「別に構わん。何時もの事だ。」

「でも！」

なお食い下がる彼女にこう言った。

「ならこれだけは覚えてろ、お前達は特別じゃ無い。ストライカーが無ければただの小娘だ。ストライカーが無いなら大人しく逃げろ、足手まといになるからな。」

「隊長、迎えのペイブロウが来ましたよ。帰りましょう。」

俺は二等軍曹の肩を借りて歩き始める。

「待って！貴方の名前は？」

「都筑純一、海兵隊だ。」
そして俺はもう一人、ウィッチに声をかける。傷の女性だ。此処に来る時一瞬下を向き傷を隠そうとしたからだ。

「それと傷のウィッチ、戦士は傷を誇りに思え。その傷の数だけ何かを守り、その傷の痛みだけ誰かの痛みを肩代わりできたって証拠だからな。それに俯いてたら折角の美人が台なしだ。」

その言うと救護ヘリに乗り込み、皆より先に船へと戻るのだった。
帰って、起きたら湊とフレデリカにこってりと絞られるんだろうな。
そんな事を考え、意識を手放した。

買い出し、そしてスオムスいらん子後編（後書き）

半分死んだ状態で執筆したので誤字・脱字が有るかもです。報告よろしくお願いします。

ルーデルの恋、そして事後処理（前書き）

内容はタイトルのまんまです。今日の作者は鬱が入ってます。色々有ったからです。でも俺はへこたれない（多分）

ルーデルの恋、そして事後処理

ビューリングＳｉｄｅ

私達が着いた時には戦闘が始まっていた。ハンナの隊が街に突入していく。義勇中隊とアホネンの隊はその護衛だ。空に見慣れない戦闘機が飛んでいる。

「プロペラが無い？」

「恐らくジェット機。」

隣を飛んでいたウルスラがそう答えた。ジェット機はまだ何処も開発に成功していないはずだ。それなのに目の前で飛んでいるのは紛れも無くそのジェット機だ。一体何処の部隊だ？

数分後、戦闘が鎮静化した。私達は智子達の所に向かう。三人とも無事だった。街に突入したハンナの隊もそこに居たのだが、ハンナの様子がおかしい。

「ハンナ、どうした？」

「その、なんだ・・・」

「もしかして、さっきの男の人に褒められた事が嬉しかったとか？」

ジュゼッピーナがそうハンナに問い掛ける。

コクッとハンナは頷く。心なしか顔が赤い。私と同じくあまり感情を顔に出さない彼女にしては珍しい反応だ。

「さっきの男？」

「さっきネウロイと戦ってた部隊の隊長に褒められたんですよ。傷は戦士の名誉だ、それに俯いてると美人が台なしだって。」

「で、それが嬉しかったと？」

「コクッ」

またハンナが頷く。

「まさかその男の人に惚れたとか～？」

「コクッ」

エルマの問いにまた頷く。

「「「えぇっ！」」」

私も含めてこの場に居る全員が驚いた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

湊Ｓｉｄｅ

ペイブロウがアリアンロッドに到着した。既に医務室は手術の準備を終えている。軍医に傷の具合を簡単に伝え、私も手術着に着替える。兄さんは私が助けるんだ、そう思いながら手術室に入った。傷自体は対した事は無く、輸血と傷を縫うだけで済みそうだ。少し心

配して損した。

「お兄ちゃん、あんまり心配をかけないでくださいね。」

手術も終わり兄さんと二人きりになった時、兄さんの寝顔を見ながらそう呟くのだった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

智子Ｓｉｄｅ

あのハンナ・ルーデル大尉に好きな人が出来た！それだけで一ヶ月分位はビックリした気がする。しかもあの人だ。あの人が言った言葉を思いだす。

『ストライカーが無ければただの小娘だ』確かにその通りだ、私は思い上がっていたのかも知れない。スラッセン奪回の英雄、扶桑のエース、でもそれはストライカーと固有魔法、シールドと魔法力があったからだ。それが無ければただの小娘に過ぎない。

一般兵達は今までそんな状況で、銃と非力な兵器を使ってネウロイと戦って来たのだ。ウィッチも戦っている、だが一般兵達も戦っているのだ。戦闘だけでは無い、補給等の後方支援もだ。ウィッチの中には彼らを役立たずと蔑んでいる者が居るが、彼らが居なければ私達は一ヶ月で戦線の維持ができなくなるだろう。それを彼は気付かせてくれた。今度、彼に会ったら御礼を言わないといけないわね。

ＳｉｄｅＯｕｔ

医務室で目が覚めた。時間を見ると既に深夜だった。水を飲もうとして立ち上がり、水道まで歩いていく。コップに水を注ぎ、一気に飲み干す。冷たい水が喉を潤し、それだけで生き返った気がした。

「んっ、少佐？」

少尉が眠たそう目を擦りながら聞いてくる。

「悪い少尉、起こしちまったか？」

「いえ、少佐。大丈夫です。それより歩いて大丈夫なんですか？」

「傷自体は対した事は無いからな。血を失い過ぎただけだ。」

刺さったままネウロイと戦闘したからな。我ながら無茶したもんだ。

「どうして助けたんです？」

少尉が聞いてきた。

「今日の戦闘か？」

「はい。別に街を見捨てて逃げるという手も有ったはずです。助ける義理は貴方達には無いんですから。」

「勇気・名誉・献身」

「？」

「海兵隊が掲げる物さ。戦いに出る勇気、勝利や勲章、国防の名誉、国と民を守り、大儀に身を捧げる献身ってな。」

この三つは海兵隊に入って直ぐに教わる事だ。

「俺はその三つ目を実行しただけだ。」

「そうですか。すみません変な事を聞いて。」

「別にいい。少尉、明日も早い、もう寝よう。」

「はい。おやすみなさい。」

「おやすみ少尉。」

そして俺達は眠りに着くのだった。

ルーデルの恋、そして事後処理（後書き）

こんなハンナ・ルーデル大尉は如何でしょうか？毎度ながら眠いｚｚｚ～。誤字・脱字の報告よろしくお願いします。

戦闘機、そして救援要請（前書き）

映画を見ながら書いたので短いかも。いや、何時も短いですね。すいません。取り敢えずＦ－２２とＦ－１４そしてこの前出て来たＡ－１０は気にしないで下さいね。アホな作者の妄想の産物なんで。

戦闘機、そして救援要請

朝早くに起きた俺は銃の点検をしていた。

「これで終わりっと。」

暇だ。医務室に俺の私物は銃と装備品しか無い。

「久しぶりに機体の様子でも見に行くか。」

F-14EX、おじさんが使っていた戦闘機だ。映画トップガンに憧れて海軍パイロットになったおじさんはF-14Cに推力偏向ブースターや統合戦闘アビオニクスを搭載して戦っていた。外見こそF-14だが中身や装備は最新鋭戦闘機並だ、F-15Cよりも機体性能が高い。エースだったおじさんが海軍本部に頼み込んでこの機体を用意させた特注品だ。

高校一年の夏休みの時おじさんが戦闘機の基本的な操縦を俺に叩き込んだ。泊まりに来いと言われて行ってみたらいきなりだ。そして免許皆伝した時にこの機体をくれたんだ。何でも本当は息子にあげるつもりだったらしいがおじさんの子供は全員女の子だった。それで俺に白羽の矢が立ったらしい。

もっとも、あまり乗らないんだけどな。陸戦が本職だ、上手い奴らに任せるさ。

機体の簡易整備や点検も終わり医務室に帰ると湊に角が生えていた。

「兄さん何処に行ってたんですか?」

顔は満面の笑みだが、目が笑って無い。

「機体の整備をしてたんだよ。ゴメン、心配かけて。」

俺が言うと湊は諦めた顔をした。

「心配なんてしてません。でも、次からは注意して下さいね。一応怪我人なんですから。」

「イエス・マム！」

「よろしい。」

「そういえば何で此処に？」

「ラル少尉の傷が安定してきたので、車椅子を用意しに来たんですよ。」

少尉の傷もだいぶ良くなって来たようだ。脊髄に損傷が有るから半年位はリハビリをしなきゃならんが、少尉なら大丈夫だろ。

「そうか。なら艦内を案内してやるか。少尉もそれでいいか？」

「はい。お願いします。」

俺は少尉に艦内を案内していった。

艦橋を案内している時だった、通信室が無線を拾った。

『こ…ら…リベ……合衆……駆逐……救援……』

「駆逐艦が救援を求めて居ます。ただ、ノイズが酷く状況が分かりません。」

「艦隊にデフコン1を発令！バトルステーション！」

「アイ・アイ・サー！全艦へコンディションレッド発令！デフコン1だ！」

艦内が慌ただしくなる。艦隊は救援要請が有った方向へ進路を取った。

航空部隊の航続距離に入ると、アリアンロッドとニミッツ級空母二隻から次々と部隊が発進していく。アンタレスとファングクエイク、サジタリウスとエンジェル、この各隊は各空母の航空隊長の隊だ。アリアンロッドは双胴空母だから航空隊長は右舷と左舷の両方にいる。出撃した機体は艦上運用型のラプターと海軍用のライトニング2、スーパーホーネットだ。ラプターは無理矢理改造して艦上運用を可能にしたから、艦上面積の大きいアリアンロッドでしか運用出来ない。主に戦闘機部隊の隊長機に使われる。

艦が近付くにつれ無線がクリアになって来た。

『こちらリベリオン合衆国大西洋艦隊所属、駆逐艦ヘンリー・カーターだ！ネウロイの大規模部隊に攻撃を受けている！至急救援を請う！現在2名のカールストラントウィッチが戦闘中、一緒に居る輸送船には民間人が乗っている。エンジントラブルで身動きがとれない！何処の部隊でも良い助けてくれ！』

かなりまずいな、間に合うだろうか？

「提督、地対空ミサイルで武装した部隊と技術者をヘリで輸送船に送りましょう。」

「わかった。揚陸艦マイアミビーチに通達、第三中隊から人員を出させろ！」

怪我さえして無かったら。俺も出撃するんだが。とにかく、今は彼らの無事を祈るばかりだ。

戦闘機、そして救援要請（後書き）

次回、エロスマンとエセ伯爵登場！なんかこのコンビが好きなんですよね。

救出、そして戦闘終了（前書き）

ポプラン中佐はスルーでお願いします。助ける→惚れられるってパターンが多い気がする。もっと文章力をつけないと。

救出、そして戦闘終了

アンタレス1、ダニエル・スコーピオンＳｉｄｅ

航空部隊が戦場に到着すると、そこは地獄だった。空戦型と海上型のネウロイがひしめき合っていた。ウィッチ二人と駆逐艦二隻でよく此処まで持ったと思う。

「アンタレスリードからアンタレス各機へオール・ウェポンズ・フリー！アタック！」

「「「了解！」」」

他の隊も攻撃し始める。だが対艦装備が無いから海上型に攻撃出来ない。

「アンタレスリードからアリアンロッドへ対艦装備の機体を回してくれ。」

「了解した。スーパーホーネットの増援を送る。もうすぐ艦隊も射程距離に入る、仕事が楽になるぞ。」

「了解。気長に待っとくよ。」

無線を切り、戦闘に集中する。敵の数を減らしていると、エンジェル隊の指揮官、グレイス・オコーネルから無線が入ってきた。

「良い知らせと普通の知らせ、それと悪い知らせどれから聞きたいかしら？」

「良い知らせから。」

「スーパーホーネットが１２機到着して対艦攻撃を始めた。」

レーダーに写っている海上型の数が確かに減っている。

「普通は？」

「艦隊が到着したのと陸戦隊が輸送船に取り付いた。悪い方は敵の増援も来たってことね。艦隊がその相手で精一杯みたい。」

敵は一体どれだけの数を用意したんだ？多過ぎる。

「ただ、増援の方はＶＴＯＬ部隊で対処するって言ってるわ。アリアンロッドとホーキンス、ニューエンタープライズ２の部隊はこっちに来てくれるみたい」。

なら問題ないな。俺達は仕事をするだけだ。先ずは輸送船と駆逐艦、ウィッチを艦隊の方向へ逃がす。

「こちらはアメリカ合衆国海軍即応艦隊旗艦アリアンロッド第一航空隊隊長ダニエル・スコーピオン大佐だ。東に艦隊が居るそちらに進路をとれ。」

『りょ、了解！』

「こちら第三中隊第四小隊、輸送船のエンジンの修理がまだ終わってない！もう少しだけ時間を下さい。」

「了解。時間を稼ぐ！」

民間人を守るのは軍人の仕事だ。それに俺はトップガンだ。レンジャーの連中にカッコ悪いところは見せられん。

弾薬が無くなり空母へ帰艦する。機体の再出撃準備中にアリアンロッドへ無線が入る。

「まずいぞ、船団が大型ネウロイに追いつかれそうだ。航空隊の再出撃準備はまだ終わらないのか？第二陣の航空隊は他のネウロイの相手で精一杯だ！」

再出撃まであと１０分はかかる、間に合わない。その時、格納庫に一人の男が入って来る。右舷の格納庫にあるコンテナが開き黒いＦ－１４が出て来た。その機体はエレベーターに乗り飛行甲板に出ていく。あの機体は一体なんだ？

ＳｉｄｅＯｕｔ

第三中隊から無線が入って来た。かなりまずい状況らしい。俺は格納庫に走り、今朝開けたばかりのコンテナを開く。Ｆ－１４ＥＸに乗り出撃の準備を整え、エレベーターに乗り、飛行甲板に上がる。

「こちらは航空管制だ。そこのＦ－１４、パイロットは誰だ？」

「都筑純一少佐だ。ＴＡＣネームはブラックウインドって事で一つ宜しく。」

「都筑少佐？陸戦隊のはずだろ？何故、戦闘機に？」

管制官は信じられないらしい、別に隠してたわけじゃ無いんだけど

な。

「細かい事は気にするな。出撃の管制を！」

「りょ、了解！」

カタパルトと機体を接続する。

「機体の発進タイミングをそちらに移譲、ユーハブ・コントロール！」

「アイハブ・コントロール！都筑純一、Ｆ‐１４ＥＸ出撃するぞ！」

「グッドラック、ブラックウインド！」

「サンキュー。発進！」

カタパルトが作動し、身体にＧがかかる。機体は無事飛翔した。

ロスマンＳｉｄｅ

船団と共に謎の艦隊に向かって逃げていたとき、大型ネウロイが迫ってきた。私は幼い頃の病気のせいで魔法力が人より少ない。長時間の戦闘なんてとても出来ない。だが既に十時間ぐらい戦っている。ネウロイが輸送船に向かってビームを放とうとする。私はなけなしの魔法力でシールドを張った。一緒に戦っていたクルピンスキー准尉もシールドを張っていた。でもこのままじゃ、私も准尉もやられてしまう。だが、ビームは来なかった。一機の戦闘機がネウロイを攻撃している。黒い機体だ。

その戦闘機は大型ネウロイを破壊すると翼を振って、私達に『ついて来い』と合図してきた。周りを見ると戦闘はほぼ終結していた。私と准尉はその戦闘機について行く事にした。

「大きい！」

艦隊に到着すると巨大な空母が見えた。戦闘機はその空母に着艦した。私達も空母に着艦する。戦闘機のキャノピーが開き、甲板に降り立った彼はこちらに向かって来る。

「大丈夫か？」

彼はそう言ってきた。私には王子様に見えた。もっとも乗っているのは白馬では無く、黒い戦闘機だったけど。

「はい。大丈夫です。」

「あぁ、大丈夫だ。」

「そりゃ良かった。可愛い女の子に一生もんの傷がついたら大変だからな。」

可愛い女の子と言われて顔が赤くなるのがわかる。同性愛者のケがあるクルピンスキー准尉も顔が赤い。彼女でもカッコイイ男の人に褒められると照れるんだな、そう思うと面白かった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

無事に船団が艦隊に合流した。ウィッチの二人はラル少尉の戦友だったらしい。一人消耗が激しかったので今は医務室で再会を喜んでいる。

「まさかお前さんが戦闘機に乗れるとはねぇ。」

話しかけてきたのはホーキンス航空隊長のオリビエ・ポプラン中佐だ。サジタリウス隊の隊長でもある。腕は良いんだが、女好きなプレイボーイだ。

こんな逸話がある、A少尉の部屋からポプラン中佐が出て来ると、隣のB曹長の部屋からうちの第二小隊隊長のエドガー・ジョンソン大尉が出て来て廊下で鉢合わせた。次の日の朝、二人はまた同じ廊下で鉢合わせた。ただA少尉の部屋からはジョンソン大尉、B曹長の部屋からはポプラン中佐が出て来たらしい。全く大した人達だよ。

「昔取ったなんとやら、ですよ。」

「そうかい。ならコッチの撃墜方法も教えないとな。」

小指を立てながらそんな事を言ってきた。

「バカ、善良な若者にそんな事を教えなくていい。」

そう言いながら中佐の頭を叩いたのはカール・ブリッツ中佐だ。ファングクエイク隊の隊長をしている。アリアンロッド左舷側の航空隊長だ。

「そうだ純一、ファングとエンジェルが入れ替わるって知ってるか？」

「いえ、なぜですか？」

「オコーネル中佐がお前の側に居たいからって提督に頼んでな。それで入れ替わるのさ。」

「げっ」

オコーネル中佐は苦手だ。何かと構ってくるし、スキンシップが激しい。しかも彼女がスキンシップした後は必ずフレデリカと湊がムッとする。色々厄介な人だ。ちなみに彼女の隊は全員が女性だ。だから部隊名がエンジェル隊だ。俺にとっては悪魔だが。

「こりゃ、俺が教えるまでも無かったな。」

「？」

「こいつは唐変木か？」

「だな。」

「？？？」

中佐達の言ってる意味を考えながら自室に戻るのだった。

救出、そして戦闘終了（後書き）

ダイナモ作戦はいつ始まるんだろう？まだまだ先になりそうです。

日常、そして回想（前書き）

何となく書きました。フレデリカさんとの馴れ初めです。

日常、そして回想

次の日、陸戦隊司令官執務室で報告書を纏めていると、ドアがノックされる音がした。

「入れ。」

「「失礼します。」」

陸戦隊の誰かだと思ったらラル少尉達だった。

「どうした？」

「これから私達はどうなるんでしょうか？」

ロスマン軍曹の疑問はもっともだ。故郷の事も心配だろうし、自分達がどのように扱われるのか心配なのだろう。

「ダイナモ作戦終了後、お前達は連合軍に引き渡す。それまでの辛抱だ、我慢してくれ。」

「了解しました。」

「それとお前達には部屋が用意される。俺の部屋の隣の空き部屋だ、後で案内するよ。」

取り敢えず俺はデスクワークを終わらせる事にした。

「メガネ、かけるんですか？」

「左目の視力が悪くてな、此処に傷が有るだろ。」

俺は左の眉を指ししながら、そう言った。

「戦闘中に負傷してそれ以来な。」

そう、フレデリカと出会って一番最初の任務の時だ。俺は三人にその時の事を話す事にした。

〜〜〜〜回想〜〜〜〜〜

あれはまだ俺がフォースリーコンに居た時だ。あの時の俺は中尉で一個小隊の隊長だった。そこに新米の准尉だったフレデリカがやって来た。士官学校を卒業したからか、現場主義の俺達とは折り合いが悪かった、まあ未来の司令官様だからな。それに俺より2歳年上だからな。

年下の部下になるのが嫌、というのもあったのかも知れない。（勿論、今は違うが。）

司令官が大切なのはわかってる。だが実際に戦うのは俺達だ。作戦を立てるのはバカでも出来る。だが、それを実行出来るのは限られた人間だけだ。

彼女は確かに優秀だった、だがその働きは機械的だ。つまりマニュアルが全てって感じだ。こういう連中は突発的な事に対応出来ない場合が多い。案の定、初陣でドジを踏んだ。作戦はある将軍を暗殺する任務だった。だがフレデリカのミスで敵にコチラの動きがばれた。

「ＲＰＧ！」

「クソッ！打ち返せ！」

敵軍との戦闘が始まる。ジャングルでの戦闘は敵に分が有る。此処は連中の庭だそれに地の利も有る。潜入するために少人数で来たから戦力も少ない。フレデリカはただ唖然として立っているだけだ。

「准尉、何をしている！打ち返せ、死にたいのか！」

崖からスナイパーが彼女を狙うのが見えた。

「糞が！」

スナイパーがコチラに気づく。脅威の少ない彼女より先に俺を始末するらしい。銃口がコチラを向く。フレデリカも正気に戻りスナイパーに銃口を向ける。敵と彼女が発砲したのは同時だった。スナイパーは射殺された。敵の撃った弾は俺の顔を僅かにそれ、左目の上を掠めていった。血で左目が見えなくなる。後でわかった事だがこの傷が眼球を傷付けたらしい、だから左の視力が悪い。

「グッ！撤退だ！」

俺は痛みに耐えながら、命令を出す。俺達は命からがらそこから逃げ出した、結局任務は失敗に終った。

その後、俺は大尉に昇進すると同時に特別任務中隊を率いる事になった。驚いたのはフレデリカが少尉として俺の補佐官になった事だ。

「あの時はごめんなさい。私が間違ってたわ。」

彼女も反省したらしい。

「反省してくれたのなら良いさ。これからも宜しく。」

「えぇ、宜しく。」

そう言ってフレデリカと握手しあうのだった。

～～～～回想終了～～～～

「まぁこんな感じだな。」

「へぇ～そんな事があったのか。」

クルピンスキー准尉が感心している。

「レディーを助けるのは紳士の勤めだからね。」

「准尉、お前は女の子だろ。」

三人とそんな会話をしながら書類を片付けていく。

デスクワークも終わり三人を部屋に案内する。

「此処がお前達の部屋だ。何かあったら俺の部屋に来いよ。」

「少佐はどうするんですか？」

「仕事も終ったし昼寝でもしようかな。」

そう言って俺は部屋に入るのだった。

日常、そして回想（後書き）

次回も多分、日常編。
最初の任務の後日談も良いな。フレデリカがシュバルツェア・ラファールに正式に入隊するまでの話でも。

続・日常、そして女難（前書き）

明日は学校か。嫌だな。

続・日常、そして女難

クルピンスキーＳｉｄｅ

案内された部屋に入った僕はベッドに飛び込んだ。

「ラル少尉から見た都筑少佐ってどんな人？」

「強くて、優しくて、誇り高い人。それと情に厚い。」

エディータとグンドュラが少佐の事を話し合っている。

「そんなに少佐が好きなら夜ばいでもかけたらどうだ？」

「「なっ！」」

二人は同時に驚きの声を上げる。冗談のつもりで言ったのに本気だと思われたらしい。

「まっ、まだ出逢って間もないのによっ、夜伽の相手なんて！？」

「確かに少佐の事は好きだが、まだそういうのは！？」

最初のがエディータでその後がグンドュラだ。

「二人ともそんなに焦るな、あとエディータ、その言い方だと少佐が好きだと認めた事になるぞ。それにグンドュラ、本音が出てる。」

今まで一緒に戦って来たが、こんな二人を見るのは初めてだ。私も

都筑少佐に興味が湧いてきた。二人をこんなふうに変える男性が。昼寝中なら忍び込もうか、そんな事を考えながら部屋を出るのだった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

目覚まし時計が騒ぎ出す。夕方に起きる為にセットしていたのだ。目覚ましを消すために手を伸ばすが見当たらない。布団に潜りながら手をばたつかせる。フニッとした感触が手に当たる。

？、こんな柔らかい物ベッドの上に有ったっけ？

「んんっ」

妙に艶やかな声が響く。俺は飛び起きた。ベッドを見るとそこには寝息をたてているクルピンスキー准尉が居た。

「なっ！えぇ～～～！」

思わず大きな声を上げた俺は悪くないと思う。だがこれは墓穴だったらしい。

「どうしたのジュン！？」

「どうしたんですか兄さん！」

「どうかしましたか少佐！？」

そしてフレデリカと湊、ロスマン軍曹の三人はベッドの上の准尉をみて固まる。

ギギッと錆びたロボットみたいな音をあげながらコチラに首を向ける三人。顔が般若みたいになっている。

「兄さん、准尉に何をしたんですか？」

「ジュン、貴方ってロリコンだったの？こんないたいけな女の子を連れ込んで、最低ね。」

「少佐がロリコンなら私にもチャンスが有るかも……はっ！私は何を？」

まずいぞ、三人共何か勘違いしている。あとロスマン軍曹は混乱している。

「まっ、待て。俺は准尉に何もしてない。誤解だ！」

「じゃあ何で兄さんのベッドにクルピンスキー准尉が居るんですか？」

俺の方が知りたいよ。騒いでいたせいか准尉が目を覚ました。

「准尉、ジュンに何もされてない？」

「沢山愛してくれました。」

真顔でそんな事を言いやがった。見ただけで状況がわかったのだろう、余計に悪化する様な事をわざと言ったのだ。顔は真顔だが目が笑ってるのと唇の端がヒクヒクと動いているのが証拠だ。

「に・い・さ・ん?准尉はこう言ってますよ?」

「それでも俺はやってない!」

フレデリカがナイフを抜き放って襲って来た。流石に騒ぎが大きくなりすぎたと思ったのだろう。准尉が助け舟をだした。

「ホントに何もされてませんよ。」

「もう、冗談もほどほどにね准尉。」

冗談一つで殺されかけるの俺?悲しくなった俺は飛行甲板に向かい風に当たろうとした。だが俺は厄介な人の事を忘れていたのだ。

四機のF／A‐18が飛んで来た。羽根には天使の翼のマーキングをしている。ニューエンタープライズ2のエンジェル隊だ。艦に着艦するとパイロットが降りて来る。忘れてた、ファングとエンジェルが入れ替わる事を。

「どうした純一?顔色が悪いぞ?」

一緒に居たスコーピオン大佐が聞いてくる。

「大佐、オコーネル中佐が来たら俺は艦橋に向かったと言っといて下さい。では!」

そう言い残して俺は逃げ出した。ちなみにこの後、スグにバレて、彼女に追い掛けまわされた。

何とか夜までオコーネル中佐から逃げ切った俺は風呂に入るべく部

屋に戻って来た。アリアンロッドには温泉が有るし士官の個室にも風呂がついている。今日はどっちを使おうか考えながらドアを開けると、

「お帰りなさい。ご飯にする?お風呂にする?それともワ・タ・シ?」

変態が居た。

「すみません。間違いました。」

俺はドアを閉めた。そしてネームプレートと部屋番号を確認して此処が俺の部屋であることを確認する。

「うん。俺の部屋だ。さっきのは幻覚に違いない。」

もう一度ドアを開ける。

「お帰りなさい。私にする?私にする?それともワ・タ・シ?」

「何で此処に居るんですか中佐。」

やっぱり幻覚じゃ無かったらしい。

「貴方にこの身を捧げに来たのよ。」

「別に要りません。」

「冷たい貴方も良いわ。お姉さん食べちゃいたい。」

身を捧げるのか食べるのかどっちかにしてくれ。どっちも嫌だが。

「取り敢えずお帰り下さい。」

「嫌よ。」

俺はＣＱＣの要領で中佐の動きを封じ、ドアの外に追い出す。鍵をかけドアにトラップを仕掛ける。あの人はピッキングの技術が有るからな、鍵ぐらいじゃ安心出来ないのだ。

案の定、俺が部屋の風呂に入っていると閃光音響手榴弾の爆発音がした。風呂から出ると中佐が伸びている。隣の部屋の三人は驚いたらしいが、他の隊員達は『あぁ、何時もの事か』といった感じだ。近くを通りかかった女性兵士に中佐を運んで貰う。

今日は色々大変だった。フレデリカにナイフを突き付けられるしオコーネル中佐もやって来るし。

「神様、今日俺が何かしましたかね？」

そう呟いて神様が知り合いに居た事を思い出す。ダメだこりゃ。

「まぁ、こんな生活も悪くないな。」

結構自分がこの生活を気に入ってる事に気付き、

「やれやれ。」

と呟くのだった。

続・日常、そして女難（後書き）

グレイス・オコーネル中佐については、とあるのオリアナ・トムソンを想像して下さい。次回は番外編。多分フレデリカさんが主役。内容は前の後書きに書いた将軍暗殺任務の後日談になりそうです。まだわかりませんが。

番外編・フレデリカの記憶（前書き）

舟を漕ぎながら書いたので文章がかなり変になっていると思います。
これを書きながら半分寝てるぐらいですし。

番外編・フレデリカの記憶

フレデリカＳｉｄｅ

輸送船救出作戦から二週間が経った頃、懐かしい物が出て来た。シュバルツェア・ラファール隊結成当時の写真だ。デスクの整理をしていたら、引き出しの奥から出て来たのだ。

「あの時はいろんな事が有ったっけ。」

～～～～回想～～～～～

私のせいで任務が失敗した。あの作戦は別の部隊が引き継ぐらしい。これから司令部に報告書を提出しに行くのだが、その足は重い。司令部に着き、司令官執務室のドアを叩く。

「フレデリカ・ロックウェル准尉、入ります。」

執務室に入るとフォースリーコンの指揮官がいた。

「今回は済まないね、うちの都筑中尉のせいで任務が失敗して。」

「どういう事です？」

「彼からの報告書には自分の指揮ミスだと書いて有るが違うのかね？」

なっ、あの中尉どういうつもりよ。貸しって事？

「いえ、小官のミスのせいです。」

「本当かね？」

「はっ！」

「話しは以上だ、准尉。君がミスしていたとしてもそれは都筑中尉の責任だ。上層部にはそう報告する。御苦労だった。帰って良いぞ。」

結局、私は執務室を出た。恐らく士官学校首席の人間が初陣で任務に失敗した、などとは上層部に報告出来ないのだろう。だから中尉の報告書には嘘が記載されていたのだ。ちょうど目の前を中尉が通る。

「中尉！あの報告書は何ですか？」

「何か不備が有ったか？」

「報告書の内容です。あんな嘘を書いて！」

「嘘？真実しか書いてないぞ。」

あくまでも司令官の意向に従うつもり？

「私のミスなのに、自分のミスって書いたでしょ！それのどこが真実よ！」

「お前をあそこのポジションに配置したのは俺だ。なら俺のミスだ。違うか？」

「本気で言ってるの？」

「ああ。」

彼は本気でそう思っているらしい。馬鹿だ。自分の軍歴に傷が付くだけなのに。司令官の意向も全く関係無いらしい。恐らく司令官はこの報告書を見て、私の失敗では無く、彼の失敗だと思っただけなのかもしれない。

「どうして？」

「指揮官は部下の責任を取るのが仕事だからだ。」

その台詞でこの基地の司令官が言っていた言葉の意味がわかった。

『君がミスしていたとしても、それは都筑中尉の責任だ。』とはこういう意味だったのだ。司令官が保身に走ったと思った私は、自分が恥ずかしくなった。彼は立派な司令官だったのだ。

それと同時にこの男は本当の馬鹿だ、そう思った。そしてこの馬鹿男の副官を勤められるのは、私だけだ、とも。今思えばこの時から私は彼に恋していたのかも知れない。

特別任務中隊が編成される時、私は真っ先に志願した。周りは反対したが、父だけは賛成だった。自分が選んだ道ならそれで良いと言われたのだ。入隊試験を合格した私は、隊長付き補佐官として配属された。彼に会った時、最初にしたのは彼に謝る事だ。気にしなくて良いと言われたが、彼の左の眉に傷が有るのが見えた時、私の心は申し訳ない気持ちで一杯になった。

特別任務中隊では味気無いという事で部隊名をつける事になった。

彼の叔父が海軍のエースでコールサインがブラックウインドだった事から、シュバルツ・デア・シュトュルムかラファール・デ・ノワールの二つの案が出ていたのだが、

「スナイパーが多いし、シュバルツェア・ラファールで良くないか？」

の一言で部隊名が決まった。要するに、スナイパーライフルの頭文字とシュバルツェア・ラファールの頭文字をかけているのだ。結局ドイツ語とフランス語が混じった名前になったが皆、結構気に入ってるらしい。

部隊が編成されてから二ヶ月経った頃、父がお見合いを薦めてきた。何でも将来有望な海兵隊員らしい。父の友人の養子だそうだ。私は嫌がったのだが、一度だけでも良いからと言われ、結局会う事になった。お見合い会場に行くと、そこに居たのは都筑大尉だった。

「何で此処に？」

「義父に言われてお見合いに来ただけだ。少尉は？」

「貴方と同じよ。」

結局互いに親の顔を潰す訳にはいかないのでお見合いはすることになり、互いに幼い頃の思い出や、趣味について話し合った。ただ、彼がアメリカに来た理由は話してくれなかった。今でこそ大抵の事は話してくれる様になったが、この時はまだ完全に私に心を開いてくれていなかったらしい。

お見合いも終わり私は家に帰る事にした。たまには母の顔が見たくなったからだ。

「どうだった、今日のお見合いは？」

「彼は私の隊の隊長なんだけど……」

「ふむ。知り合いとお見合いしてもあまり意味は無いか。」

「知らなかったの？」

「ああ。ウィリアムが日本から連れて来て海兵隊になった、将来有望な日本人の養子、ぐらいしか知らなかったよ。まさかお前の上司だったとはね。そうそう、海軍と海兵隊でお前の隊を運用する艦隊の編成案が出ていてね、私が艦隊司令になりそうだ。」

初耳だった、専用の艦隊が用意されるなんて。今日は色々驚いた。彼が養子だった事や艦隊の事など、本当に色々だ。また今度、湊に聞いてみよう。

後日、彼がアメリカに来た理由を湊から聞いて、更に驚いたのは秘密だ。

～～～～回想終了～～～～

「ホントに色々有ったわね。」

そう呟きながら写真を引き出しに戻す。もうすぐ、連合軍によるダイナモ作戦が始まる。それに向けて準備しないと。そう思いながら仕事に戻るのだった。

番外編・フレデリカの記憶（後書き）

次回、ダイナモ作戦！（多分）

ダイナモ作戦、そして別れ前編（前書き）

書いてる途中で装甲車のストライカーとストライカーユニットを混同しそうになりました。相変わらず短いです。あと、お気に入りに入れてくれた方々に感謝です。

ダイナモ作戦、そして別れ前編

ダイナモ作戦前日、分隊長以上の指揮官が作戦会議室に集合していた。俺達は昨日の艦長、中隊長以上の者が参加した会議で、海岸に強襲上陸、防衛ラインの確立、民間人のピストン輸送という作戦を立てていた。それを説明する為に分隊長以上の指揮官を召集したのだ。

「先ず陸戦隊が海岸に強襲上陸し、第一、第二、最終防衛ラインを築く。第一防衛ラインには第一中隊と第四中隊が布陣し、可能な限り時間を稼ぐ。第二は残りの中隊だ。最終防衛ラインに関しては迫撃砲と榴弾砲、自走砲、多連装ロケット砲が布陣し、砲撃支援をする。戦闘車両隊は各歩兵中隊の援護だ。」

「航空支援は来てくれるんですか？」

陸戦隊の一人が、質問してきた。

「航空支援は艦隊に所属する全ての航空機、ヘリが来てくれる。ただし、輸送ヘリは別だ。それと輸送車両もな。輸送船の護衛は連合軍のウィッチに任せるさ。」

「艦隊からの支援は？」

「艦隊からの支援はミサイルと砲撃支援だ。」

「民間人の輸送手段は？」

戦車小隊の隊長が聞いてきた。

「艦艇は揚陸艦とＬＣＡＣ、内火艇の全てを使う。」

「他は？」

「輸送ヘリ全機だ。地上部隊はストライカーとＬＡＶ‐２５、トラックを使って前線から艦艇まで民間人をピストン輸送する事になる。また、ＡＡＶ７Ａ１等の水陸両用車両は艦艇と共に行動しろ。」

フレデリカが質問してきた。

「民間人の避難後は？」

「我々も揚陸艦や各艦艇に戻り、退却だ。だが退却するのは一番最後だ中尉。我々が先陣を切り、我々がしんがりを勤める。海兵隊らしくな。」

「了解しました。」

彼女は頷くと席に座った。

「他に質問は？無いようなら解散だ。」

誰も手を挙げ無い。

「ディスミス！」

各隊長は会議室から出て行く。今のうちに俺も装備を整えるか。今回は俺も陸戦隊だ。怪我はまだ完全には治って無いが仕方ない。俺は自室へと足を運び装備を選定するのだった。

ロスマンＳｉｄｅ

ついにダイナモ作戦が始まった。ダンケルクの海岸に様々な艦艇が集まっている。大は戦艦、小は漁船まで本当に色々な船が居る。恐らく付近にいた艦艇を全て集めたのだろう。陸戦隊がダンケルクから少し離れた海岸に上陸していく。素人でもわかるくらい部隊展開が速かった。

「流石は世界最強の特殊部隊だ。」

私の隣で艦隊の指揮を執るロックウェル提督がそう感嘆の声を上げる。

民間人が次々とダンケルクにやって来る。だが、ネウロイもその後ろから大軍で迫ってくる。艦隊の戦艦が砲撃支援を開始する。第一防衛ラインがネウロイとの戦闘を開始した。

此処で…空母の艦橋で戦闘を見ているだけなのはもどかしかった、他の二人もそうらしい。この艦はジェット機の運用を前提として設計されている。だからストライカー発進装置なんて物は無い。だから私達は此処で見ている事しか出来ない。私に出来るのは祈る事だけだ。あの人が無事に生きて、この艦に還って来ることを。

ＳｉｄｅＯｕｔ

「民間人を載せたヘリの第一便が離陸！」

「了解だ。そのまま敵を押さえ込め！」

ネウロイとの戦闘が開始して１５分が経った。連合軍も戦闘に参加

してるから、今までよりはまだ楽だ。

「輸送車両隊ならびに水陸両用車両隊が出発！」

次々と民間人を載せた部隊が出発して行く。自由ガリアからブリタニアはすぐ近くだ。第一便のヘリもすぐに帰って来てくれるだろう。

「ネウロイの増援！中型、多数！」

「戦闘ヘリとストライカー、戦車に攻撃させろ！」

カールストラントが陥落した為、敵の数が多い。ダイナモ作戦が終われればガリアも陥落するだろう。ブリタニアはかなり危うくなりそうだ。

「ヘリ第二便到着！民間人を誘導中！」

「敵の増援、更に来ます！」

「第五便を送り出すまで此処で踏ん張るぞ！Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！（センパーファーイ！）」

「「「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！」」」

アメリカ海兵隊では無い第二、第三、第四中隊までも叫んでいる。皆の心が一つになった証拠だ。来い、ネウロイ共！それぐらいの増援で俺達が引くと思ったら大間違いだ。

ダイナモ作戦、そして別れ前編（後書き）

海兵隊のモットー、Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！（常に忠誠を）をアメリカのドラマ、ＮＣＩＳ主人公のギブスが言うと物凄くカッコイイ。

ダイナモ作戦、そして別れ後編（前書き）

M2とM3の違いは歩兵戦闘車両か偵察車両かです。

ダイナモ作戦、そして別れ後編

第五便が離陸した。

「此処から撤退するぞ！第四が下がり、残りは援護、そして第一が下がる時は第四が援護しろ。これを１００ｍ間隔で繰り返せ！」

第二防衛ラインは３ｋｍ後方だ。レンジャーと合流すればかなり間時間が稼げる。俺の合図でＭ２ブラッドレーと3ブラッドレーが援護射撃を開始する。それと同時に第四中隊と戦車隊が後退する。

「第四中隊が援護射撃してくれてる間に走れ！」

俺達第一中隊も後退を始める。２０分後、第二防衛ラインに到着した。弾薬補給の為俺達は一旦休みだ。航空支援機がネウロイを爆撃していく。それでもネウロイの進撃は止まらない。

「ラファールアクチュアルから戦艦隊へ艦砲射撃を要請する！座標はイエロースモークでマークして有る。盛大な花火を打ち上げてやれ！」

「了解。３０秒で着弾する、待機せよ。」

砲撃がネウロイの群れのど真ん中に着弾する。

「ファ〇キン・インディペンデンス・デイ・ウーラー！」

隣に居た兵士の一人が叫ぶ。砲撃や爆撃をアメリカ独立記念日の花火に例えたスラングだ。くそったれという言葉が付くのはご愛嬌だ。

砂煙りが晴れると目の前に居たネウロイの一群が丸ごと居なくなっていた。

「最高だな！お前達はどうだか知らんが、今のでやる気が出たぞ！海兵隊、ウーラー！」

弾薬の補充も終わり再び戦闘に参加する。民間人もほとんどブリタニアに脱出出来たはずだ。後は撤退準備が整うまで耐えるだけだ。

「こちら火力支援班、最終防衛ラインは現在撤退準備中だ。火力支援はもう出来ない、幸運を。」

「了解。」

通信を終えると艦隊から無線が入って来た。

「現在、最後の民間人を揚陸艦に載せているところだ。艦隊に戻って来い、民間人と一緒に回収する。」

「スペースは有るのか？」

「ああ、大丈夫だ。かなり余ってるよ。」

「了解。艦隊に戻る。」

俺は全部隊に撤退を命じた。

ラルＳｉｄｅ

あの人達が艦隊に戻って来た。揚陸艦からヘリで彼がやって来る。

「ただ今戻りました。」

提督に帰還を報告している。提督は頷くと艦隊にブリタニアへ向かって進路をとる様に命令した。

ブリタニアに着いた。民間人を降ろすと、連合軍の船に囲まれた。

「こちらは帝政カールストラント海軍所属、戦艦ビスマルクだ。所属を明かされたし。」

「我々はアメリカ合衆国海軍即応艦隊、並びにアメリカ合衆国海兵隊特別任務中隊だ。」

ビスマルクの無線からざわめきが聞こえる。彼らからしてみれば謎の国の謎の艦隊だ。無理もない、事情を知る私達ですら謎の存在なのだ。

「我々はカールストラント空軍のウィッチを三人預かっている。今からそちらに返還したい。」

都筑少佐がビスマルクにそう告げる。

「わっ、わかった。ビスマルクに直接寄越してくれ。」

「それとリベリオン合衆国海軍の駆逐艦ヘンリー・カーターも返還したい。」

「わかった。」

私達はアリアンロッドの甲板に来ていた。リベリオン海軍に駆逐艦を返還し、次は私達の番だ。ヘリに乗り、ビスマルクを目指す。

ビスマルクに着いた時、待って居たのは武装した兵士達だった。

「彼女達が預かっていたウィッチだ。」

少佐はそう言うと私達をビスマルクの兵士に預け、ヘリに戻ろうとする。

「都筑少佐！」

私は彼を呼び止める。彼はヘリのパイロットに『少しだけ待ってくれ』と頼むとこちらにやって来て、

「グンドュラ、お前は良い指揮官になる。実力と人望が有るからな。だが、無茶はするな。先ずは傷を癒せ。」

「ヴァルトルート、輸送船を助けた時、お前の戦いぶりを見ていたが前に出過ぎだ。仲間と協力して戦え、チームは一つの生き物だ。後は防御も忘れるなよ、死んだら元も子も無いからな。それさえ出来れば本物のエースだ。」

「エディータ、お前は良い教官になる。何でも吸収するし、教えるのも上手だ。後に続く者達を育てろ。魔法力が少なくても、それなら出来るだろ?後輩に戦い方を教えてやれ。」

私達一人一人に声をかけてくれた。そして今度こそ、ヘリに戻って行く。ヘリに乗る前に彼は振り向き、こう言い残した。

「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！」

ヘリがアリアンロッドに帰投していく。私達はヘリを見送りながら、少佐と過ごした日々を思い出していた。また何時か会えると信じて。

ＳｉｄｅＯｕｔ

アリアンロッドに帰ると連合軍が砲塔をこちらに向けてくる。やはり警戒されているらしい。

「民間人やウィッチを助けてくれた事は感謝する。だが、君達が我々の味方という証拠は無い。」

まずいな。数の上では向こうが有利だ。

「どうします？」

「リベリオン合衆国に行こうと思う。そろそろ安定した揺れない寝床が欲しいからな。」

ダグラスはリベリオン合衆国に行く事を考えているらしい。無線で全隊員にそれを知らせる。反対者はいなかった。

「我々はリベリオン合衆国へ向かいたい。我々はリベリオン海軍への参加を希望する。」

一時間後、駆逐艦ヘンリー・カーターを含むリベリオン艦隊と共にリベリオン合衆国へ向かう旨が連合軍より申し渡された。かくして俺達はリベリオン合衆国へ進路をとるのだった。

ダイナモ作戦、そして別れ後編（後書き）

学校が休校になったからいっぱい書くぞ！と思ってた自分が懐かしい。ほんの十時間くらい前なのに。次回はリベリオン編です。

リベリオン軍へ、そしてスタイル抜群のウサギ（前書き）

短い。あと解りづらい。

リベリオン軍へ、そしてスタイル抜群のウサギ

ブリタニアから大西洋を越え、リベリオン合衆国首都であるワシントンＤＣに到着した。

俺は今、ブルードレスを着用している。これからリベリオン大統領と海軍長官に会うのだ。

大統領執務室のドアを叩く。

「入りたまえ。」

「失礼します。」

ダグラスと共に執務室に入る。

「アメリカ合衆国海軍即応艦隊艦隊司令、ダグラス・リチャード・ロックウェル中将です。」

「アメリカ合衆国海兵隊特別任務中隊中隊長、都筑純一少佐であります。」

大統領と海軍長官に自己紹介をする。

「私がリベリオン合衆国大統領のテオドール・フランツだ。」

「海軍長官、ジェームズ・カニンガム元帥だ。」

違いの自己紹介が終わり、本題に入る。俺達はリベリオン軍に参加

したい事を二人に話した。

「君達の話しはわかった。良いだろう参加を認めよう。」

「宜しいので？」

「海軍長官、味方は多い方が良い。それに彼らは信じるに値する人間だ。」

大統領と海軍長官との会談が終わる。俺達はリベリオン合衆国海兵隊として再出発する事になった。艦隊はリベリオン海軍に編入される。ただし、立場はあまり変わって無い。アメリカからリベリオンに所属が変わっただけだ。今までどうりに艦隊とワンセットで戦う事になる。

会談の二週間後、俺は長官に呼ばれていた。今後の事や、今までとの相違点の説明を受けるためだ。

今までと違うのはウィッチが三人付くのと、ほとんどの隊員が一階級昇進した事、それに俺達が持っている勲章がアメリカからリベリオンの物に変わる事だ。俺も議会特別名誉勲章とシルバースター勲章、ブロンズスター勲章、パープルハート勲章がリベリオンの物に変わった。ちなみに特別名誉勲章はフォース・リーコン時代に敵の野戦基地をスポッター無しの狙撃で制圧した事に対して贈られた物だ。

「三人のウィッチの内の一人は既に此処へ来ている。他の二人はフィラデルフィア郊外にある基地に居るから、明日迎えに行く様に。いずれも陸軍のウィッチだ。」

長官が言い終わると同時に、ドアがノックされる。

「入れ。」

「シャーロット・E・イェーガー少尉入るよ。」

入って来たのはとても中学生とは思えないスタイルのウィッチだ。

「イェーガー少尉、こちらが今日から君のボスになる都筑純一中佐だ。」

「よろしく、イェーガー少尉。」

「こちらこそ、よろしく。」

「自己紹介が済んだなら早速、出撃の準備に取り掛かってくれ。カールストラントが落ちた今、スオムス方面は危機に晒されている。一刻も早く支援が必要だからな。残り二人のウィッチが合流し、準備が整い次第出発してくれ。」

「アイ・アイ・サー！」

長官と別れ、イェーガー少尉と共にアリアンロッドへ向かう。アリアンロッドは現在、ストライカー発進装置の搭載工事を行っている。少尉と格納庫に入ると、格納庫は喧騒に包まれていた。

「メビウス隊のミサイルはまだか！」

「スパホのエンジン周りの装甲の予備は？」

「３０ｍｍの弾丸の入ったコンテナを早く持って来い！」

近くに居た整備士に聞くと、ジョンがさっき補給物資を運んで来てくれたらしい。それで格納庫が慌ただしいのだ。

「なぁ、この戦闘機プロペラが無いんだが。」

少尉が不思議そうに聞いてくる。

「コイツはジェット戦闘機だからな。」

「最高速度は？」

何故か少尉の目が輝いている。

「スーパーホーネットは、たしかマッハ１．８＋だな。」

「速ぇ～。なあ、乗せてくれよ！」

「ダメだ。」

そう言うと少尉はしょげた。

「じゃああっちの黒いやつはどのくらい出るんだ？」

「マッハ１．７＋だ。ちなみに俺の機体な。」

「こっちも速いな。うぅ～、乗ってみたい。」

「俺の機体で良いなら、機会がある時にな。」

それを聞いた瞬間、少尉が復活した。

「約束だからな！」

「はいはい。」

どうやら少尉は速い物が好きらしい。

格納庫を後にし、艦内や彼女の部屋を案内する。部屋は以前ラル少尉達が使っていた四人部屋だ。四人部屋と言っても相当広いんだが。

案内が終わり、自室に戻った俺は疲れが溜まっていたのだろうか？そのままベッドに倒れこんだ。

リベリオン軍へ、そしてスタイル抜群のウサギ（後書き）

配属される残りの二人のウィッチはオリキャラの予定。スオムスに着くと更にオリキャラを追加します。（多分…）オリキャラ達はあくまで予定です、出来たら良いな～程度の。

新しい仲間、そして姉妹（前書き）

寝たら死ぬぞ！なんて言われても眠いもんは眠いのですよ！偉い人にはそれが分からんのです。つまり、今とっても眠いんです。誤字・脱字があるかもしれません。

新しい仲間、そして姉妹

俺は今、ハンヴィーに乗りフィラデルフィアへ向かっている。一応正装…つまりブルードレスで来ている。
陸軍基地に着き、基地司令にウィッチを引き取りに来た事を伝える。

「都筑純一中佐です。ウィッチ二名を引き取りに参りました。」

「今は昼時だから食堂に居るだろう。二人とも優秀なウィッチだ。ただ…一人、姉の方が病気で言葉が出づらくてね。意思の疎通が難しいかも知れない。」

基地司令と別れ、食堂へ向かう。俺は一人の少女の前の席に座り、尋ねた。

「君がロザリンド・ロサレス少尉か？」

コクンと彼女は頷く。

「リベリオン合衆国海兵隊特別任務大隊司令官、都筑純一中佐だ。君と妹さんは俺の隊に転属になる。来てくれるな？」

彼女はまた頷く。ちなみに第一から第四までを大隊として編成し直した。まぁ、各中隊長は今までどうりなんだけどな。

「お姉ちゃんその人誰？」

食堂へもう一人入ってくる。恐らくもう一人のウィッチ、妹のジェニファー・ロサレス准尉だろう。ロザリンドは妹に手話で説明して

いく。

「この人が新しい私達の隊長、ねぇ。正確には航空隊所属になると思うんだけど。」

「「！」」

二人とも俺が手話を理解出来たのにビックリしたらしい。俺も二人に手話で話す。

『ウチの隊はハンドサインの一環で手話を使ってるんだよ。』

『そうだったんですか。』

『スゴイです、隊長さん。』

二人とも手話で返してくれる。俺は二人に荷物をまとめ、出発する準備する様に言った。期間は二日間だ。

一日目の昼、昼食を食べる為にウィッチ用の食堂へ行くと、

「ちょ！大将ダメですよ、やめっ！」

「良いではないか、良いではないか。」

変な声が聞こえてきた。正直、入りたく無い。だが、此処に入らないとメシが食えない。

「えぇい特別名誉勲章受章者が何を怖じけづく！」

そう自分に言い聞かせ、食堂に入ると百合百合しい空気が流れてい

た。

「……」

「へっ！きゃ～～！」

俺は金髪の子に殴られる。何か最近女子に殴られるの多いな～なんて事を考えながら意識を手放した。

ジェンタイルＳｉｄｅ

ジェーンがかなり焦っている。

「大将まずいですよ！佐官ですよ、名誉勲章受章者ですよ！」

「んっ、私がやったわけじゃない。」

「大将～！」

確かにいきなり入って来た彼も彼だがそれを殴ったジェーンも悪い。

「ボブ、ショーン、ビル、行かないでくれ。俺を置いて行くな……」

不意に彼の寝言が聞こえてきた。死んだ仲間だろうか？何人かの名前を呟いている。

戦争で沢山の兵士が命を落とした。彼も仲間を失った一人なのだろうか？

ロザリーとジェニーが食堂に入って来る。もうすぐ配置換えで別の

部隊に行く事になる。少し寂しくなるな……

「隊長!?どうしたんですか?」

ジェニーが声をかけるが反応が無い。ロザリーは心配そうにジッと見つめている。二人の新しい隊長らしい。彼になら二人を預けても大丈夫そうだと思った。そして彼の指揮なら従っても良いとも。

ＳｉｄｅＯｕｔ

ラルＳｉｄｅ

ブリタニアへ渡った私はＪＧ５２のメンバーと再会していた。皆、私の生還を喜んでくれている。そんな中、バルクホルンが『あの部隊と行動を共にしていたなら、《Ｊ・ＴＵＺＵＫＩ》という人物を知らないか?』と聞いてきた。

「知ってるよ。色々とお世話になった。」

「本当か!彼は今何処に?」

「リベリオン合衆国だよ。」

シュバルツェアラファール隊はリベリオン軍に編入されたらしい。リベリオン軍にいる知人のジェンタイルからの手紙に書いてあった。

「リベリオンか遠いな。」

「彼に何か用が有るのか?」

「妹を助けて貰った礼を言いたいんだ。」

何でもカールストラント撤退戦の最中に妹のクリスを助けて貰ったらしい。私が彼と出逢った日だ。

「何時か会えるさ。お互いが生きている限り。」

これはバルクホルンにも言い聞かせると同時に自分にも言い聞かせているのだ。都筑隊長、貴方は今、何をしていますか？早く…会いたいです。

ＳｉｄｅＯｕｔ

目を覚ますと、食堂の天井が見えた。頭の下は床ではなく何か、ふにっとしたものだ。どうやら誰かがひざ枕してくれているらしい。

「んっ、目を覚ました。」

知らない女の子だ。

「君は？」

「ドミニカ・ジェンタイル中尉。」

「済まないな中尉、迷惑をかけたようだ。」

俺は立ち上がり自室に戻ろうとする。だが、中尉がそれを止める。

「あの二人、此処に来る前の配属先でイジメを受けてた。中佐の所は大丈夫か？」

「大丈夫だよ。イジメるやつが居たとしても俺が止める。」

それを聞くと安心したのか服から手を離してくれた。『仲間思いの良いウィッチだ』と褒めて頭を撫でてやると顔を赤くして、

『ありがとう』

と言い、食堂から出て行った。どうやら照れたらしい。

結局食堂でメシにありつけ無かった俺は与えられた部屋でレーションを食べる事にした。何故か姉妹が部屋のベッドで寝ている。俺に何か用事があって、待ってる間に寝ちまったのか？まぁ良い、取り敢えずメシを食おう。腹が減って死にそうだからな。

ベッドで寝ている二人は過去にイジメを受けていたとは思えないほど幸せそうに寝ている。

イジメの理由は多分、障害者に対する偏見と彼女達の能力に対する嫉妬だろう。彼女達は優秀だ。陸戦ストライカーから空戦ストライカーまで使いこなす。書類を見たがかなりの戦果を挙げている。周りのウィッチも嫉妬したのだろう。そんな彼女達の一人が病気でしゃべれ無いと知った時、周りのウィッチ達はそこに付け込んだ。そこから嫌がらせが始まったのだろう。

優秀なのも大変だな。才能が有るのが必ずしも幸運とは限らない。生憎、俺は凡人だが。

二人が目を覚ます。

「隊長！良かった、目を覚ましたんですね。」

ジェニファー准尉いわく、姉妹で食堂に入ったら俺がＫＯされていて、先程のジェンタイル中尉に介抱を任せたらしい。ロザリンド少尉も心配そうな目で見つめてくる。

「心配かけて悪かったな。」

ロザリンド少尉が手話で『無事で良かった』と言ってきてくれた。何だろう？親を心配する娘を見てる気分だ。二人に、本日二度目となる頭撫で撫でをしてやると、気持ち良さそうにほお擦りしてきた。猫みたいだな、なんて事を考えながら彼女達が再び眠りに落ちるまで、頭を撫で続けるのだった。

新しい仲間、そして姉妹（後書き）

次回予告！予定は未定。つまり何も決まってない。

移動、そして日常（前書き）

なんか妹の友達が泊まりに来ていて、気を遣って疲れました。風呂上がりにパンツ一丁で居られ無いなんて

移動、そして日常

三人のウィッチを迎えた俺達はスオムスへ向かっていた。ジェンタイル中尉達もブリタニア戦線に向かったらしい。スオムスか、あのウィッチ達は元気かな？

リベリオン本国からの命令はスオムス軍最高総司令官マンネルハイム将軍に従え、との事だ。

俺達は連合軍では第５００統合戦闘海兵団として編成される。世界各国の陸、海、空軍と海兵隊から人員が派遣され、遊撃隊として各地を転戦することになる。

「フィンランドか…寒中装備の準備は出来ているのか？」

「問題有りませんよ。迅速・丁寧・確実がウチの売りですから。」

「そうか。それで？」

「それで…とは？」

ダグラスが意味不明な質問をしてくる。

「どんな娘が好みなんだ？」

いきなり何を聞き出すんだよこのオヤジは。

「別にそういうは……人並みに興味は有ってもこういう職業ですし。」

「提督、陸戦隊長殿はおモテになるので、その質問は余り意味が無いのでは？」

レーダー担当の大尉がダグラスにそう告げる。

「俺が？彼女居ない歴イコール年齢の男だぞ。」

「あぁ？ふざけんなよ、可愛い女の子達とイチャイチャラブコメしやがって！この世の女は全部俺の物ってか？このリア充野郎！」

大尉がそう叫ぶと艦橋にいる兵士達も口々に叫び出す。

「どういう事だ？」

「提督！都筑中佐はかくかくしかじかなんです。」

大尉がダグラスの耳に何事かを呟く。

「何、本当かね大尉！」

「はい提督！間違い有りません！」

「まずいな、フレデリカの敵は多い……か。」

ダグラスが何か呟いている。嫌な予感がする。何かこう全身に身の毛のよだつ何かが。

「「へぇ～可愛い女の子とイチャイチャラブコメ（ですか）ね～」」

後ろから鬼も逃げ出す様な殺気を感じる。早く逃げないと、と思いながらも身体が動かない。俺は二人に連行されたあげく、尋問された。その後、誤解を解くのに一時間もかかった。

ほとんど拷問に近い尋問から解放された俺は艦内食堂へ来ていた。ロサレス姉妹もこの部隊にかなり馴染んできたらしい。今も陸戦隊の女性達と楽しそうに話している。姉のロザリンド少尉も大丈夫そうだ。

「腹減った～、おやっさんメシ～」

イェーガー少尉も食堂にやって来た。作業着を着てるから大方ストライカーユニットの整備にでも行っていたのだろう。

「三人共、ウチの部隊にかなり溶け込んできたな。」

『はい。皆さん優しくしてくれます。』

「此処に人達は面白い人ばかりですから。」

「いや～、整備士の話してくれるエンジンの構造とかは参考になるよ。私のストライカーも、もっと速くなりそうだし。」

三者三様の反応を見せてくれた。馴染んでくれるのは良いことだ。

「坊主、メシは何にするんだ?」

「豚キムチ定食でよろしく。」

「あいよ。ちょっと待ってな!」

ウチの隊……艦隊も含めてだが、様々な人種が居るため食堂のメニューも様々だ。世界のあらゆる料理が有る。なかでも豚キムチ定食は俺のお気に入りだ。

「はいよ、お待ち！」

おやっさんが定食を持って来てくれた。ロザリンド少尉がジッとこちらを見ている。

「どうした？」

『その料理、初めて見ますけど扶桑の料理ですか？』

「いや韓国って国の……そうかまだお前達は知らないのか」

「「「？」」」

俺は三人に別の世界から来た事を話していく。

『そう……だったんですか』

「大変だったんですね。」

「なるほどな～」

三人共納得してくれたらしい。

「んで、話を戻すと朝鮮半島の保存食に豚肉を足して炒めた料理だな。一応にほ……扶桑の料理だったはずだ。」

ロザリンド少尉が物欲しそうに見ている。

「食べてみるか？」

ロザリンド少尉は頷く。俺は箸でご飯と豚キムチを挟み、ロザリンド少尉の口へ持って行く。つまり『アーンして』の状況だ。少尉は顔を赤くしながらぱくついてきた。

「どうだ？」

『美味しかったです。』

「だろ、おやっさんの豚キムチは世界一……は無理でもトップクラスの味だ。」

「悪かったな世界一じゃ無くて。」

おやっさんとふざけあって居ると、

「あれ～お姉ちゃん、さっきの間接キスじゃない？」

ジェニファー准尉がロザリンド少尉に聞いていた。少尉は顔を更に赤くする。耳まで真っ赤だ。

『べっ、別にそういうのじゃ……』

「そうだぞ准尉、別に回し飲みするぐらいなんだから箸ぐらいで騒がんでも……」

「はぁ～中佐、いくらなんでもデリカシーが無さ過ぎですよ。」

女心が分からんのは、基本的に男所帯で暮らす海兵隊員の性だ。俺が何の事か分からないという顔をすると准尉は呆れた顔をした。

「中佐を好いている女性の敵はまず、中佐の唐変木から……か。頑張ってお姉ちゃん。」

「？」

全く女の子っていうのはわかりづらい。そう思いながら俺は、豚キムチ定食を食べるのだった。

移動、そして日常（後書き）

次回辺りにスオムスに着ければ良いな～

二人のスナイパー、そして偵察前編（前書き）

ヘイヘとコルッカはＷｉｋｉでシモヘイヘで探せば出て来ます。

二人のスナイパー、そして偵察前編

スオムスに到着した俺達はマンネルハイム将軍が指揮を執っている前線基地へと向かってヘリを飛ばしている。スオムスの戦場は内陸地だ。そのため、陸戦隊とウィッチ、航空隊だけで向かっている。

航空隊もＶＴＯＬとヘリ部隊だけとなっている。これは航空隊が抜ける事による艦隊の戦力低下と向こうの基地にジェット戦闘機が離着陸出来る滑走路が有るかどうか分からなかったからだ。

「あとどのくらいだ？」

「５分です！」

あと５分か……敵の妨害や自然の猛威に晒さらされたりしなかったから意外に早く着くな。

「やっぱ、寒いな。」

「イェーガー、まだ秋だからマシなほうだ。冬になったらもっと寒くなる。」

「隊長さんは大丈夫なんですか？」

ジェニファー准尉はあまり俺が寒がっていないのが不思議らしい。

「海兵隊は世界各地に派兵されるからな、砂漠からツンドラ地帯まで戦える様に訓練されてるのさ。」

『すごいです。』

「お褒めにあずかり光栄の到り」

執事の真似をしていると、ヘリのパイロットが声をかけてきた。

「ふざけてないで、あと１５秒！」

ヘリがカウハバ基地に到着した。

「ファストロープ！」

ヘリからロープを下ろし、ロープ降下の態勢をとる。これはヘリが着陸する時間を省くためだ。ヘリはまだ軽車両隊や残りの人員を運ぶ役目がある。部隊展開は速い方が良い、少しでも時間を省きたい。そのためのロープ降下だ。

「ＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！」

ペイブロウに乗る兵士達がロープで地上に降りていく。ロサレス姉妹とイェーガー少尉にもロープ降下のしかたは教えてある、彼女達も無事に降下した。最後に俺が降りるとヘリはロープを切り離し艦隊へ戻って行く。

「君達が第５００統合戦闘海兵団かね？」

いかにも将軍といった感じの初老の軍人が聞いてくる。

「はっ、小官は第５００統合戦闘海兵団、陸戦隊司令官の都筑純一中佐であります！」

「良く来てくれた。私がスオムス軍最高総司令官のマンネルハイムだ。」

「よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく頼む。」

将軍の執務室で現在の状況や今後の行動予定等を聞いた後支給された官舎へ向かい、荷物の荷解きを行った。

「中佐、戦闘車両隊は2時間後に到着予定です。歩兵は先程着いたヘリで全員到着しました。」

「了解だ。お前も荷解きしとけ。」

「イエス・サー」

伝令に来た第一小隊第一分隊所属のリー・ジェシン二等軍曹を帰し、デスク周りの整理をする。

俺以外にも、キャスパーや他の連中、さっきのリーも含めて陸戦隊はレンジャーの隊長以外は全員階級が上がっている。ちなみにレンジャーの隊長だけ昇進しないのは、すれば大佐になり、指揮系統が変になるからだ。中佐が大佐に命令するのは変だからな、同じ階級なら問題無いだろうという事らしい。

コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「入れ。」

「シルヴィア・ヘイヘ少尉、入ります。」

「リーリャ・コルッカ曹長入ります。」

二人の女性が俺に与えられた執務室兼自室に入って来る。二人とも銀髪でヘイヘ少尉は腰まで届く長さ、コルッカ曹長は短髪だ。二人とも、キリッとした眼をしている。

「？」

「マンネルハイム将軍から貴方の指揮下に入れと命令されました。」

俺の疑問を感じ執ったのか、ヘイヘ少尉が答えてくれた。

「なるほど。つまり第５００統合戦闘海兵隊団に派遣された訳か。」

「恐らくそうかと。」

今度はコルッカ曹長が答えてくれた。二人ともサバサバした受け答えだな。

「なら、自己紹介しないとな。第５００統合戦闘海兵隊団陸戦隊司令官の都筑純一中佐だ。元隊所属はリベリオン合衆国海兵隊特別任務大隊だ、よろしく。」

「「よろしくお願いします。」」

挨拶を終えるとヘイヘ少尉が、

「中佐はスナイパーだとお聞きしました。貴方の銃を見せて頂けませんか？」

と聞いてきた。コルッカ曹長も頷いている。

「良いよ、ついて来い。」

趣味と実用を兼ねた俺のコレクション（世界各国のあらゆる銃）の所へ案内する。二人は初めて見るライフルやサブマシンガン、拳銃に興味津々のようだ。まるでショッピングに来てる仲の良い友達みたいだな。時々俺が銃の解説を入れると真剣に聞いている。

「さてと、そろそろ行くぞ。」

「もう少し見たかったですが、まぁ仕方有りませんね。」

「ヘイヘ、コルッカ、早速だが出撃の準備をしろ、１時間後に出るぞ。」

「「はっ！」」

二人が出て行った後、雪山用のギリースーツや各兵装のチェックを行う。武器は何時もどうりのＭ４とＳＲ２５、ガバメントだ。バレットや他の銃はお休みだな。

１時間後、出撃するメンバーが揃った。俺、准尉に昇進した湊、キャスパー少尉、スタング一等軍曹とブラボーチームのグース准尉、ハンソン一等軍曹、リー二等軍曹、スミス三等軍曹、チャーリーチームのブチャー准尉、タッカー一等軍曹、ドベリオ二等軍曹、ジンネマン三等軍曹、そしてヘイヘ少尉、コルッカ曹長だ。まぁ、何時

もの第一分隊＋αといった感じか。

「あの谷の辺りまで偵察しに行くぞ。出撃！」

俺達はネウロイの勢力圏にある谷を目指し、出発した。

二人のスナイパー、そして偵察前編（後書き）

次回は戦闘かな？明日は学校でしかも用事で居残りしなければならないので投稿はきついかも。まぁ、やれるだけ頑張ってみます。

二人のスナイパー、そして偵察後編（前書き）

短い。体育せいという事で。

二人のスナイパー、そして偵察後編

偵察を開始して2時間が経った。敵に遭遇する事も無く、目的地の手前まで到着した。目の前はかなり開けた場所になっていて、谷の向かい側に良い狙撃地点があった。

「ブラボー、チャーリーは谷へ向かって前進。アルファとヘイヘ少尉、コルッカ曹長であの場所から援護する。」

「「了解。」」

ブラボーとチャーリーが谷へ向かって進む。俺達は少し高台にある岩場へ向かい、援護態勢をとる。

グース准尉とブチャー准尉は時折手話やハンドサインで部隊連携を取り、部下に命令を出す。ネウロイは音にも反応するからあまり声を出さない方が良い。そのための手話とハンドサインだ。暗殺や潜入等の極秘任務の時によく使ったものだ。

「中佐、敵です。」

使い魔であるシベリアンハスキーを発現させ固有魔法の視力強化を発動していたヘイヘ少尉が敵を発見したらしい。

「グース、ブチャー、止まれ。敵が谷から来る。」

ブラボーとチャーリーが遮蔽物に身を隠す。

「俺達が此処から狙撃して数を減らす。お前達は敵を引き付けてか

ら撃ち始めろ。」

「「了解！」」

俺とヘイヘ少尉、コルッカ曹長が狙撃を開始する。俺のＳＲ２５と彼女達のモシン・ナガンの弾丸は次々とネウロイへ当たり、撃破していく。

「ボルトアクション方式のライフルなのに撃つのが速いな。」

「私達の父親は猟師ですから。」

「なるほどな、それにしてもお前ら二人、ホントに似てるな。違うのは使い魔と髪型くらいじゃないか？固有魔法も同じだし。」

「よく言われます。」

少尉達と話しながらライフルをひたすら撃っていく。そろそろ弾が無くなりそうだ。

「中距離戦に切り替えるぞ！ブラボー、チャーリー、お前達の出番だ！」

「やっと出番ですか。待ちくたびれましたよ中佐。」

「まだ獲物は残ってるんでしょうね？」

両射撃班が攻撃態勢に入る。谷から出た所を両サイドからアサルトライフルや分隊支援火器で攻撃し、俺達アルファが正面から攻撃する。つまり包囲する形になる。谷から出る場合、谷の中では戦力が

縦に延び、正面戦力が少なくなる。そのため、谷の出口に敵が居るとかなり不利になる。同数や数が多くても展開出来る数が違うからな。

「オン・マイ・マーク！……ファイヤー！」

第一分隊全員が一斉に射撃を開始する。横からの攻撃に不意をつかれたネウロイ達は瞬く間に数を減らしていく。俺もＭ４に持ち替え撃ちまくる。ヘイヘ少尉達もサブマシンガンに持ち替えネウロイに攻撃している。ネウロイ達はなす術もなく壊滅した。だが、谷から第二波が迫っていた。

「ラファールアクチュアルからＳＲＨＱへ航空支援を要請する。」

「了解した。プレデターを向かわせる。」

数分後、ネウロイを足止めしていた俺達の上をヘルファイア装備のプレデターが通過し、ネウロイ達に爆撃していく。第二波も壊滅させた俺達は残りの偵察をプレデターに任せ、基地へ帰った。明日は作戦会議だ。早めに寝ないとな。そんな事を思いながら今日使った武器の整備と弾丸の補充をするのだった。

二人のスナイパー、そして偵察後編（後書き）

もうちょっと詳しく書きたかった。もうすぐ学校が忙しくなるので更新が不定期になるかも知れません。体育祭とかテストとか文化祭とか。最低で一週間に2、3本といったペースになるかも。なるべく早く投稿する様に頑張ります。

サウナ、そして作戦会議（前書き）

クオリティーの低さは気にしないでください。不定期になる、と言いながら結局投稿してしまった！

サウナ、そして作戦会議

銃の整備を終え、俺は風呂へ向かう。フィンランド……スオムスはサウナで有名な国だ。一度入ってみたかったんだよな。

サウナで身体を温め、老廃物を排出していると、

「中佐？」

コルッカ曹長の声がする。

「曹長！？あれ？此処って男湯じゃ！？」

「サウナは男女共用なんですよ。」

「ヘイヘ少尉もか！」

「いちよう私達も居ますよ。」

「ロサレス姉妹もか！って事はまさか！」

「あたしも居るよ～」

何とイェーガー少尉まで居る。というか男女共用だったんだな。普通ウィッチと男性は近付いてはいけないはずなんだが、何でも純潔を失うと魔法力を失うらしい。

「良いのか、男と入って？」

「予算の都合では仕方有りません。」

成る程、男女別にサウナを作る予算が無かったんだな。

しばらく彼女達と話していると、ジェニファー准尉が俺に質問してきた。

「中佐はどうして軍に？」

「准尉、俺の親は災害で死んでな。その災害の時に助けてくれたのがアメリカ合衆国海兵隊だったのさ。その後、一人の海兵隊員の夫婦の養子になってね。恩を返すためにマリーン・コーになったのさ。」

『海兵隊ですか。でも隊長の国の軍では無いですよね？』

「今は１９４０年１０月だろ？俺の世界だとこの年代は大きな戦争があったのさ。ネウロイでは無く、人間同士でな。」

俺は元居た世界の歴史を彼女達に話していく。

「私達はまだ楽なのかも知れませんね。」

「そうだな、ヘイヘ少尉。できれば人なんて殺したく無いさ。でも、殺さないと民間人に被害がでる。特にテロリストや独裁者はな。」

「なんか辛気臭くなったな～　なんか明るい話題は無いのか？」

「そうだな、なら昔飼ってた猫の話なんてどうだ？」

俺の子供時代の話で盛り上がった後、解散した。おっと、ちゃんと

冷水には入ったぞ。俺は部屋に入って早々にベッドに倒れ込み、そのまま寝てしまった。

あくる日、俺達とスオムス軍との合同会議が始まった。

「我々海兵隊としましては、我々が偵察を行ったあの谷まで前進したいと考えています。この付近は山に囲まれており、通るならあの谷しか有りません。つまり出口を塞ぐ訳です。」

「その案に異存は無いが、我々スオムス軍には谷まで押し返す戦力は無い。」

確かにスオムスは国力が少ない。あまり兵士や兵器を失いたく無いのだろう。

「では我々が道を開きます。」

「解った、そこまで異存言うならスオムスからはウィッチを出す。だが一般部隊は出せん。良いな？」

「了解しました。」

結局、あの谷までは俺達海兵とウィッチ部隊になった。スオムス義勇軍も来てくれるらしい。ここで会議は終了した。

「どうかね、ヘイヘ少尉とコルッカ曹長は？」

「二人ともかなり優秀です。」

「スオムス軍は数より質だからな。」

「でも、我々の下へ派遣しても良かったのですか？」
「？」

「何か変な事言いましたか俺？」

「いや、道先案内役のつもりだったんだが、どこかで行き違いがあったようだな。彼女達が今のところ第５００統合戦闘海兵団に入る予定は無い。」

どうやらヘイヘ少尉達の話とは違うようだ。勘違いしていたらしい。まぁ、確かに今のスオムスからあの二人が抜けたらかなり戦力が落ちるしな。

「彼女達が俺の指揮下に入ると言っていたので、勘違いしてしまったようです。」

そう言い、他にいくつか話した後、マンネルハイム将軍と別れる。今の内に先程決まったオペレーション・ブリザードの準備でもしときますか。

俺は自室に戻り、各装備のチェックと整備、そして選定を始めるのだった。

サウナ、そして作戦会議（後書き）

明日は投稿を休みます。折角の短縮授業なので、久しぶりにゆっくりゲームでもしようかと。

兵器設定、そして元ネタ紹介（前書き）

本編じゃ無くてすみません。興味が無い人はスルーで。あと、作者は余り兵器に詳しく有りません。何か指摘がある場合は感想にお願いします。

兵器設定、そして元ネタ紹介

初めましてッス！俺の名前はマイク・スタング一等軍曹ッス。今日は色々シュバルツェア・ラファール隊について説明するッス。

まずは艦隊からッス。

アリアンロッドについては世界最大の艦艇ッス。搭載機数は２５０機の双胴空母で戦闘機と攻撃機が２００機で残りはヘリや早期警戒機、対潜哨戒機、電子戦機ッス。

一個飛行編隊は基本的には４機編成で、右舷に２５個戦闘攻撃編隊、左舷も同じッス。それを纏めるのは右舷がスコーピオン大佐と左舷がオコーネル中佐ッス。戦闘機、攻撃機以外は両舷に分散配置されてるッス。ヘリだけは中央艦橋の後ろにあるヘリ用の飛行甲板の下に格納されてるッス。

スコーピオン大佐はアリアンロッドを含めた空母三隻の航空隊の総司令官でもあるッス。

各空母に搭載されてるのは艦上運用型のＦ－２２ラプターやＦ－３５Ｃライトニング２、Ｆ／Ａ－１８Ｅスーパーホーネット、ＥＡ－１８Ｇグラウラー、艦上運用型のＡ－１０サンダーボルト２、Ｓ－３Ｂバイキング、Ｅ－２ホークアイ、ＳＨ－６０シーホークッス。

アリアンロッド以外の空母二隻はニミッツ級でヘリ空母は最新鋭のスペングラー級を採用してるッス。このヘリ空母はアリアンロッドと共に設計されたッス。搭載機数は４８機ッス。内、１６機がＶＴＯＬ機で３２機が戦闘ヘリッス。搭載機は隊長機にＦ－３５Ｂライ

トニング2、一般機がＡＶ－８Ｂハリアー、戦闘ヘリがＡＨ－６４アパッチＬＢッス。

揚陸艦はワスプ級で巡洋艦はタイコンデロガ級、駆逐艦はアーレイ・バーク級ッス。潜水艦はヴァージニア級を海軍特殊部隊の作戦用に改造した物ッス。

次は地上部隊の説明ッス。

第一から第四中隊は大体、一個中隊１４４名で構成されてるッス。一個小隊は３６名、一個分隊は１２名って感じッス。各中隊には、戦闘工兵一個小隊が付くッス。つまり、１４４＋３６で合計１８０名ッス。さらに揚陸艦に搭載されてる戦闘車両と各ヘリが付くッス。

戦闘車両はＭ１Ａ２エイブラムスとＭ１０９Ａ６、Ｍ２ブラッドレー、Ｍ３ブラッドレー、ＡＡＶ７Ａ１、ストライカーＩＣＶ、ストライカーＭＧＳ、ＬＡＶ－２５、アベンジャー、ハンヴィー、ジープ、兵員輸送用のトラック、１５５ｍｍ榴弾砲ッス。

揚陸艦に搭載されてる航空機はハリアー２とＡＨ－１Ｗスーパーコブラ、ＵＨ－６０ブラックホーク、ＭＨ－５３ペイブロウ、ＣＨ－４６シーナイト、Ｖ－２２オスプレイ、ＡＨ－６リトルバードッス。

最後に元ネタッス。

純一＆湊

あかね色に染まる坂。特に湊は設定のまんま。あか坂の容姿に性格なのだが、下の名前はアマガミの橘純一より。本来は準一という漢

字。

フレデリカ
ファーストネームは銀河英雄伝説のフレデリカ・グリーンヒルより。

ダグラス
特に元ネタ無し

ジョン・キャスパー
名前は、ＰＳ３の戦闘機のゲーム、ＨＡＷＸのパイロットより。

マイク・スタング
喋り方は魔界戦記ディスガイアのプリニーより。
ロザリンド＆ジェニファー苗字はピクシブのストライクウィッチーズ１９９１シリーズのキャラより。

ダニエル・スコーピオン大佐
コールサインのアンタレスはエースコンバットジョイントアサルトＸ２より。

グレイス・オコーネル
容姿はとある魔術の禁書目録のオリアナ・トムソンより。

オリビエ・ポプラン
銀河英雄伝説のオリビエ・ポプランそのまま。
カール・ブリッツ
設定は銀河英雄伝説のイワン・コーネフそのまま。

エドガー・ジョンソン
銀河英雄伝説のワルター・フォン・シェーンコップより。やはり設

定はそのまま。

シルヴィア・ヘイヘ
フィンランド軍伝説のスナイパー、シモ・ヘイヘより。

リーリャ・コルッカ
ヘイヘと同じくフィンランド軍伝説のスナイパー、スロ・コルッカ。
リーリャという名前は、ロサレス姉妹と同じく汚狐様の１９９１シリーズのキャラの名前より。
空母アリアンロッド
出撃！！乙女たちの戦場２に出てくる主人公達の母艦より。

ヘリ空母スペングラー級
機動戦士ガンダムＳＥＥＤの強襲揚陸艦より。

今のところは以上ッス。またこうやって元ネタとかを紹介するッス。
それではッス！

兵器設定、そして元ネタ紹介（後書き）

大変恐縮なのですが、明日は体育祭なので更新が出来ません。多分、疲れて死んでるでしょうから。しかも体育祭終わってスグに中間テスト一週間前ってどうよ？

突然の来襲、そして親バカ（前書き）

ＰＳ３のトゥハート２をやっていたので余り書けませんでした。何かすんません。文章も粗削りです。暇をみて加筆修正していきたいです。

突然の来襲、そして親バカ

オペレーション・ブリザードは一週間後に決まった。スオムスからはハンナ・ウインド、ニッカ・エドワーディン・カタヤイネン、エイラ・イルマタル・ユーティライネン、スオムス義勇軍からはハンナ・ルーデルというウィッチ達が来てくれるらしい。

「隊長、艦隊からオスプレイが到着しましたけど、補給の予定でもあったッスか？」

「いや、無いはずだぞ？昨日来たペイブロウ５機で補給物資は届いたし。」

スタング一等軍曹と俺は首を傾げる。だが、この疑問に答えたのは意外な人物だった。

「は～はっはっ！純一、ラブリーダディがやって来たぞ！」

馬鹿な！あの人が此処に居るはずが無い。

「うむ、嬉し過ぎて声も出ないか！それで、我がスウィ～～ト湊は？」

この言い方、やっぱり養父さんらしい。

「隊長、誰ッスか？」

「俺の義父だ、ウィリアム・プライス退役大尉。」

俺は若干疲れた表情で言う。

「お養父さん？」

「おお湊！パパ、お前が死んだと聞いた時は三日三晩泣いたんだぞ！」

このオッサン、俺に関しては泣いて無いとみた。湊命の人だからな。

「そんな事よりパパ、どうして此処に？」

「そのクールな物言いもまた、パパ心を刺激するものだ。」

何かウザイ。ホントに湊に対しては親バカだ。

「お養父さん。」

「スマン！パパが悪かった、だからパパと呼んでくれ！」

一人このノリに着いてこれないスタングが、

「ドーターコンプレックス？略すとドタコンッスか？」

と呟いていた。言い得て妙だな。

「それで何故、此処に居るのですか？」

「うむ、シュバルツェア・ラファール隊が全滅して六ヶ月経ってから形式上の葬儀がアーリントンで開かれたんだ。国葬へ向かう為に乗った飛行機が事故で墜落してな、死んだと思ったらジョンと名乗

る男に会って『貴方の養子達を助けたく有りませんか？』と聞かれて『当たり前だ』と答えたら、この世界に飛ばされたのさ。」

やはりジョンの差し金か。

「もしかして養母さんも？」

「うむ、キャサリン以外にもアレン・バクスター一家も来ているぞ。」

アレン・バクスターは俺の叔父に当たる人で養母さんの兄だ。俺にＦ-１４ＥＸをくれた人でもある。

「そっか、それで親父これからどうするんだ？」

「この世界の事はダグラスから聞いてる。お前達を手伝うさ。」

「ありがとう親父。」

感謝の気持ちを伝えると、親父は気持ち悪い物を見たという顔をした。

「お前が素直に礼を言うとは。」

「おいおい、俺ほど素直でマジメな息子はそう居ないぞ。」

「どの口で言うのよ？」

フレデリカが突如現れ、俺の頬を抓る。

「フレデリカの嬢さんか。」

「お久しぶりぶりです、ウィリアムおじ様。」

フレデリカが親父に挨拶する。というかいい加減抓るのをやめろ、痛いから。

フレデリカが俺の頬から手を離した後、シュバルツェア・ラファール隊を全員召集し、親父達を紹介する。

親父達と一緒に来た、数名の兵士と親父で一個分隊を編成し、養母さんは軍医として働いて貰う事になった。バクスター一家は艦隊に戻って貰い、叔父さんには戦闘機のパイロットとして、再び空を飛んで貰う事にした。新しい仲間を迎えた俺達はオペレーション・ブリザードへ向け、着実に準備を整えて行くのだった。

突然の来襲、そして親バカ（後書き）

タマ姉が可愛いすぎる。余り関係有りませんね。でも、言わずにはいられなかったんです。

出撃、そしてパーティーの始まり（前書き）

ルーデルさん再登場の回です。後、ＰＶが５００００回を越えました。このような駄文を此処まで読んでくれる人が居るなんて、感謝の気持ちで一杯です。皆様有り難うございます。

出撃、そしてパーティーの始まり

ルーデルＳｉｄｅ

私の隊は先程この基地に到着した。あの人も此処へ来ている、そう思うと嬉しかった。私達は彼の執務室へと向かう。

「大尉、ようやく未来の夫候補と会えますね。」

隊の一人がそう囃し立ててきた。夫か……良い響きだな。

「名前で呼ぶか？旦那様、あなたでも良いな。」

「うわ、隊長が早速結婚後の事を考えてる。」

「捕らぬ狸の皮算用に成らなきゃ良いけど……」

「そう成らない為の私達でしょ！」

「「「頑張って下さい隊長！」」」

部下達が何事か話していたようだが、考え込んでいた私の耳には入らなかった。

彼の執務室に着いた。緊張して震える手でドアをノックする。『入れ。』と返事が来た、私達は中へ入っていく。

「スオムス義勇軍司令官から共同作戦の参加命令を受けました、ハンナ・ルーデル大尉であります！」

他の者も自己紹介をしていく。

「あの時のウィッチ隊か。良く来てくれた、第５００統合戦闘海兵団陸戦隊司令官の都筑純一中佐だ。よろしく頼む。」

「「「はっ！」」」

本当なら共同作戦では無く、彼の部下として戦いたかった。だが、カールストラント軍司令部が恐らく許可を出さないだろう。一応、司令部には申請してあるのだが。義勇軍の仲間と離れるのは嫌だが、彼に着いていきたい、そして彼の一番になりたい。その為にはまず、この作戦を成功させる事だ。

ＳｉｄｅＯｕｔ

いよいよ作戦実行日なった。マンネルハイム将軍が、この作戦に参加する全兵士とウィッチ達に激を入れている。ちなみに次は俺の番だ。

将軍の演説が終わり、俺が話し始める。

「あ～、こういうのは苦手だから手短にいくぞ。大胆かつ慎重に動け、俺達は数は少ないが鍛え抜かれた精鋭部隊だ。『ａ　ｆｅｗ　ａ　ｐｒｏｕｄ（誇り高き少数精鋭）』、誇りを持って作戦に従事しろ。そして勇気・名誉・献身だ。この四つを忘れるな。Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！」

演説を終え、元の場所まで戻ると、将軍が作戦開始の宣言をした。

全部隊がゆっくりと前進していく。昨日プレデターを飛ばして偵察した敵の位置からみると、接敵するのは2時間後になるだろう。

「隊長、そういえばもうすぐ11月ッスね。」

「誕生パーティーはどうします?」

「前線だからな……多分、かなり簡素な物に成るんじゃないか?」

キャスパーがかなり落ち込んでいる。そう、11月は海兵隊の誕生日がある。組織に誕生日?と思う人も居るだろうが、海兵隊員は自分達を一つの生き物だと思っている、だから誕生日を祝うのだ。

「安心して下さいキャスパーさん。私が腕によりをかけて料理を作りますから。」

湊がそう言うとキャスパーは立ち直ったらしい。

「はぁ、ウチの部下は手がかかる連中ばかりだ。」

「まったくですな。」

「お前もだぞ、ジョンソン少佐。」

こんな会話をしながら緊張をほぐしていく。

「先行するスオムスウィッチ部隊が接敵!」

「了解だ。テメェら、誕生パーティーは無理だがコッチのパーティーで楽しもうぜ!」

「「「ウーラー」」」

さぁ、戦闘開始だ。

出撃、そしてパーティーの始まり（後書き）

次回は戦闘開始です。

奪還、そして捜索救難前編（前書き）

短い。何時もより短い。

奪還、そして捜索救難前編

接敵の報告を受けた俺達は、進軍の速度を上げた。先頭部隊はスオムスのウィッチ隊だ。

「イェーガー、ロサレス姉妹、援護に行ってやれ！」

「「了解！」」

「ＨＱ、こちらラファールアクチュアル、ＶＴＯＬならびにヘリ部隊の航空支援を要請する！」

「了解した。三分で到着する。」

「了解。三分で航空支援機が来てくれる。」

「隊長、エンゲージ！」

陸戦隊もネウロイと接敵、交戦を開始する。護衛に着いていたルーデル隊が接近する敵に攻撃を加えていく。

「大尉、三分間持たせろ！航空支援機がもうすぐ来る。」

「了解した。」

キッチリ三分後、航空支援が到着した。

「こちらファントムリード、攻撃目標を指示されたし。」

「レーザーで誘導する！キャスパー、レーザー照準機を使って目標を指示しろ！」

「了解！スタング、援護しろ！」

キャスパーの誘導に従ってＪ－ＤＡＭ爆弾が投下される。かなりの数のネウロイを殺ったようだ。

「第二、第三中隊に道を開かせろ！」

「レンジャー了解！立て上等兵、レンジャーが道を開く！」

レンジャーが先頭に立ってネウロイを押していく。だが次第にその勢いは失われていく。敵の防御が厚くなってきたのだ。

「砲撃支援は？」

「こちらアーバレスト・ワン・ワン、自走砲隊は展開完了だ。目標指示さえあれば何時でも砲撃可能だ。」

「了解。では早速頼む。座標はストロボマーカーでマークする。広範囲に渡って砲撃してくれ。」

「了解。」

ネウロイの防衛陣地へ向かってストロボを投げる。

「全員、後退しろ！砲撃が来る！」

間一髪だ。何とか砲撃には巻き込まれ無かった。だが、突如通信が

入る。

「カタヤイネン軍曹が墜落！」

「何っ！」

ウィッチの一人が落とされた。その報告は皆に衝撃を与えた。

「アルファ、ついて来い！戦闘捜索救難へ向かうぞ！以降第一中隊の指揮はジョンソン少佐に任せ、大隊の指揮は、レンジャーのライトマン中佐に任せる。」

一息に言うと俺達はカタヤイネン軍曹の墜落した方へ向かって行く。

「生きててくれよ。」

そう願いながら俺達はひたすら走るのだった。

奪還、そして捜索救難前編（後書き）

もうすぐ誕生日。そして中間テストだ！！

奪還、そして捜索救難後編（前書き）

最近寝不足気味で眠たいです。

奪還、そして捜索救難後編

「居たぞ！コッチだ。」

カタヤイネン軍曹を発見した。

「湊頼む。他は周辺警戒だ！」

カタヤイネン軍曹を中心に円周防御陣を築く。だが、こちらが圧倒的に不利だ。数が少な過ぎる。

「ＨＱ、ラファールアクチュアルだ。救護ヘリを要請する。」

「ダメだ。制空権は未だ敵の手に有る、危険だ。」

「了解。クソッ！陸戦隊から何人か回して貰うしかないか。」

ライトマン中佐に無線を繋ぎ、親父の分隊とヘイヘ、コルッカの両名をこちらに寄越して貰う。

「ヘイヘ、コルッカはあの場所から狙撃支援を頼む。他は遮蔽物に隠れてカタヤイネン軍曹と湊を守れ！」

「「「了解！」」」

円周防御陣を築いてから、二十分が経った。俺達はかなりの数のネウロイを撃破したが、敵の数は一向に減らない。

「ＨＱ、航空支援を寄越してくれ！」

「解った。直ぐに向かわせる。」

「良いか、俺達はこれから徒歩で大隊と合流する。湊とスタングが担架を運ぶ。合流後はカタヤイネン軍曹を後方へ送り、本来の任務に戻る。いいな！」

「「「了解！」」」

ネウロイの壁に一点集中射撃で道を開いていく。

「ハーイ、助けに来たわよ。」

「オコーネル中佐！ナイスタイミングだ。」

エンジェル隊が付近に居たネウロイ達を機銃掃射で片付けていく。

「今のうちに走れ！ＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！」

一気に駆け出してネウロイから遠ざかる。友軍戦車部隊の援護のお陰で敵からの追撃は無かった。カタヤイネン軍曹を後方へ送り、谷の攻略戦に復帰する。

「俺が再び指揮を執る！空爆と砲撃、艦隊からのトマホークミサイル攻撃の後、一気にネウロイを叩く。準備しろ！」

陸戦隊全部隊が突撃に備え待機する。支援攻撃がネウロイの群れを一掃し、俺は命令を下す。

「突撃！」

俺達はここぞとばかりに突撃し、残敵を掃討していく。他の所で戦っていたネウロイも撤退を開始したらしい。俺達の勝利だ。今回も被害らしい被害は出ず、安心した。俺達の兵器はこの世界の人間には扱い難いからな。

戦闘に勝利し、谷の向こう側までネウロイを押しやった俺達はこちら側の出入口に前方作戦基地を設営し、防備を固めた。これで少ない戦力でも充分に戦える。なにせ出て来た奴を叩けば良いだけだしな。谷での戦闘は谷の中、もしくは谷から出て来た奴が不利というのが常識だ。

さらに基地には榴弾砲と迫撃砲を配置してある。実戦力と後方支援の両方を揃えて有る。そうやすやすと落とされはしないだろう。此処を拠点に反撃だって出来る。とにかく、前方作戦基地と守り易い地形を手に入れた。

スオムス軍もカタヤイネン軍曹以外は特に被害は無かった。といっても元々参加していた部隊がウィッチ隊だけで陸上戦力は参加していなかったから当たり前だ。カタヤイネン軍曹も命に別状は無いらしい。一安心だ。

「大勝利ですな。」

「ジョンソンか……そうだな、俺達の勝ちだ。」

ジョンソンと取り留めの無い話しをした後、前方作戦基地内に用意された自分の宿舎に戻るのだった。

奪還、そして捜索救難後編（後書き）

疲れた～最近は小説以外にやりたい事が多過ぎて大変です。

誕生日、そしてシャーリー（前書き）

１０月６日は俺の誕生日！という事で誕生日ネタ一丁。

誕生日、そしてシャーリー

あれから何回かネウロイの襲撃を受けたが、前方作戦基地キャップは未だ健在だ。基地の名前の由来は蓋だ、この基地はこの周辺でカールストラント方面への唯一の通り道である谷を塞ぐ為に建造されたからな。

そして今日は１１月１０日、俺達海兵隊の誕生日だ。

「海兵隊讃歌斉唱！」

海兵隊讃歌を皆で歌う。

「ハッピーバースデー、マリーン・コー！」

「海兵隊、ウーラー！」

「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ！」

歌い終わった後思い思いに叫ぶ。誕生パーティーは基地内の広場で行われている。パーティーにはマンネルハイム将軍やブリザードに参加したウィッチやスオムス軍の兵士達も参加している。

「皆さん、料理を持って来ましたよ。

「久しぶりにお嬢の料理だ！」

お嬢というのは湊の事だ。ちなみにフレデリカは姐御だ。

ビールやシャンパン飲みながら誕生日を祝う者や一心不乱に料理を

食べる者も居る。

「少尉～ヒック。俺とイイコトしようぜ～」

「ちょっ！酒臭い。後、身体を触ろうとするな～！」

酔っ払ったスオムス軍兵士の一人がイェーガー少尉にちょっかいをかけている。

「サージ（軍曹の略称）、少尉に手を出したらケツの穴が二つになるぞ。」

そう言いながらガバメントの安全装置を解除する。

「サー・ソーリー・サー」

まったく、確かにあのスタイルに下がパンツだけというのに欲情するのは仕方ないとしても手を出すのはいかんだろ。

「大丈夫か少尉？」

「あ、あぁ。」

ちょっと動揺してるみたいだな。

「まぁ、許してやってくれ。あいつも男だからな、スタイルの良い女の子を見て欲情するのも無理は無い。」

「その、中佐も私の身体を見て欲情するのか？」

「まあな。そりゃあ俺だって男だからな。」

「そっ、そうか／／／」

「？」

少尉の顔が赤い。もしかしてさっきのはセクハラになるのか？

「あ～何かゴメン？」

「別に何でも無い。」

セクハラじゃ無いなら……風邪か？それ以外に顔が赤くなる原因が思い付かない。俺は少尉のおでこに手を当て熱を測る。

「～～～！？」

「ん～ちょっと熱いな。やっぱり風邪か？」

「ホントに何でも無い！」

少尉はどこかに走り去って行った。

ロザリンドＳｉｄｅ

中佐とシャーリーさんが何か話している。恐らくさっきの酔っ払った兵士の事だろう。少し経った後シャーリーさんが顔を真っ赤にして逃げ出した。

「また隊長さんがデリカシーの無い事を言ったのかな？」

『確かに中佐はちょっとそういう所があるもんね。』

「キャーー！！」

今のはシャーリーさんの声？

「お姉ちゃん、今のって……」

私達は拳銃を握り叫び声のした方に向かうのだった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

ルーデルＳｉｄｅ

私は都筑中佐とイェーガー少尉との会話を聞いていた。

「ふむ、中佐はスタイルが良い方が好きなのか？」

「でも隊長、あの言い方だと微妙ですよ。」

「いっその事、既成事実を作ったらどうです？」

既成事実……か。だが私は正攻法で彼と結ばれたい。その事を伝えると、部下達は『頑張って下さいね』と応援してくれた。

部下達と彼を落とす方法を考えているとイェーガー少尉の悲鳴が聞こえてきた。ただ事では無い事が起きたらしい。武器を手に取りイェーガー少尉の所へ向かう。

SideOut

イェーガー少尉の悲鳴が聞こえた。近くにあったサブマシンガンを手に取り、走る。少尉は基地の外のに在る切り株に居た。さっきの軍曹が少尉を襲っているのが見えた。

「あのクソ野郎！」

サブマシンガンのセレクターを単発合わせ躊躇わずに引き金を引く。

「ガッ！」

弾が当たったのは尻だ。

「軍曹、さっき言っただろ?手を出したらケツの穴が二つになるぞって。それとも三つにしてやろうか?」

「隊長、一体何が?」

周りに他の兵士やウィッチが集まってくる。

「黙ってろキャスパー、俺はコイツを殺すので忙しいんだ。」

「兄さん!そこまでです。これ以上は許しませんよ!」

「湊、このクソ野郎は軍規を犯したんだ。」

「なら軍法会議に掛けるべきよ。」

フレデリカまで……

「解ったよ。後はマンネルハイム将軍に任せるよ。ガニー（一等軍曹の愛称）、そこにはいつくばってるウジ虫を連行しろ！」

スタングにクソ野郎を連行させ、俺は少尉のもとへ向かう。

「大丈夫だ少尉、もう終わった。大丈夫だ。」

声を掛けるが少尉は泣いていてとても話せる状態では無かった。彼女が落ち着くまで俺は彼女を抱きしめ、『もう大丈夫だ。』と声を掛ける。

「グスッ、怖かった。ホントに犯されると思ったんだからな！」

「悪かった少尉。」

「シャーリーだ。」

「えっ？」

「これからシャーリーって呼ばないと許してやらないからな。」

「解ったよ。シャーリー、これで良いか？」

何とかシャーリーに許して貰った俺は、彼女と一緒に基地に戻る。パーティーはお開きになっていた。まぁ、仕方ないな。風呂という名のドラム缶に入り、仮設の兵舎へと戻り就寝の準備をしていた。他の兵士達も大半が就寝している。酒も入っているし当たり前っていえば当たり前かな。

ドアがノックされたので開けてみるとシャーリーだった。

「その、今日だけで良いから一緒に寝てくれないか？」

あんな事があったばかりで一人だと不安なのだろう。

「良いよ。ああなったのは俺にも責任が有るし。」

二人でベッドに入ったのだが、シングルなのでいかんせん狭い。俺はなるべく端っこに寄ったのだが、シャーリーの身体のいろんな部分が当たっている。特に胸とか、胸とか。

「シャーリー、悪いんだがもう少し離れ……」

『ＺＺＺ～～』

はぁ、寝てるのかよ。」

結局、その夜はシャーリーのせいで悶々として眠れないのだった。

誕生日、そしてシャーリー（後書き）

誕生日＝中間テスト一週間前というのが痛い。

リーリャ、そしてドラグノフ（前書き）

ドラグノフを持った、感情をあまり出さない女の子。書いてて緋弾のアリアのレキを想像してしまった俺は悪い子。

リーリャ、そしてドラグノフ

朝目が覚めるとシャーリーは既に居なくなっていた。俺は何時もの野戦服へと着替え、訓練を開始する。

元の世界でも訓練は毎日していたし、こちらの世界でも欠かした事は無い。補給の関係上、射撃訓練だけは余り出来ないけどな。射撃訓練をするときは儀仗用のＭ１ガランドを使用している。この銃ならリベリオン軍の正式採用のライフルとして使われているから弾も手に入り易い。ただし７．６２×５４弾の銃を使っている兵士はよく訓練している。この弾はモシン・ナガンに使われている弾丸で、此処でも手に入り易い。

「中佐、射撃訓練ですか？」

「コルッカ曹長か。あぁ、たまにはやっとかないとカンが鈍るからな。」

今俺が使っているのはＭ８２バレットだ。５０口径１２．７ｍｍ弾を使うスナイパーライフルだ。

「大きい銃ですね。」

「リベリオンのＭ２ブローニング銃機関銃と同じ弾丸を使ってるからな。」

Ｍ８２も比較的弾薬が手に入れ易い銃の一つだ。

「１２．７ｍｍですか、威力が有って良さそうですね。モシン・ナガンだと単発で一度に多くの敵と戦えませんし、連発式のライフル

だと命中精度が落ちますし……」

「このバレットライフルは単発の所を威力で補っているしな。う～ん、連発式で命中精度が良い銃か……」

俺は少し考え込み、とある銃を思い立った。

「曹長、ついて来い。」

曹長を連れて行ったのは俺の武器庫だ。

「ほい。」

曹長にある銃を渡す。レイル・システム付きのＳＶＤ、俗に言うドラグノフだ。ヘイヘ少尉もコルッカ曹長も固有魔法が鷹の目（視力強化）なのでスコープを外してある。

「これは？」

「お前がお望みの連射性能と命中精度を兼ね備えたライフルだ、お前にやるよ。」

「あのっ、貰って良いんですか？」

「やると言ったろ。それとも何か不満か？」

「い、いえ滅相もないです。有り難うございます。」

俺はついでにサブマシンガンも渡す。渡したのはクリス・ベクターだ。ガバメントと同じ．４５ＡＣＰ弾を使い、反動の少ない良い銃

だ。

「本当に有り難うございます。大切にします。」

「別に良いよ。それより俺の訓練に付き合ってくれ。」

「はい！」

曹長と射撃の競争をしたりしながら一日を過ごす。今日はネウロイの襲撃も無く平和だった。

リーリャＳｉｄｅ

中佐からライフルを貰った。今まで使っていたモシン・ナガンと同じ弾薬を使っている。早速試してみたけど連射性能に命中精度を兼ね備えた良いライフルだ。これなら複数のネウロイともやり合える。

サブマシンガンの方もかなり良い銃だ。中佐には感謝している。

「その銃は？」

「あっ、シルヴィア。さっき中佐から貰ったの。」

「へ～良いわね。」

「うん。性能もモシン・ナガンと比べ物にならないし。」

普段あまり表情を顔に出さないから、勘違いされがちだけど私達は結構、感情豊かなのよ。

「中佐って凄いわよね。全体の司令官に前線指揮官。」

「それに個人の能力も優秀だし。」

知らない間に銃の話から中佐の話に変わっていた。その後もシルヴィアと色々話していく。

「それにしても新しい銃か……私も新調しようかしら。」

シルヴィアのそんな言葉を聞き、私は今度中佐に頼んでみようと思った。多分、シルヴィアにもあげるんだろうな。頼まれたら断れないタイプの人だし。あまり無理しなければ良いんだけど。

「明日は偵察任務も有るしもう寝ましょ。」

「そうね。おやすみ。」

「おやすみ。」

明日の偵察任務には早速この銃を持って行こう、そんな事を思いながら眠りに就くのだった。

リーリャ、そしてドラグノフ（後書き）

テスト一週間前に入ったので更新が不定期に。二日に一話上げれればいいかな～

墜落、そして二人の逃避行前編（前書き）

テストが怖いので現実逃避気味に。そんなこんなで投稿です。あとがきに誰も気にしないどうでもいい設定が書いてあります。暇な人はどうぞ。

墜落、そして二人の逃避行前編

俺達は谷の向こう側へ偵察に向かう輸送ヘリに載っていた。谷を越えた所で通信が入る。

「ＨＱより第一小隊並びにレイザー６へそちらにネウロイが向かっている。警戒せよ」

「遅い！もう見えてる！」

ネウロイがビームを放ち、ビームはエンジンを掠める形で命中する。

「レイザー６、墜落する！繰り返す、本機は墜落する！」

第一小隊とウィッチ隊を載せたペイブロウ、レイザー６がどんどん高度を下げる。

「機長、不時着は！？」

「エンジンがまだ一つ生きてるから、ぎりぎり可能だ。ただし、かなり乱暴な着陸になるぞ！」

「構わん！」

「了解、クソッ！」

ペイブロウは木々を薙ぎ倒していきながら着陸する。

「おい、お前達無事だろうな？」

「何とか……ね。目が回って、星が飛んでる以外は特に無しですよ」

「あ～ぁ、俺のお宝本がボロボロだ」

「機内でエロ雑誌なんか読んでるからでしょ」

「それは無いですぜ、姐御！」

取り敢えず無事みたいだ。というか今の会話を聞いて心配した俺が馬鹿みたいに思えてきた。

「湊、クルーは？」

「機長が重症、副操縦士は死亡。機関銃士二名はいずれも軽傷です」

「解った。遺体を運び出せるか？」

「可能です。少し時間を下さい」

「周辺警戒、遺体を運び出し、操縦士の応急処置が終わり次第移動する！」

「「「了解！」」」

各分隊の衛生兵と湊が操縦士の治療、チャーリーが遺体をの回収にあたる。

「回収終了！」

「こっちも容態が安定して来ました」

「移動だ。当初予定していた着陸地点に行き迎えを待つ。良いな？」

「了解です」

「ＯＫボス！」

「イエッサー」

「解りました」

各分隊長とロサレス姉妹、シャーリー、ヘイヘとコルッカ達が返事をしてくる。

着陸地点に着き司令部に無線を入れる。

「ＨＱ、ラファール・アクチュアルだ。レイザー６が墜落、ＫＩＡ一名。副操縦士のスーバニ准尉だ。機長は重症、他のクルーは無事だ。第一小隊は全員無事、ウィッチ隊はヘイヘ少尉が脚をくじいた位だ」

「ＨＱ了解。スーバニが……とにかく救援部隊を送る、その場を維持しろ」

准尉の名前を聞いた時オペレーターが動揺していた。仲が良かったのだろうか？とにかく、この世界に来てから初めての戦死者だ。

「了解。アウト」

「防衛線を築け！救援が来るまで此処を守るぞ！」

三十分後、迎えのヘリが着陸地点に到着した。

「早く載れ！ネウロイが来てる！」

ほぼ全員がヘリに載った。後は俺とヘイヘ少尉だ。

「隊長、援護します！早く載って下さい！」

「ヘイヘ肩を貸す！」

ヘイヘと共にヘリに脚を掛けた瞬間、ネウロイのビームがヘリの近くに着弾した。衝撃で俺と少尉は吹き飛ばされた。

「此処に居たらこのヘリも落とされるぞ！」

「ジュン！」

「先に行け！俺達の事は心配するな。機長、離陸しろ！」

「了解、死ぬなよ！ゲーボ7離陸する。」

ヘリが戦場を離れて行く。俺は少尉を担ぎ、近くにあった森へと走る。１ｋｍ程行った、先の地面に有る窪みに少尉を降ろし、一息ついた。

「大丈夫か少尉？」

「はい。ですが……」

「どうした?」

「このままでは二人とも殺られてしまいます」

「此処から数キロの地点に古い坑道があったはずだ。坑道は……此処、谷のスオムス側の出口の近くに出る。これを使って脱出する」

無線とＩＲビーコンはさっきの衝撃で壊れた。救援を呼ぶには手元に有るフレアとカラースモークを使うしかない。

だがフレアを基地が確認出来る距離は短い。偵察機が来てもこの森の深さではフレアも俺達も確認出来ないだろう。なら近くでフレアを使い、救出を待つ方が確実だ。

しかし厄介なのは坑道に行くまでにネウロイが多い地域を通る事になる事だ。

「少尉、移動するぞ。ほら……」

「?」

「おんぶだよ、お・ん・ぶ!早く乗れ。その脚じゃロクに動けないだろ?」

少尉は怖ず怖ずと身体をこちらに預けてきた。色々と柔らかい物があたる。１６歳の成長段階とはいえ、出るモノは出て、へっこむ部分はちゃんとへっこんでいる、つまりグラマーな体型だ。って、イカンイカン。思考がただの変態になってる。俺は円周率を唱えながら坑道へ向かって歩きだした。

墜落、そして二人の逃避行前編（後書き）

スオムス編が終わればシャーリーは５０１に、我等が５００＋αはアフリカに向かう予定になっています。

統合戦闘団は海兵団と航空団以外にも陸戦団、海軍団が有り、５００が初めてウィッチを配属した部隊（今までの統合戦闘団は連合軍各国の一般兵だけで構成）で、ストライクウィッチーズは５００の後（５００で統合戦闘航空団の有効性を試験した）に出来たウィッチ専門の統合戦闘団という設定です。

墜落、そして二人の逃避行中編（前書き）

暇を見て書いて言ったので文章が変かも？

墜落、そして二人の逃避行中編

「はぁ…はぁ…」

積雪と二人分の体重に装備は予想以上に俺の体力を奪っていった。
一度少尉を降ろし休憩する。

「ったく、アラスカで訓練したのに情けない」

「中佐、大丈夫ですか？」

「あぁ、少し休んだら移動しよう」

俺は近くにあった倒れた木に背中を預け返事をする。正直、少しキツイ。だけど休んでばかりはいられない。俺が身体を起こし再び少尉を担ごうとすると彼女はそれを拒否した。

「中佐、私を置いて逃げて下さい。私が居ると足手まといになるだけです」

「少尉？」

「中佐だって解っているはずです、私が居ない方が逃げ切れる確率が上がると知っていて、何故切り捨てないのですか？」

「確かに少尉の言っている事は正しいんだろう。だけど、仲間は置いて行けない。俺は海兵隊だからな」

「中佐、行って下さい。ただ……ただ、一緒に戦った仲間にこんな

のが居たなって思い出してくれれば、それで良いです」

ヘイへの顔には悲壮な覚悟が見て取れた。まるで死に場所を探している様な。

「少尉、何故そう死に急ぐ？」

「私なんか生きていても意味が無いからです」

「意味が無い？何故そう思う」

「私が死んでも誰も困りません」

「ッ！」

彼女は本気で言っているらしい。俺はそういう奴が嫌いだ。自分はいらない、必要無いなんて思ってる奴が。

「ふざけるな少尉！誰も困らないだと？俺が困るに決まってるだろ。お前が居ないと誰が俺のバックアップをするんだ？」

「えっ……」

「少尉、生きろ！俺の……俺達のために生きてくれ」

「……はい」

俺は少尉を担ぐ。今度は抵抗されなかった。坑道への道すがらで吹雪が襲って来た。

「中佐、やっぱり」

「少尉、やっぱり置いていけって言うつもりなら却下だ。次にそういう事を言ったら口を縫って無理矢理塞いでやる」

そう言ってやると少尉は口を閉じた。

ネウロイに見つからない用に移動する。吹雪のお陰で見つかって無いという部分も有るのだろうが、吹雪で体力が失われていくのも確かだ。

「中佐！」

「少尉、口を縫われ……

「違います！あそこを見て下さい！」

……家か？」

少尉が指差した方向にあったのは民家だった。猟師の家……だろうか？とにかくこの家で吹雪が止むのを待とう。

家に入ると何も無かった。家具や食器、その他もだ。ネウロイから逃げ出す時に全て持ち出したのだろうか？

「まだ、在ったんだ……」

「この家の持ち主を知ってるのか？」

「私の家です」

「そうか……」

俺は少尉と装備を降ろし床に座り込んだ。そのまま倒れ込み意識を失った。

シルヴィアＳｉｄｅ

私を床に降ろすと中佐は意識を失った。吹雪や積雪、そして私のせいでかなりの体力を無くしたからだろう。体温もかなり下がっている。暖炉も有るが、薪は無いし毛布も無い。それ以前に脚をくじいた私はロクに動けない。こうなったらアレしか無い。

「少し恥ずかしいけど……」

私は中佐の野戦服のボタンに手を掛け、外していく。中佐が終われば次は私だ。中に着ているシャツとズボンだけになった私は中佐に覆いかぶさっていく。

「中佐、今は休んで下さい。また忙しくなりますから」

そう言って私も意識を手放すのだった

墜落、そして二人の逃避行中編（後書き）

明後日からテストか～
逃避行シリーズは次回で終わるんでしょうか？ちょっと不安に。取り敢えず明日は投稿出来ません。

墜落、そして二人の逃避行後編（前書き）

明日からテスト（泣）
クオリティーの低さはスルーして下さい。テスト勉強の間に書いたので文章が更に下手になっております。

墜落、そして二人の逃避行後編

「んっ……」

「目が覚めましたか？」

「少尉、俺はどのくらい寝ていた？」

「1時間ぐらいでしょうか？」

結構寝ていたみたい……だな？

「少尉おまっ、なんて格好を！？」

「こうでもしないと中佐の体温がどんどん下がってしまいますから／／／」

顔を赤くしながら少尉は俺の問いに答えてくれた。

「有り難うシルヴィア」

「初めて名前を呼んでくれましたね」

「あっ……悪い。嫌だったか？」

「いえ、嬉しいです。余り名前で呼ばれた事は無いですから」

「？　家族が居るだろ？それにコルッカ曹長も呼んでるのを見たぞ」

「私の家族はバラバラだったんですよ。猟師だった父はこの辺りに棲む森のヌシに固執していて、家にはほとんど帰らず、ただ大熊を追い掛けていた……そんな父に呆れた母は六歳の時に私を棄てて何処かへ行ってしまいました。」

俺は質問した事を後悔した。これだから湊やフレデリカにデリカシーが無いって言われるんだ。

「ごめん、悪い気は無かったんだ」

「良いですよ、別に隠してるわけでは無いですから」

「それでも、ごめん」

「話を戻すと、母が居なくなってから父の友人のコルッカ家に滞在する事が多くなりました」

なるほどコルッカ曹長とはこの時からの付き合いだったのか。

「それから六年間は父と同じく猟師だったコルッカおじさんにリーリャと二人で猟銃の使い方と猟の仕方を学びました。でもそんな時とうとう父も戻らなくなりました」

「それで？」

「それからはリーリャとずっと一緒でしたね。使い魔と契約したのも一緒ですし、陸軍に入ったのも一緒です」

「でも、ならどうして誰も困らないって言ったんだ？」

「私は家族に棄てられ、愛を知らずに生きてきました。だから、誰も悲しみません」

あの発言は此処から来てるのか。俺も結構辛い人生を送ってきたが、彼女も大変だな。

「誰もっていってもコルッカ一家が居るだろ？」

「結局は他人ですから」

「はぁ～、少尉そんな事言ったら俺達家族はどうなるんだ？」

「あっ……すみません」

「それに、俺で良いなら少尉の家族にはなれなくても、パートナーぐらいにはなってやるさ」

「中佐……／／／」

「だから、自分が死んでも誰も悲しまないなんて言うな。良いな？」

「はいっ！」

良い返事だ。取り敢えずこれで安心だな。

俺が安心したその時、少尉のお腹の虫がなった。

「っ～～～！？／／／」

「腹が減ってるのか？」

「はぃ……／／／」

恥ずかしがりながら少尉は頷いた。俺は背嚢からレーションを取り出し少尉に渡す。

「これは？」

「大塚〇薬のカロ〇ーメイト」

「？？？」

そうか、カロ〇ーメイトどころか大塚〇薬すら無いんだった。

「携帯食料だよ。これはそのフルーツ味」

わざわざジョンに他の補給品を減らして持ってきて貰った。ウチの隊でレーションといえばこれだからだ。二人で分け合いながら吹雪が止むのを待った。

フレデリカＳｉｄｅ

「何故許可してくれないんですか！！」

私はライトマン中佐に怒りをぶつけていた。

「気持ちはわかる。だが、生きているかも解らないのに救助には行けない！それに吹雪のせいで航空支援も出来ないんだぞ！」

「大尉、中佐が正しい」

「ジョンソン少佐！」

理性では無茶を言ってるのは解っている。けど、言わずにはいられなかった。

「フレデリカさん、今は待ちましょう。兄さんは必ず帰って来ますよ」

「湊……解ったわ」

湊にまで言われたら仕方ない。今は吹雪が止む事を祈ろう。吹雪さえ止めば偵察機で二人を捜せる。

「生きて帰って来なさいよ、バカ……」

ＳｉｄｅＯｕｔ

「中佐」

「あぁ、行こう」

吹雪が止み、俺達は移動を再開する。

「前方５０ｍ、小型ネウロイ」

「了解。片付ける」

俺はサプレッサー付きのＭ４で排除する。派手な音を立てるとネウロイが寄ってくるからな。

地図によると坑道はもうすぐだ。ヘイヘ少尉の家からは約１ｋｍ。だが、ネウロイもこの辺りに偵察部隊を送り込んでいる。

「少尉、少し急ぐから揺れるぞ」

「はい」

俺は歩くスピードを上げる。途中何匹かのネウロイを排除し、坑道に取り付く。中に入ると錆びたツルハシやスコップ、シャベルが棄てられてあった。石炭の採掘中にネウロイから逃げたしたのだろうか？Ｍ４に取り付けてあるライトを使い前に進んで行く。

「クソッ、暗視ゴーグルを持ってくりゃよかった」

かなり進んだ所で少尉が叫ぶ。

「中佐、後方よりネウロイ！」

「前にも居てる！」

挟み撃ちにされた。俺は少尉にＳＲ－２５を渡す。

「少尉、数が多い。こいつを使え」

Ｍ４の引き金を引きながら俺はあるものを用意する。Ｃ４爆弾だ。壁や地面にＣ４を設置していく。前方に居たネウロイを倒し、一気に走る。少尉が揺れでくじいた脚を打ち顔をしかめるがおかまいなしに走りつづける。

途中、Ｃ４を仕掛けながらようやく出口に着いた。
Ｍ２０３にフレアを装填し発射する。シュポンという音と共に赤いフレアが放たれ、夜空に鮮やかな花を咲かせる。ネウロイ達が坑道から出ようとした時、俺は手元に有るリモコンのスイッチを押した。いくつかの爆発音と共に坑道が崩れ落ち、ネウロイを押し潰す。

これで坑道からは敵が来なくなったがまだ谷と空がある。味方が来るのが早いか、ネウロイが来るのが早いかだ。

「頼むから味方が先に来てくれよ」

続く……

墜落、そして二人の逃避行後編（後書き）

後編なのに話が終わらないという恐怖。でも次回は反撃の予定ですから逃避行っていうのもおかしいですし、まぁ良いかと。次回は親父さんに続く増援が到着します。

救援、そしてガンシップ（前書き）

今日の生物のテストで轟沈。後半はノリです。テストのせいでテンションが変になってるだけです。気にしたら負け。

救援、そしてガンシップ

先に来たのはネウロイ達だった。俺達は遮蔽物に身を隠しながら応戦する。

「少尉、時間を稼ぐぞ！」

「了解！」

グレネードランチャーで小型を2～3匹まとめて吹き飛ばす。中型からビームが放たれるが遮蔽物がうまく防いでくれた。

「ストライカーさえ有ればシールドが張れるのに！」

少尉のストライカーはヘリ墜落時に大破してそのまま放置されている。

「無い物ねだりはするな少尉。救援が来るのを信じろ」

だがしんどいのも事実だ、弾薬が無くなりかけている。Ｍ４の弾が無くなりサイドアームのＭＰ７を脚のホルスターから引き抜く。一発一発を大切に使う。少尉もＳＲ－２５の弾が無くなりモシン・ナガンを使い始める。

「クソッ！残弾ゼロだ！」

とうとうＭＰ７の弾も無くなった。少尉も無くなったらしい、残ってるのはガバメントとスモークグレネード、航空支援用のストロボマーカーだけだ。

「済まんな少尉、一緒に帰る事もパートナーになるのも出来なくなりそうだ」

「後悔しませんよ。私が死んだら泣いてくれる人が居るって解っただけで幸せですから。それに純一さんに出会えて良かったです」

「そう言って貰えると助かるよシルヴィア」

「じゃあ、英雄になりにでも行きますか！」

俺がネウロイにガバを向けてぶっ放していると、バラバラとプロペラの回転音がする。この音はヘリでは無い。

「……レシプロ機？」

だがその呟きは轟音に掻き消された。目の前が一瞬にして火の海になる。飛んで来たのはＡＣ-１３０スプーキー・ガンシップだった。

「ウチにガンシップは居ない……って事はジョンが持ってきてくれたのか！」

１０５ｍｍ砲と４０ｍｍ砲、２５ｍｍ機関砲が鋼鉄の雨を降らす。中型と小型ネウロイの混成部隊は跡形も無く消えた。僅かな生き残りも救援部隊に駆逐される。

迎えに来た第一小隊と共にシーナイトに乗り基地に帰還する。機内でフレデリカと湊に怒られるし、陸戦ストライカーで出撃してきたロザリンド少尉に泣き付かれたり、ジェニファー准尉にからかわれたりした。

「中佐、ガンシップから通信が入ってます。」

副操縦士が無線機を渡してくる。

『ロメオ６－４聞こえるか？』

「久しぶりだな、レイニー１－１。また話せて嬉しいよ」

『あぁ、俺達もだ。』

「いつこっちの世界に？」

『ついさっき。此処はいったい何処だ？』

「話しは基地に帰ってからだ。それにしても、よく俺だと解ったな」

『戦闘中にＦＣＳのガンカメラのやつが《なんか見覚えがあるヤツが居る》って気づいてな。それに迎えにきたヘリが海兵隊のヘリだったからもしかしてってな』

「そうか。とにかく助かったよ、サンキューな」

無線を切り、席に戻る。

「誰だったの？」

「レイニー１－１」

「？」

「なるほど、あの機長さんですか」

「知り合い？」

「アフガンで世話になってな」

「ふ～ん」

機長が着陸を告げ、前方作戦基地（キャップ）に着陸する。ガンシップはＨＱのあるスオムス軍基地の方まで飛んでもらう。明日、車両でキャップまで来て、状況説明を行うつもりだ。

キャップでは大隊の仲間が生還を祝ってくれた。だがスーバニが死んだのも事実だ。全員一度は死んだ身とはいえ、やはり仲間の死は悲しい物だ。葬式も明日行われるとライトマン中佐が教えてくれた。

俺達の生還を祝う喧騒のなかヘイヘ少尉が言った一言が場を凍り付かせた。

「純一さん、式は何時にします？会場は出来ればハワイが良いです」

「えぇ～っと、少尉？何の話しだ？」

「何って、私と純一さんの結婚の事ですよ？」

「「ジュン（兄さん）どういう事か説明してくれるわよね（くれますよね）」」

「少尉、アレはそういう意味で言った訳じゃ！？それにフリンに湊、

怖い、怖いから！」

フレデリカと湊がナイフを抜刀、コマンドは……」

1．戦う

2．道具

3．説得

4．仲間を呼ぶ

5．逃げる

迷わず5を選択……ダメだヘイヘ少尉が俺の腕を掴んで放さない。

「少尉、放してくれないか？」

「さっきみたいにシルヴィアって呼んで下さい」

「シルヴィア、放してくれないか？」

「私が居ると嫌ですか？」

うっ、上目遣いに見られては逆らえない。

「べっ、別にそういう訳じゃ無いんだぞ。ただ今は、ちょっと放してくれると嬉しいかな～って」

「嫌です。一生放したくありません」

こうなったら選択肢の3だ！

「よくもまあ、この状況でイチャイチャ出来るわね、ジュン？」

「兄さん？兄さんは何時から変態さんになったんですか？」

説得とか無理じゃん！4、4だ！

「ライトマン中佐、何とかしてくれ！」

だが中佐はやって来たマンネルハイム将軍の応対をしている。

「中佐！大丈夫かね？」

「あの通り、大丈夫です」

「ライトマン中佐、これはいったいどういう事かね？」

中佐はダメだ、なら！

「ガニー、俺を助けろ！」

「無理ッスよ！俺が死んじゃうッスよ！」

ええい、ブルータスお前もか！とにかくなんとかしないと、俺の命が危ない！

「あれっ？ちょっ！アアァァーー！」

「隊長、骨は広いますよ！」

キャスパー、胸の前で十字架を切るのは止めろ！

この日、俺は４回程死を覚悟した。

救援、そしてガンシップ（後書き）

ちなみに逃避行編は色々なアニメや漫画、映画やゲームから繋ぎ合わせました。具体的にはＰＳ３のメダル・オブ・オナーと出撃！！乙女たちの戦場２、フルメタル・パニックとかです。共通点は任務の途中に遭難（笑）

葬儀、そして新たな命令（前書き）

前回テンションが高かった理由が判明。テスト期間中にもかかわらず風邪を引いて熱を出していたみたいです。今も風邪と戦っています。明日の日本史大丈夫かな？

葬儀、そして新たな命令

なんとか二人から逃げ延びた俺は、

「ネウロイに殺されかけたうえに二人の鬼に襲われるなんて……」

朝日に向かってぼやいていた。いや～装備品にスモークグレネードが残ってて良かった。アレで煙幕張って逃げたからな。

「中佐、ガンシップの乗員が到着しましたよ」

「了解っと」

俺は立ち上がると指揮所へ向かった。

指揮所に着くと懐かしい顔が居た。

「よう、ロメオ６-４」

「ああ、久しぶり」

ロメオ６-４というのはアフガンでの作戦中に使っていたコールサインだ。

～～～～数分後～～～～

「成る程、ようするに、そのネウロイとかいうヤツらを全部ファ○クすれば良いんだな」

「そうだ。だが、連中は手強いぞ。陸戦型は小型なら歩兵サイズ、中型なら戦車サイズ、大型ならラーテからちょっとした要塞クラスだ」

ラーテとはナチスドイツが計画した超弩級戦車で、砲塔の大きさは戦艦の主砲並という化け物だ。

「おいおい、マジかよ！」

「残念ながら、な」

俺達が戦っているネウロイという敵がどれだけ厄介かを説明していると、スーバニの葬儀の準備が整ったと報告があった。

偵察に参加した兵とスーバニと親交があった兵が制服を着用し、儀仗用のＭ１ガランドを担ぎ集合する。葬儀といっても、捧げ銃、弔銃のみだ。遺体はリベリオンに後送されアーリントン墓地に埋葬される。

「捧げ～銃！」

全員が捧げ銃をしたのを確認し、次の命令を出す。

「一分間黙祷！」

黙祷も終わり、最後は弔銃射撃だ。

「弔銃、五連！てぇぇー！」

パン、パン、と五回銃声が鳴り響く。

遺体はヘリでアリアンロッドへ運ばれ、そこから艦上輸送機で本国へ向かう。

「さあお前ら、仕事だ、仕事！」

仲間の死に何時までも悲しんではいられない。きちんと仕事をして戦いに備えないと次に死ぬのは自分かも知れないのだから。

ラルＳｉｄｅ

ガリア、カールストラント方面のネウロイがブリタニアに侵攻を開始した。だが予想より数が少ない。

都筑中佐が居るスオムス方面に戦力を割いているらしい。だが今のところ防衛線が突破されたという情報は無い。

「中佐のお陰でブリタニア防衛がやりやすい」

「そうですね」

「そこの恋する乙女二人組。そろそろ敵さんが来るよ」

「「言われなくても解ってる（ます）！」」

「やれやれ」

ＳｉｄｅＯｕｔ

「来年の二月にリベリオンに一時帰国？」

「えぇ、本国からの命令です。本国にて追加の兵を加えた後二ヶ月程は練兵、その後はどこぞの戦線に放り込まれるらしいです」

スーバニの葬儀から二週間が経った。リベリオン合衆国軍司令部から命令が届いたのはそんな時だ。

「解った。今の内にこの基地の強化とスオムス軍の強化を図るぞ」

「イエッサー」

ウチの隊を増員か……司令部もウチの隊を認めてきたって事か？

「キャスパー！明日からスオムス軍の練兵だ。ハートマン軍曹もびっくりな訓練をするぞ！」

「了解です、隊長」

さて、ウィッチ隊にも訓練を受けて貰おうか。

「明日が楽しみだ」

「何が楽しみなんですか？」

「ヘイヘ少尉か」

「シルヴィアって呼んで下さい」

あの偵察作戦からイメージが変わったっていうか、何て言うか……

「それは非番の時にな。俺は私生活と仕事は分けるタイプだから」

「了解です。それで？」

「ああ、明日からスオムス軍とウィッチ隊に半分ずつだが訓練を受けさせるのさ、海兵隊式のな」

「どんな訓練ですか？」

「泣いたり笑ったり出来なくなる」

「へっ？」

「あと、戦闘マシーンになるな」

「えっと……」

少尉が少し引き気味だ。ちょっと大袈裟に言い過ぎたかな？

「冗談だよ。安心しろ少尉」

「良かった」

「それにしても少尉は明るくなったな。クールなイメージが有ったんだが」

「前の方が良かったですか？」

「いや、どんなシルヴィアでも受け入れるよ」

「ッ～～～／／／」

少尉が顔を赤くする。名前で呼ばれたのが恥ずかしかったのだろうか？まあ良い、明日のために訓練メニューを練らないとな。俺は少尉に別れを告げ自室へと戻った。

葬儀、そして新たな命令（後書き）

訓練の描写は多分数行で終了すると思います。

帰国命令、そしてシャーリーとの別れ（前書き）

シャーリーメインの回。後半はぶっちゃけ適当です。直せる時に直していきます。後書きにちょっとした報告。

帰国命令、そしてシャーリーとの別れ

「今日の訓練は此処までだ、解散！」

スオムス軍の歩兵達が疲れきった表情で兵舎に帰って行く。二ヶ月間、基礎体力訓練と射撃訓練、ｅｔｃ……。とにかく様々な訓練を施し、戦闘マシーンに仕立て上げた。今日訓練した兵達はこれが最後の訓練だ。

基地の強化も既に終わっている。これで現地の軍だけでも十分戦う事ができる。

「大丈夫か少尉？」

「大丈夫に見えますか？」

シルヴィアが恨めしそうにこちらを見ている。確かにウィッチにも訓練を受けさせると言ったのは俺だが、訓練メニューを考えたのはフレデリカと湊だぞ？俺に責任は無い……多分。

「訓練を無事に終えたみたいだし、プレゼントだ」

古来より女性の機嫌を直すには贈り物と相場が決まっている。

「スナイパーライフルとサブマシンガン？」

「そうだ、コルッカ曹長に渡した物と同じ銃だ。俺が使ってる７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾はこっちの世界じゃ手に入らないからな」

俺の持ってる銃はガバとバレット、ドラグノフ以外はジョンに弾を持ってきて貰わないと使い物にならないからな。

「7．62mmR弾ならモシン・ナガンに使われてるから手に入る。少尉は此処に残るんだろ？なら弾薬は手に入り易い方が良いと思ってな」

「残りませんよ？」

「へっ？」

「先程辞令が届きまして、私とリーリャは正式に第500統合戦闘海兵団に配属となりました」

「そうか、歓迎するよシルヴィア」

「有り難うございます。純一さん」

また今度、二人に別の銃を用意してやらないとな。

とうとう本国へ帰る日になった。新たにヘイヘ少尉とコルッカ曹長を加えた俺達はリベリオンへ向け旅立った。

スオムスへ来る時と同じく北極海方面の航路だ。バルト海方面はネウロイに制海権、制空権を握られてるからな。安全第一ってね。

ブリタニア本島の北、シェトランド諸島の辺りで本国から再度命令文が届いた。

「シャーロット・E・イェーガー少尉の転属？」

「そのようね。新設されたウィッチ専門の統合戦闘団、第５０１統合戦闘航空団に中尉として配属になるみたいよ」

少し寂しくなるな。

「シャーリーに伝えてくる。俺の分のデスクワークよろしく」

「はいはい、行ってらっしゃい」

少尉の部屋の前に着き、ドアをノックする。

「鍵は開いてるから入っていいぞ～」

「邪魔するぞ」

「ジュ、ジュン！？」

シャーリーが慌てて部屋を片付ける。別にそこまで汚いとは思わないんだけど……

「そ、それで何の用だ？」

「ああ、お前に転属の命令が来てる」

「転属？」

「中尉として第５０１統合戦闘航空ストライクウィッチーズに着任しろってさ」

「……嫌だ」

「シャーリー？」

「嫌だ！せっかく皆と仲良くなれたのに離れ離れなんて嫌だ！それにジュンと……」

最後の言葉は小さすぎて聞こえ無かったがとにかく俺はシャーリーを説得する事にした。

「シャーリー、これは軍の命令だ。軍人である俺達は従わないといけない」

「でも！」

「甘ったれるなイェーガー少尉！一度銃を握り、軍服を身に纏えば軍人だ！命令には従わなきゃならん！」

「うっ」

「既に先方の基地にはお前の新しいストライカーも用意されてる。後はお前が着くのを待つだけだ少尉。出来れば俺だってお前と別れたく無い。でも命令なんだ、割り切るしか無いだろ」

「解ったよ」

少尉は渋々といった形で転属を承認した。

「基地までは戦闘機で送る。明後日までに必要な荷物を纏めろ」

「了解」

俺はシャーリーの部屋を後にし、自室へと戻った。といっても隣同士なんだけどな。薄い壁越しにシャーリーの泣く声が聞こえる。

「ちょっときつく言い過ぎたかな？」

俺の呟きは一人きりの部屋に虚しく響くだけだった。

シャーリーＳｉｄｅ

あの日から二日が経ちとうとう出発の時間になった。

「全システム、オールグリーン。異常なし」

『カタパルトとの接続を確認。何時でも発艦可能だ』

「了解」

戦闘機のコックピットでジュンと管制官が発艦の手続きをしていく。これが終わればいよいよお別れなんだな……不意にそんな事を思った。

「少尉、発艦するぞ。口は閉じとけ、じゃないと舌を噛むぞ」

「了解」

一晩中泣いたら気持ちの整理がついた。別に一生会えなくなる訳じゃ無い。そう思うと気持ちが少しは楽になった。

「オールブレーキ・リリース。発艦！」

一瞬ですごいスピードになった。カタパルトを使って機体が一気に放り出される。

「まだまだ序の口だぞシャーリー！」

そう言うとスピードがグングン上がっていく。一度機体がかなり揺れたが直ぐに安定した。

「これが音速の世界だ」

「これが……」

速い。ただその一言に尽きる。これが私の目指す世界の速さ……

「途中、機体が揺れたのはショックコーン、つまり衝撃波だ……って聞いてないなこりゃ」

眼下にある雲や島が一瞬で現れては消えていく。何時か私は自分で……自分とストライカーでこの世界を飛ぶんだ！

「目的地の近くだ。速度を落とすぞ」

もうドーバー海峡に在る基地に着いたらしい。

機体を滑走路に着陸させ、コックピットから降りる。燃料増槽を輸送用に改造したタンクから荷物を引っ張り出し新しい仲間のもとへ歩いていく。

「シャーリー！コイツを持っていけ！」

渡されたのはシュバルツェア・ラファール隊のマークが入ったフライトジャケットだった。

「ｏｎｃｅ　ａ　ｍａｒｉｎｅ　ａｌｗａｙｓ　ａ　ｍａｒｉｎｅ（一度入ったら海兵隊）だ。何時までもお前は俺達の仲間だ。そしてＳｅｍｐｅｒ　Ｆｉ　だ。しっかり働けよシャーリー！」

「ああ！また何時か会おう！」

「その時まで元気でな！」

互いに別れを告げると彼の戦闘機は飛び立って行った。彼の機体が完全に見えなくなった後、早速私は新しい仲間に自己紹介をしていくのだった。

帰国命令、そしてシャーリーとの別れ（後書き）

相変わらずクオリティーが低いｏｒｚ
明日でテストも終わりです。が、これからも二日に一回の更新にしようと思います。理由はこちらの方が書きやすいからと積みゲーが溜まってまして（汗）何とか処理しないとな～って感じです。完全に作者の都合ですね、すみません。

帰国、そして観光（前書き）

アサルトホライゾンを購入。戦闘機をブイブイいわせてます

帰国、そして観光

「入港用意！」

「アイ・アイ・サー！入港用意！」

艦隊がクアンティコ海兵隊基地入港していく。

「久しぶりにクアンティコに帰ってこれたな～」

「結構長くスオムスに居ましたもんね」

海軍長官がこちらに向かって来る。

「ご苦労だった諸君。先ずは一週間休暇をとってくれ。話はそれからだ」

「「「ｙｅｓ　ｓｉｒ！」」」

休暇か……取り敢えずシルヴィアとコルッカ曹長にリベリオンの観光案内でもするか。

湊Ｓｉｄｅ

「お出かけですか？」

「ああ、シルヴィア達にリベリオンを案内してやろうと思ってな」

「そう……ですか」

「？　どうかしたか湊」

「い、いえ何でも有りません」

本当は兄さんと一緒に二人で出掛けたかった。でも、二人の笑顔（主にヘイヘ少尉）を見ると、とてもそんな事は言えなかった。

「兄さんのバカ……」

ＳｉｄｅＯｕｔ

今俺達はアーリントン墓地に来ていた。スーバニの墓参りだ。

「安らかに眠ってくれよ准尉」

敬礼をした後、二人と共にニューヨークへ向かう。

「大きい！」

「あれが自由の女神、リベリオン独立のシンボルだ」

「こっちはエンパイアステートビルだ」

「こっちも大きい」

二人とも初めて見る高さの建造物に驚いている。いや～連れてきた甲斐が有った。

そんなこんなでいつの間にか夜になっていた。

「二人とも、そろそろ帰るぞ」

「「はい」」

ハンヴィーでクアンティコまで帰る。基地に着き、兵舎に荷物を置く。

「お帰りなさい」

「ただいま湊。はい、これはお土産だ」

渡したのはリボンだ。湊の髪型はサイドポニーで何時も同じリボンで結んでいる。

「あ、有り難うございます」

喜んでくれたようでなによりだ。

「兄さん、夕食はどうします？」

「向こうで済ましてきたから、夜食に回して」

「了解しました」

さてと、技術者連中の所に行きますか。

「技術大尉、首尾は？」

「大統領に頼んで工業施設一式と労働者を用意して貰いました」

何故、技術者と話しているのか？それは兵器や弾薬を生産するためだ。現状では武器弾薬は例外を除いて全てジョンに頼っている。だが、ジョンが一度に持ってこれる量には限りが有る。

戦車や戦闘機の摩耗した部品を持ってきて貰うと弾薬が減る。弾薬を多く頼むと他の軍需品が減る。

これを解消する為にこちらの技術レベルで作れる物は作ろうと決めたのだ。

「今のところ生産出来そうなのは各種銃の弾薬とＲＰＧ、ＬＡＷです」

「上出来だな」

これで補給面が楽になる。

「なるべく急いでくれよ」

「了解！」

んじゃ、用事も済んだし部屋に帰って夜食を食べたら寝るとしますか。

帰国、そして観光（後書き）

眠いです。そうそう、テストが返ってきたんですが、惨敗でした。

輸送機、そして爆撃機（前書き）

すみません、戦闘パートでも日常パートでも無いです。ガンシップの時同様戦力強化です。

輸送機、そして爆撃機

休暇を終えた俺達に与えられた次の任務はバルセロナの防衛だ。バルセロナは現在、ネウロイとの最前線にある。アフリカ方面とガリア・カールストラント方面の二方向からネウロイの攻撃を受ける激戦区だ。出撃は二ヶ月後になる。

今はその事についてダグラスと話し合っている。

「先ずはジブラルタル海峡を抜けさせてくれるかどうかですね」

「ああ、タンジールの辺りに小規模の巣が在るらしい」

小規模とはいえかなり脅威になる、厄介だな。

「アフリカ方面の支援作戦はいつ頃になります？」

「陸軍は最低でも来年中頃になると言っている。だが海軍長官は我々をアフリカ方面に投入したいそうだ、カサブランカを橋頭堡にブリタニア軍とカールストラントアフリカ軍団、ロマーニャ軍と合流したいらしい」

「では何故バルセロナに？」

「陸軍から横槍が入ったらしい。『ジャーヘッドと海軍の連中に陸戦なんか出来るはずが無い』、だそうだ」

確かにリベリオン陸軍、海軍、海兵隊の三軍（この時代アメリカもリベリオンも空軍は無い）の中では海兵隊は一番小さい組織だから

な。それに軍政面においては海軍が仕切る事になる。そんな連中がカサブランカ奪回という大捕物をするのが面白く無いのだろう。

「それに、今の上院の大物議員には陸軍出身者が居ますもんね」

つまり、政治家も反対しているという事だ。

「幸い大統領は我々を認めてくれている。今はそちらに賭けよう」

「了解ですよ」

「それより訓練の方は良いのかね？」

訓練とはリベリオン軍から新たに加わった第五中隊の事だ。

「大丈夫ですよ。こわ～い鬼軍曹達がついてますから」

「そうか」

「では、そろそろ自分の執務室に戻りますよ。じゃないと怖い副官と妹に怒られるんで」

「サボるなよ中佐？」

苦笑いしながらダグラスの執務室を後にした。

シャーリーＳｉｄｅ

５０１に配属されてから二週間が経った。元々の自分の性格と部隊の雰囲気も有り、直ぐに仲間とは打ち解けた。

隊長のミーナ少佐はいい人だ。ただ怒らせると怖い。副隊長の坂本大尉は腕は良いし、いい人なんだろうけどちょっと性格が……

副官のバルクホルンはいかにもカールストラント軍人って感じだな。ハルトマンはその真逆、対照的な二人だ。

エイラはオペレーションブリザードで一緒に飛んだから一応顔見知りだな。

まあ色々なタイプがいて楽しい部隊だ。

「こんどジュンに手紙でも書こうかな？」

「誰に手紙を書くんだリベリアン？ミーナが呼んでいるぞ、早く来い」

「はいはい解ったよバルクホルン」

ＳｉｄｅＯｕｔ

「やっと来たか」

前にジョンへ頼んだ物がようやく来た。Ｃ－５ギャラクシーが４機、Ｃ－１７グローブマスターが８機、Ｃ－１３０ハーキュリーズが１２機だ。これを４で割って輸送機隊を四つ作る。兵站と輸送は大切だからな。兵站支援専用の部隊も設立した。まだ空軍が設立されていない以上、補給物資や部隊は自分達で運ぶしかない。陸軍に頼むと嫌な顔をされるからな。

「苦労しましたよ、こんなに一気に複製するのは」

「済まないな。でも必要でね」

「オマケを付けておきましたよ」

ジョンが指差した方向を見ると滑走路にＢ－５２Ｈが４機止まっている。

「搭乗員もセットです。ちょうど来ましたね」

やって来たのは中年の男性だった。

「オールド・ドッグ隊のジャック・バーナビー中佐だ」

「陸戦隊司令官の都筑純一中佐です」

ジョンが連れてきたって事は向こうで死んだって事か……向こうも大変そうだな。

「んじゃ、輸送機隊と爆撃機隊の歓迎会でもしますか。ジョンもくるか？」

「ええ、是非とも」

この日は夜にささやかなパーティーをして一日が終わった。ちなみにスタングが飲み過ぎて後日、二日酔いどころか三日酔いになったのには皆で笑った。

輸送機、そして爆撃機（後書き）

次回からヒスパニア編です。アフリカ編を期待してた人にはすみません。アメリカ軍のアフリカ戦に時期が合わなかったんです。それで繋ぎの意味で入れました。

突然の襲撃、そして迎撃（前書き）

ゲームのやり過ぎでクオリティーが……
バルセロナ編をやる予定が間を挟む事になってしまいました。

突然の襲撃、そして迎撃

「弾薬の初期生産が終わりました。既に射撃試験も終わってます」

技術大尉がわざわざ報告に来てくれた。

「了解。次の任地に持って行くからコンテナに詰めて兵站支援部に送っといて」

「了解。こっちで再現出来る兵器は可能な限り作りますよ」

「頼んだ」

大尉と別れキャスパーの所に行く。

「キャスパー、どうだ?」

「古参の兵は大丈夫ですが完全な新兵は使い物になりませんね」

「だからお前達に訓練教官をやらせてるんだろ?」

「はいはい、そうでした。ったく、俺には教官役なんて似合わないってのに」

「スタングが言うなら解るが、お前は教官向きだろ?」

俺がそういうと、キャスパーは嫌そうな顔をした。

「昔、学校の先生をやってたんですけどね、その時に人に物事を教

えるって行為を一生分やったんですよ」

キャスパーが教師をやっていたなんて初耳だ。普通は部下の経歴は調べるんだが、俺はその手の報告書は読まないからな。

「なんで辞めたんだ？」

「Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ、ですよ。入隊を決めたのは中国と北朝鮮、ロシア国家主義者……世界情勢が一気に悪化した時です」

「ウラジーミル・ペドストルフか」

「ええ、そうです」

ペドストルフはロシア国家主義者でロシア正規軍に匹敵する程の軍事力を保有し、東南アジアや中東のテロ組織、テロ支援国とも手を結んでいた。更にその動きに呼応し中国や北朝鮮も動き始めた。俺達が死んだ作戦もペドストルフの負の遺産だ。

もっとも、ペドストルフ自身は現役時代の親父に射殺された。それでもまだ争いの火種は消えなかった。

「そういえばコールサインの件、上手い具合に付けましたね」

そう、第五中隊が加わってから人事異動や再編成をした時に付け直したのだ。本来俺のコールサインはロメオ１‐１（前の数字が分隊を、後の数字が射撃班を表す）、もしくはロメオアクチュアルなのだが、これだと第二中隊の第三小隊と被ってしまう。だから今までラファールアクチュアルと名乗っていたのだが、再編ついでに新しく付け直した。

ちなみに、第一中隊は俺率いる第一小隊はロメオ、中隊副隊長のジョンソン少佐率いる第二小隊はローゼン・リッター、人事異動で分隊長から小隊長に昇進したフレデリカ率いる第三小隊はジュリエット、第四小隊はドラゴだ。シュバルツェア・ラファールは大隊名と５００の部隊名になった。

「まあな、そろそろちゃんとしたのを付けないと無線が混乱するからな」

「確かに部隊判別はしやすくなりましたね」

キャスパーと取り留めも無い話をしていると敵を知らせるサイレンが鳴り響く。

ヴゥゥゥーン

「警報だと！？」

こちらに１８歳ぐらいの新兵が走ってきた。

「敵襲！敵襲だ！」

「どうした二等兵！」

「ネウロイです！」

ネウロイ？一体何処から？

「二等兵、お前は逃げろ！」

「でも！」

反発した二等兵を黙らせたのはキャスパーだった。

「訓練も終わってない新兵が居ても邪魔になるだけだ！」

「はい教官！」

キャスパー、お前立派に教官やれてんよ。

海岸に行くと敵が上陸しようとしていた。何処かの軍の揚陸艦を真似たらしい。中型と小型を載せたネウロイが近付いてくる。

「リー二等軍曹、艦隊は！」

「まだドライドックです！ただし、潜水艦は出撃しています」

「了解！こちらロメオ1、潜水艦隊聞こえるか？」

『こちらはシードラゴンだ』

「対艦ミサイルは使えるか？」

『可能だ』

よし！　これであの揚陸艦を吹き飛ばせる。

「目標を指示する、攻撃してくれ！」

俺はガバの代わりにホルスターに入れていたＭｋ－２３を引き抜き
レーザー照準機をネウロイに向ける。

『了解。２０秒で着弾する、待機せよ』

俺は近くの岩に身を隠し待機した。

『３、２、１……インパクト』

ネウロイの揚陸艦は吹き飛んだ。

だが、それで油断したのがいけなかったのだろう、

「隊長、正面！」

「まずっ！」

小型ネウロイが一匹まだ生き残っていたのに気付かなかった。

ネウロイが俺にビームを放つ。『今度こそ死んだ』そう思ったが、
目の前に影が現れシールドを張ってビームを防ぐ。

「助かったよジェニファー准尉」

「いえいえ、お姉ちゃんの大切な人ですから」

「私も居ますよ」

小型は狙撃によって撃破された。

「ナイスショットだヘイヘ少尉」

「当然です。私は貴方のパートナーですから」

「二人とも、此処は任せた」

「「了解」」

俺は此処を二人に任せ、第五中隊の所に行く。

「少佐、状況は？」

「何人か殺られました。いずれも新兵です」

「そうか……航空支援は呼べそうか？」

「はい」

「なら、呼んであいつらを吹き飛ばして貰おう」

「了解」

中隊長が航空支援を要請してる間俺は新兵達の指揮を執る。

「右側に集中射撃！」

先ずは右側から潰す。左は航空隊に任せるさ。

航空隊との連携により前方のネウロイを全て駆逐した。他の中隊からもネウロイ撃破の報告が来る。

「これで終わりか？」

「みたいですね」

近くに居たコルッカ曹長が答えてくれた。

『いったい何処から来たんでしょう？』

ロザリンド少尉の疑問ももっともだ。

「どうもアフリカからしいですよ」

「キャスパー、それは確かか？」

「はい。なんでもはるばるジブラルタルを突破したらしいです」

ジブラルタル？あそこには連合軍の艦隊が展開してるはずだ。

「ジブラルタルって今度通る所じゃない！」

バルセロナへ行くにはかなり荒っぽい事になりそうだな。はぁ～、先が思いやられるよ。

突然の襲撃、そして迎撃（後書き）

今度こそバルセロナを！

爆撃、そして連戦前編（前書き）

寒っ！最近は夜に冷え込んで寒いです。

爆撃、そして連戦前編

俺達は今、クアンティコ海兵隊基地の会議室で作戦会議をしている。

「つまり、艦隊が先行してジブラルタル周辺の制空権を確保、その後航空隊の別動部隊クアンティコから出撃、エアーストライクミッションで良いんですね？」

「そうだ、スコーピオン大佐。我々が制空権確保と対空防御網を制圧する」

「そして我々が爆撃機のエスコート、巣を破壊後バルセロナの空港に着陸」

俺もＦ－１４ＥＸで護衛部隊と共に行動するつもりだ。戦闘機は一機でも多い方が良いからな。

「艦隊は明日の曙光と共に出発だ。準備を急げ！」

「「「了解！」」」

「各航空隊、並びに各整備隊は機体の調子を万全にしろ！」

「「「ｙｅｓ　ｓｉｒ！」」」

ダグラスが各部隊に命令を出し会議は終了した。

明朝、日の出と共に艦隊が発進していく。

「さて、俺達は出撃待機だ。オールドドッグ隊、準備は？」

「何時でも行けるぜ大佐殿。爆弾も満載してある」

「了解。ガンシップは？」

「コッチもO．Kだ」

数時間後、艦隊から通信が入る

『ザイール、繰り返すザイールだ』

ザイールとは事前に決めておいた作戦開始のコードだ。

「アンタレスリードから全部隊へザイールだ。離陸を開始しろ！」

「ファングクエイク了解！」

「レイニー了解！」

「オールドドッグ了解！」

「ブラックウインド了解！」

「出撃！」

全部隊が発進し、編隊を組む。此処からジブラルタルまでは2時間程で着く。

ジブラルタルに着くと混戦状態だった。

「アンタレスリードからサジタリウスリードへ、空は綺麗になってるんじゃなかったのか？」

「うるせー！敵の数が予想より少しばかり多かっただけだ！」

「はいはい」

オールドドッグＳｉｄｅ

「片付いたぞ！」

「了解。アプローチに入る」

機体を巣へ向ける。他の機体もついてこれてるな。

「ＦＣＳ、最終爆撃アプローチに入る。準備しろ！」

「了解。ハッチ開放、投下用意！」

「爆撃開始！」

大量のＪ－ＤＡＭ爆弾が地上の巣を焼き払う。

「こちら空域管制機のシュタデルだ。ネウロイの巣の撃破を確認した。そのままバルセロナに向かわれたし」

Ｅ－２から通信が入りバルセロナへ向かう。

ＳｉｄｅＯｕｔ

強行突破を無事に成功させた俺達はバルセロナへ向かう。先行したオールドドッグから通信が入る。

「バルセロナは現在ネウロイとの戦闘中だ！」

「なに！ブラックウインドからアリアンロッドへ、バルセロナは現在戦闘中！陸戦隊による強襲上陸を要請する」

「了解。ライトマン中佐に指揮を執らせる」

「了解！」

連戦かきついな……

「アンタレスリードから各機へ、燃料が少ないものは空母に帰艦しろ。他はついて来い！」

「「「了解！」」」

続く

爆撃、そして連戦前編（後書き）

最近はゲームばっかりしてます。小説書けよ俺！

爆撃、そして連戦後編（前書き）

明日はカラオケ楽しいな♪

爆撃、そして連戦後編

スコーピオンＳｉｄｅ

ヒスパニア軍が応戦しているが状況が悪い。

「アンタレスリードから全ヘリ部隊へ。ヒスパニア軍に被害が出ている、地上支援を要請する。」

「了解。陸戦隊は１０分後に到着する。それまで戦線を持たしてくれ」

「了解」

全く無茶を言ってくれる。だが、やるしかない。

「ブラックウインドからアンタレスリードへ。燃料と弾薬がもう無い。帰艦後は陸戦隊に戻る。機体はバクスター大佐に任せる」

「解った。気をつけろよ」

「了解」

「アンタレスリードから各機へ！後少しだ、守り抜くぞ！」

ＳｉｄｅＯｕｔ

ライトマンＳｉｄｅ

『後３分！』

揚陸艦が港から少し離れた所に着く。『ＬＣＡＣ発進！ｓｅｅ　ｙｏｕ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｂｅａｔｈ！』

「サンキュー。出るぞ！」

揚陸艦ワイキキビーチからホバークラフトとＡＡＶ７Ａ１が飛び出していく。他の艦も同様だ。

港のすぐ横の海岸に上陸し、直ぐに移動する。

「ＭＯＶＥ！ＧＯ　ＧＯ　ＧＯ　ＧＯ！」

都市部に突入しヒスパニア軍の救出に向かう。だが敵が多い。

「角に注意しろ！敵が居るかもしれんぞ！」

そう言った途端に敵が現れる。Ｍ２４９を持つ兵士が発砲し、撃破。

「第一中隊は医療チームの護衛、第三中隊は逃げ遅れた民間人の援護！第四は空港の安全を確保しろ！第五中隊は車両部隊と行動だ！」

命令を出し終え第二中隊と共にメインストリートへ向かう。

メインストリートに着くとヒスパニア軍と小型ネウロイの群れが戦っていた。丁度俺達の反対側だ。

「攻撃用意」

建物の角や遮蔽物に仲間を隠れさせ、攻撃の準備をする。

「こちらブラスト。全分隊配置完了」

「こちらレーヴェ。右に同じく」

「ハンマーも完了。何時でも行けるぞ！」

第二小隊、第三小隊、第四小隊（戦闘工兵隊）から準備が完了したと報告が来る。

「Ｏｎ　ｍｙ　ｍａｒｋ！……撃て！」

各小隊が一斉に射撃を開始しネウロイを倒していく。

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

一度射撃を止める。ヒスパニア軍がコチラに叫んできた。

「何処の部隊か知らんが助かった！」

「第５００統合戦闘海兵団だ。バルセロナ防衛の支援に来た！」

「助かるよ！」

『こちら第一中隊。都筑中佐と合流した。』

『第三中は民間人を第一中隊の地点に送り届ける最中だ』

『第四中隊は現在敵を殲滅中』

『第五中隊は空港の安全を確保。オールドドッグ隊、レイニー、着陸しても大丈夫だぞ』

「了解！指揮権を都筑中佐に返す。大隊長殿、命令を！」

『敵を追っ払え！ただそれだけだ！』

「聞いたな？インベーダー共をやっつけに行くぞ！」ＳｉｄｅＯｕｔ

「アンタレスリードから地上部隊へ、全航空部隊は一度帰艦する。しばらくの間支援は無いぞ」

「了解」

航空隊が居なくなる。だが今回は敵に空戦型ネウロイが存在しない為、制空権はこちらの物だ。

『こちらレイニー。敵さん後退を始めたぞ』

「こちらも後退して防衛線を張るぞ」

取り敢えずこれで戦闘は終了か。

各中隊の第四小隊にバリケードや陣地を築かせる。俺は負傷した兵士で溢れる医療チームの居る建物へ向かい、状況を確認する。

「大丈夫そうだな」

取り敢えず、湊と義母さんの手伝いでもしますか。

爆撃、そして連戦後編（後書き）

次回は……どうしよう？一応アンジェラ・ララサーバルは出したいな～

アンジェラ、そして都市防衛（前書き）

カラオケ楽しかったです。ただし、喉をやられました。

アンジェラ、そして都市防衛

撃破されたヒスパニア軍戦車等を使って使ってバリケードを作る。

「敵はまた来るぞ。なるべく急いでくれ」

「無茶言わんで下さいよ」

『オールドドッグ1からお困りの司令官殿へ。敵に空戦型はいないんだろ？俺達がサクッと爆撃してこようか？』

「……頼みます」

少し考えこんでから許可を出す。

『了解。敵の数を減らしてくるよ』

空港から爆撃機隊が発進していく。

「大尉、俺は一度医療チームの所に戻る。バリケードはしっかり組んでくれよ」

陸戦型ネウロイの攻撃力は小型はＡＫ程度、中型は１２０ｍｍクラス、大型は計り知れない威力だ。しっかり組んでおかないと直ぐに突破されてしまう。

「解ってますよ。１５５ｍｍ榴弾砲の直撃を喰らっても大丈夫なようにしときます」

工兵隊のもとを離れ医療チームの居るテント群を目指す。

「ですから、まだ無理です！」

近付くと、湊の怒った声が聞こえてきた。

何事だ？俺は近くに居た衛生兵に声を掛け問いただす。

「負傷したウィッチが出撃するって騒いでるんです」

よく見ると包帯を巻いたポニーテールのウィッチらしき少女が湊に突っ掛かっている。

「あのネウロイ達に仲間を殺されたんだぞ！」

「その怪我で出ても、貴方が死ぬだけです！」

かなり激しく言い合ってるみたいだ。仕方が無い、俺が止めますか。

「二人とも抑えろ、抑えろ」

「兄さん」

「誰だ？」

二人はようやく言い争いを止めてくれた。

「この部隊の大隊司令官兼中隊指揮官の都筑中佐だ」

「なら話は早い。私を出撃させてくれ！」

「却下だ」

「何故！」

「理由を言ってやろうか？……負傷してロクに動けないウィッチなんか足手まといだからだ」

「なっ！」

ウィッチは驚いた声を出す。こういう時は事実を突き付けるのが一番良い。

「でも仲間が殺られたんだ……」

「お前、名前は？」

「アンジェラ・ララサーバル少尉だ」

「ならララサーバル少尉、仇は俺が討ってやる」

「頼む……」

『オールドドッグからロメオ１へ、爆撃は終了した。だがさっきも居た大型が街に向かってるぞ！』

「そいつだ、そいつがヘレンを！」

「大隊は展開し、迎撃態勢！」

「「「「了解！」」」」

アンジェラＳｉｄｅ

彼らの行動は迅速だった。疾風という言葉が似つかわしい。『私があのデカブツをやるんだ』そう思っていた。仲間の仇を討つ、その事に私は取り付かれていた。でも彼に足手まといと言われた時に目が醒めた。

『ファントムリードから全ＶＴＯＬ部隊へ、攻撃開始！』

『ファーザーからロメオ１－１へ。息子よ小型が街に侵入したぞ！』

『レイニーは現在旋回砲撃支援中』

テントに置かれた無線機から戦闘の状況が聞こえてくる。

『アーバレスト隊は支援砲撃を開始する』

『ドラゴからアリアンロッドへＡ-１０は飛ばせないのか！』

かなり激しい戦いのようだ。今此処で何も出来ない自分が惨めに思える。

「くそ！私にもっと力が……」

ＳｉｄｅＯｕｔ

残りはあのデカブツだけになった。

「こちらレイニー、対空砲火が強すぎて近付けない！」

「艦隊の一斉射撃でもコアを剥き出しにするのが限界か……」

「俺に考えが有る！俺の合図でもう一度！」

俺はそう言い後ろに向かって走り出す。向かうのは、教会のベルの塔。

「着いた！Ｏｎ　ｍｙ　ｍａｒｋ！」

背中からＭ８２バレットを引き抜き、構える。

距離は目算で１．６ｋｍ。敵は動いてない。

「コリオリ力を考慮に入れて上に2ミル、右からの風は風速８ｍ。照準をもうちょい右にずらして……」

照準定め、合図を出す。

「撃て！」

艦隊からの砲撃支援が直撃しコアが剥き出しになる。だが、直ぐに再生し始める。

「この一撃にすべてを賭ける！」

引き金を引き、弾丸を発射する。１２．７ｍｍの弾は風と重力の影響を受けながら飛翔する。

そして弧を描きながら飛んだ弾丸は大型ネウロイのコアを貫く。

「ドンピシャだな」

『こちらジュリエット1‐1よ。ネウロイの破壊を確認。ジュン、ナイスショット』

「サンキュー、フレデリカ」

何とか守り通せたな。戻ってララサーバル少尉に報告しないと。

アンジェラ、そして都市防衛（後書き）

出して欲しいキャラとか居たら感想に書いてくださいね。他のアニメのキャラでも言いですよ。兵器やオリキャラとかもどぞ。

戦う意味、そして新しい命令（前書き）

なんか意味不明な文に……ひとえに作者の力不足です。

戦う意味、そして新しい命令

アンジェラＳｉｄｅ

彼等が帰ってきた。

「コンティア中尉がクラスＢの負傷だ、三番のテントまで運べ！」

「おい、一等兵！しっかりしろ！」

「衛生兵！衛生兵！」

医療テントは一瞬で地獄となった。あちこちから悲鳴や怒号が聞こえる。

「戦いでも、此処でも私は何も出来ないのか……」

「ララサーバル少尉！」

「中佐……」

「お前の仲間の仇は討ったぞ」

「中佐、私は何も出来ませんでした。私は何の為にウィッチになったんでしょう……何の為に……」

もしかしたら私は中佐に戦う意味を求めていたのかも知れない。だが返って来たのは冷たい言葉だった。

「知るか、そんな物」

「そう、ですよね……」

「少尉、ウィッチになった時、軍人になった時、何を思い、何を願った？」

「えっ？」

「それが答えだ」

私の願い……ネウロイを倒して人々に平和を取り戻したい。ああ、そうか。これが私の戦う理由か。

「お前の仲間も、自分の信念の為に戦い……死んだ。そこに後悔は無いはずだ」

本当にそうなのだろうか？いや、そうであって欲しいと思う。

「貴方は？」

「ん？」

「中佐の戦う理由は？」

「『Ｓｅｍｐｅｒ　Ｆｉ』俺はその言葉の通りに戦ってるだけさ」

「ラテン語で常に忠誠を……ですか？中佐は何に忠を誓ってるんです？」

「自分自身と家族、仲間、そして海兵隊だ」

意外な答えだった。だが同時にそうかと納得出来る答えでもあった。

「国に帰ると友人によく聞かれたよ。何の為に戦うんだ？英雄に成りたいのか？他所の戦争にちょっかい掛けて楽しいか？もしかして戦争中毒なのか？ってね。だけど俺は何も答えない、連中には言っても理解出来ないのさ。仲間の為に戦うって事が……」

「仲間の為に……」

「俺達海兵に英雄に成りたい奴なんて居ない。結果として成るだけさ……」

そう言った彼の目は悲しそうに見えた。

ＳｉｄｅＯｕｔ

俺とダグラスはアリアンロッドの通信指揮所で海軍長官と話していた。

『５月にはアフリカへ向かって欲しい』

「今が２月半ばですから二ヶ月半後ですな」

『６月に陸軍がアフリカへ部隊を送る。それまでにアフリカ戦線のイニシアチブが欲しいのだよ』

「また政治ですか。解りました」

『君達の後任は第５０２統合戦闘航空団だ。それに他の国からもウィッチの増援が来るからバルセロナの事は安心したまえ。では、頼んだぞ』

「「はっ！」」

通信を終え、ダグラスと相談する。

「5月までにか……何時まで此処で粘れるかな中佐？」

「あと一ヶ月半程かと。一度本土に帰らなければなりませんし……」

「……そうか。中佐、工兵隊にバリケードの補強や防衛線の強化を急がせてくれ」

「了解」

工兵隊に伝えに行く途中で声を掛けられる。

「此処の指揮官さんは何処？」

声を掛けてきたのは二人のウィッチだった。

「俺だよ」

「へっ！？、失礼しました！ウィルマ・ビショップ軍曹です」

「……エリザベス・ビューリング少尉」

「それで？」

「バルセロナ防衛の支援に来ました」

「そうか。ウィッチならララサーバル少尉の所に行け。医療テントに居るはずだ」

「了解です」

二人と別れ、工兵隊へ命令を伝える。人使いが荒いって愚痴られたけどな。

戦う意味、そして新しい命令（後書き）

次回はキャスパーとあの人が……あの人が誰なのかは予想して下さい。あと何が起こるかも

キャスパー、そして地下からの襲撃（前書き）

かなり大雑把な感じに……人これを手抜きと言う！
なんかすみません。眠たかったんです。一日中寝れる気がしたんです！つまり、悪いのはこの気候だ！

キャスパー、そして地下からの襲撃

二人が来た翌日、作戦司令室でビューリング少尉と話していた。少尉はスオムス義勇軍に居たらしい。何処で見た顔だと思ったのは間違いではなかったようだ。

「ルーデルからの伝言だ。『必ず貴方の下へ行きます』、だそうだ」

ルーデル大尉がそんなに俺の指揮を気に入ってくれていたなんて思いもしなかった。指揮官としては嬉しい限りだ。その事をビューリング少尉に告げると少尉は呆れた顔をした。

「あいつは指揮官としではなく、異性として気に入っているんだが……」

「ん？　何か言ったか少尉？」

「何でも……」

ヴゥゥゥーン、ヴゥゥゥーン

「警報？ネウロイか！戦闘配置！」

キャスパーＳｉｄｅ

食堂で朝食のハムとパン、トマトを食べていると、一人のウィッチがやって来た。

「あの、前の席良いですか？」

「ん？　構わんよ」

「すみません。此処しか相手なくて」

そう言って席に座ったのはこの前来たウィッチだ。

「別に良いさ」

「有り難うございます。ええっと……」

「ロメオ１-１のジョン・キャスパー少尉だ」

「ウィルマ・ビショップ軍曹です」

ヴゥゥゥーン、ヴゥゥゥーン

互いに自己紹介を終えると同時に警報が鳴り出す。それと同時に都筑中佐の声が聞こえてくる。

『敵はこの基地の内部に侵入している。繰り返す、敵に侵入された！空からも敵は来てる！』

なに！？いったい何処から？だが今はそんな事を考えている暇は無い。

「ビショップ、戦闘だ。取り敢えず格納庫までエスコートする、ついて来い！」

「はっ、はい！」

ビショップを連れながら走る。

途中、俺の部屋に立ち寄る。だが、ドアの前に小型ネウロイが居た。

レッグホルスターからデザートイーグルを引き抜きネウロイを撃つ。

「お休み」

部屋に入りロッカーから予備の兵装を取り出す。何時も使っているＳＣＡＲ‐Ｈ等は更衣室に置いてある。俺が取り出したのはＭ６０だ。

素早く装備を整え格納庫を目指す。

格納庫手前の廊下でネウロイに阻まれる。Ｍ６０をぶっ放し道を開く。そしてビショップを先に行かせる。

「早く行け！このまま俺が此処で敵を抑える！」

「死なないで下さいね」

「任せろ。行け！」

ビショップは少し躊躇ってから格納庫へ向かって走り出す。

「全く、柄でも無いこと言っちまった」

自嘲気味に笑いながら覚悟を決める。

「掛かって来いインベーダー共！俺が相手だ！」

ＳｉｄｅＯｕｔ

ウィルマＳｉｄｅ

格納庫に着き、素早くストライカーを装着する。

「進行方向クリアー！発進ヨロシ！」

「ウィルマ・ビショップ、発進します！」

空港の滑走路から発進する。

先に上がっていた戦闘機隊からインカムに通信が入る。

『アンタレスリードからウィッチ隊へ敵は前回と同じく山脈の切れ目から来ている。迎撃するぞ！』

「了解！」

ヒスパニア軍と５００のウィッチ隊と共にネウロイの編隊に突っ込んでいく。

「こいつ等を片付けて基地の援護に行かないと！」

早くしないとあの人が死んでしまうかも知れない。そんなのは嫌だった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

「クソッ！敵はいったい何処から湧いて来るんだ？」
Ｍ４を撃ちながらぼやいていると声を掛けられる。
「地下からの様です、主」
主、俺をそう呼ぶのは一人しか居ない。
「シャドウか……何時からそこに居るんだよ？」
「先程からです」
通称、シャドウ。本名は俺と湊しか知らない。ロメオ小隊の第三分隊の分隊長で北の元工作員。暗殺や潜入、破壊工作、スパイ活動等に長けた女性だ。とある事情からウチの部隊に居る。
「それで地下……だと？」
「はい。どうも地下鉄から来た様です」
地下鉄の事を見落としていた。俺のミスだ。
「とにかく片付けるぞ！他の部隊と連携をとれ！」
キャスパーＳｉｄｅ
「ハァ、ハァ……」
既にかなりの数のネウロイを倒している。
「残弾ゼロか……まずいな」

床にＭ６０を置き、デザートイーグルに持ち替える。
敵が四匹やって来る。引き金を引き三匹を瞬時に倒す。四匹目に照準を合わせる。が、発射されない。

「クソッ！忘れてた！」

Ｍ６０を取りに行った時に数発撃ったんだった。

「キャスパーさん！」

四匹目のネウロイは声の主に倒された。

「ビショップ？空はもう良いのか？」

「はい！排除しました」

「そうか……。っ！ビショップ、危ない！」

現れた五匹目が無防備なビショップの背中を狙う。俺はビショップの手を掴み、放り投げる形で１８０度ターンし位置を入れ替える。

「カハッ……」

「キャスパーさん！？この！」

俺のうめき声で我に返ったビショップがマシンガンを撃ちネウロイを撃破する。

「キャスパ～無事か～？」

ボス、来るのが遅いですぜ？

「中佐！キャスパーさんが！キャスパーさんが撃たれました！」

「なに！？衛生兵！」

「キャスパーさん！しっかりしてください！何でもしますから！」

取り乱したビショップのその台詞に俺は冗談を返してやった。

「そう……だな、ならお前みたいな可愛い嫁さんが欲しいな」

「解りました、解りましたから！」

おいおい、そんな事約束したら後で俺の嫁さん捜しに苦労するぞ？

「隊長！患者は？」

「キャスパーだ」

衛生兵が来てくれたらしい。あとはドクに任せるさ。

キャスパー、そして地下からの襲撃（後書き）

ウィルマって年上好き何ですよね～
キャスパーも年上。
つまり、そういうことです。これで次回の話の内容が予想出来ますね。キャスパーやスタング等の設定って書いた方が良いんでしょうか？感想に要望が有れば書きますが……

戦闘終了、そしてプロポーズ（前書き）

昨日投稿する予定が、朝投稿することに……　寝落ちしちゃったんですよね～

祝・ＰＶ１００００００突破並びにユニーク１５００００人突破！皆様有り難うございます。

戦闘終了、そしてプロポーズ

キャスパーをドク（ドクターの略）に任せ、部隊指揮に戻る。

「第二、第三中隊は街に出た分の排除！第四中隊に地下鉄を塞がせろ！他は基地の中に入り込んだ連中の排除だ、行くぞ！」

「「了解！」」

負傷者達を艦隊に移動させたのは正解だったな。もし基地の方に移してたら被害が増えてた。

「分隊ごとに行動しろ！曲がり角にも注意しろよ」

相互援護の体勢をとりながら通路を進んで行く。

「隊長、曲がり角に敵です。スミスがコーナーショットで確認しました」

先行していたブラボーチームのグース准尉が報告してきた。

「排除出来るか？」

「火力が足りませんね。もう一個、射撃班が有れば可能ですが……」

「解った。俺達アルファが一緒に行く。チャーリー、向こう側から敵が来ないか見張ってくれ！」

「チャーリー了解」

チャーリーと共に攻撃体勢をとる。

「Ｏｎ　ｍｙ　ｍａｒｋ！Ｓｔａｎｄ　ｂｙ、Ｓｔａｎｄ　ｂｙ。ＧＯ！」

七つの銃口がＦＭＪ（フルメタルジャケット）の嵐をたたき付ける。

「制圧！」

『こちらウォッカ１‐１。第四中隊は地下鉄を制圧。敵の気配はしない。現在は警戒中だ』

「解った。そのまま監視を続けてくれ」

『了解』

よし！これで基地内部の敵はもう増えないな。楽になる。

「敵は今居る奴らだけになった。掃除の時間だ、一気に片付けるぞ！」

「「「了解！」」」

俺は分隊をさらに射撃班に分け行動させる。

「キャスパー……は居ないんだった。スタング、カバー！」

「了解ッス」

「湊は後ろを頼む」

「はい、兄さん」

キャスパーが居ない分射手が足りない。少し火力不足だな。

『スケアクロウ１-１からロメオ１-１へ。第五中隊は兵舎周辺と空港の安全を確保』

「了解。半分は待機、残りはこっちの援護に来てくれ」

『Ｃｏｐｙ　ｔｈａｔ』

無線を切り移動を開始する。

２時間後に戦闘は終結した。最後のネウロイをガバで撃ち倒す。

ウィルマＳｉｄｅ

「キャスパーさん！」

あの後、５００のウィッチ隊と共に基地のネウロイ排除に参加していた私は戦闘終了と同時にキャスパーさんが収容されている基地の医務室に走った。

「よう嬢ちゃん。元気にしてるか？」

「冗談言ってる場合じゃないです！」

「悪い悪い」

三発程身体に当たったはずなのにわりと元気そうだ。私がその事を口にすると彼は笑いながら答えてくれた。

「一発はボディアーマーが防いでくれてな。他の二発も急所は避けてるし」

心配するだけ無駄だったらしい。何か損した気分。それとあの事を伝えないと。

ＳｉｄｅＯｕｔ

キャスパーの居る医務室に入る。

「キャスパー元気か？なんだ……ビショップ軍曹も一緒か」

ビショップ軍曹も来ていたらしい。

「ボス。まあ、そこそこには元気ですよ」

「そうか。でも負傷して良かったかもな。」

「何故です？」

「嫁さんが貰える。ビショップ軍曹に可愛い娘紹介して貰うんだろ？」

「あれは冗談ですよ。俺ももうすぐ４０ですし、そもそも俺なんかと誰も結婚なんてしてくれませんよ」

「私がします！」

俺が部屋に入ってから黙っていた軍曹がいきなり口を開いた。

「軍曹？　いきなりどうした？」

「ビショップ？」

「私がキャスパーさんと結婚します！」

「俺がケガをした責任を感じて言ってるなら別に……」

「そんな物じゃありません！私が純粋にキャスパーさんと結婚したいんです」

何だろう？　ビショップ軍曹から時たま湊やフレデリカから感じる怖いモノをかんじる。

「お前は本当の俺を知らないからそんな事が言えるんだ」

「キャスパーさんが過去にどんな罪を犯していたとしても私は貴方と結婚します」

「俺は人殺しだぞ」

「どんな罪を犯していたとしてもって言ったでしょ！　人を殺してようが、他になにしてようが私は貴方と結婚あげますよ！」

「ビショップ、なんでそこまで……」

「ホントは一目惚れだったんです。私は年上好きで、キャスパーさんを見た時ビビビってきたんです」

「ビショップ……。解った、解ったよ。俺の負けだ」

「キャスパーさん……。じゃあ！」

「ああ。ただプロポーズは俺からさせてくれ。……ウィルマ、俺と結婚してくれ」

「はい……喜んで」

「お～い、俺の事忘れてない？忘れてたよね」

「「あっ！」」

二人して俺を空気扱い！？

「すみませんボス」

「ごめんなさい中佐」

「まあ、良いけど。二人とも結婚おめでとう」

「まだ結婚出来ませんよ。彼女はウィッチですから」

そうか、ウィッチは男性に不用意に近付いたらいけないんだったな。

「じゃあ私の二十歳のの誕生日の日に……」

「解ったよビショッ「ウィルマ！」……ウィルマ」
良い夫婦になりそうだな。

「なら我等がキャスパー少尉の婚約を祝ってパーティーしなきゃな。
もちろんケガが治ってからだぞ」

そうと決まれば話は早い。早速湊とフレデリカ達に相談だな。

戦闘終了、そしてプロポーズ（後書き）

積みゲーがどんどん積みあがっていく（泣）

キャラ設定2（前書き）

要望は有りませんでしたが一応程度で。というか駄作者オッティはキャラ設定やストーリー設定等を一切作ってないので書いとかないと忘れるんですよね……

キャラ設定2

ジョン・キャスパー

３８歳

階級：准尉→少尉

ロメオ小隊第一分隊アルファチーム所属　分隊支援、デモリッション担当

アフリカ系アメリカ人。前職は高校教師。２６歳の時、アメリカを標的としたテロで弟夫婦を失う。テロの後、海兵隊に入隊し在日、在韓米軍にて任務を遂行。

純一とはアフガンで彼の射撃班に配属されたのが出会い。部隊の中では湊に次いで付き合いが長い。

使用武器はＦＮ　ＳＣＡＲ‐Ｈ、デザートイーグル、スパスショットガン、ＡＴ‐４等。

キャラクターのイメージはＭＧＳ４のエド。

マイク・スタング

階級：二等軍曹→一等軍曹

２５歳

ヒスパニック系。ラファール隊に配属されたのはわりと最近。いじられキャラ。父親が水兵だった影響で海兵隊員に。普段はパッとしないがラファール隊に配属されるだけあって実力は本物。通信担当、グレネーダー。

使用武器はＭ１６Ａ４グレネードランチャー付き。Ｍ９２Ｆ。

ダグラス・リチャード・ロックウェル

５５歳

階級：中将

５５歳で中将にまで上り詰めた天才。純一の義父、ウィリアムとは昔からの付き合い。純一の叔父のバクスター大佐とは艦長と艦載機のパイロットという間柄。

娘であるフレデリカを溺愛している。なにかと純一をフレデリカとくっつけようとするが失敗続き。

艦隊司令とアリアンロッドの艦長を兼任している。

ジーク・ライトマン

３４歳

階級：中佐

第二中隊の指揮官

常識人で誠実な軍人。度々純一の代わりに大隊の指揮を執る。それなりに出番が有る幸運な人（笑）

使用武器はＭ４Ａ１、Ｍ９２Ｆ。

ライトマンという名前の由来はドラマ、ライ　トゥ　ミー主人公より。

エドガー・ジョンソン

４０歳

階級：大尉→少佐

ユダヤ系アメリカ人。ローゼン・リッター隊の小隊長。ラファール隊きってのプレイボーイ。キャスパーやライトマンがいい中年と言われる反対で、悪い中年と言われる人物。実は義理堅く恩に報いるタイプ。ライフルマン、接近戦の達人。

使用武器はＭ１６Ａ４、Ｍ１９１１ガバメント、トマホーク。

ダニエル・スコーピオン

３９歳

階級：大佐

いたって真面目なパイロット。最近の悩みはポプランとオコーネル。バクスターとは編隊を組んだ事がある。

アリアンロッド右舷側の航空隊司令官、アンタレス隊隊長。ダイヤのエース。

搭乗機はＦ－２２Ｎ

オリビエ・ポプラン

２８歳

階級：少佐

女好きで酒好き。悪い中年二号。『腕だけは確かだ、腕だけはな！』というのはアンタレスリードことスコーピオン大佐談

ニミッツ級空母ホーキンス航空隊司令官。ハートのエース。

搭乗機はＦ－３５Ｃ

グレイス・オコーネル

２７歳

階級：中佐

アリアンロッド左舷側の航空隊司令官、エンジェル隊隊長。

純一に一目惚れし、猛アタック。スタイル抜群、顔も良いのだが真面目に仕事をしないタイプ。『仕事をしてる暇があるなら彼の下へいくわ！』と言ってスコーピオン大佐に本気で叩かれた。クラブのエース

搭乗機はＦ／Ａ-１８Ｅ

カール・ブリッツ

２８歳

階級：中佐

ライトマン、スコーピオンに続く常識人。ポプランの面倒は彼の担当。ツッコミ要員。クローバーのエース。

搭乗機はＦ／Ａ-１８Ｅ

ジャック・バーナビー

５０歳

階級：中佐

オールド・ドッグ隊隊長。酒好き。１８歳で空軍に入隊してからずっと爆撃機に携わってきた古株の兵士。

搭乗機はＢ５２Ｈ

シルヴィア・ヘイヘ

１６歳

階級：少尉

使い魔：シベリアンハスキー

スオムス軍の天才スナイパー。銀髪の長い髪とキリッとした目が特徴。雪山の遭難事件以来、純一に好意を寄せている。

使用武器はＳＶＤ、クリス・ベクターサブマシンガン。

リーリャ・コルッカ

１６歳

階級：曹長

使い魔：シベリアンハスキー

シルヴィアと違い髪は短髪。それ以外はほぼ同じ。

ロザリンド・ロサレス

１４歳

階級：少尉

使い魔：ペルシャ猫

陸戦から空戦まで何でもこなすスーパーエース。

病気のせいで喋れなくなる。会話は基本的に手話でおこなう。ワンマンエアフォースことジェンタイルとは仲が良い。好物はモンブラン。

使用武器はＭ２重機関銃

ジェニファー・ロサレス

１３歳

階級：准尉

使い魔：ペルシャ猫

姉思いの良い妹。姉程ではないが何事もそつなくこなす。最近の楽しみは純一に対して淡い心を寄せる姉をからかう事。好物はチーズケーキ。

使用武器はＭ１ガランド

グース、ハンソン、リー、スミス、ブチャー、タッカー、ドベリオ、ジンネマン

ロメオ小隊の第一分隊ブラボーとチャーリーの隊員達。ただのモブキャラ。日陰でさりげなく咲く花の様な人達。目指せ、準レギュラー！

艦橋通信担当士官の大尉、アリアンロッドの料理長

名前すら無い人。それどころか一回しか出番が無かった。上の人達ですらそれなりに出番が有るのに……ただし、一番動かし易いキャラ。あといったい何回出られるのだろうか？ある意味気になるキャ

ラ。名前を募集します。

キャラ設定2（後書き）

虫歯には気をつけましょう。いきなりどうしたって？左上の奥歯が痛いだけですよ？痛い……

輸送機隊、そしてスクランブル前編（前書き）

文化祭疲れた～

輸送機隊、そしてスクランブル前編

キャスパーをアリアンロッドに移し、基地の復旧を始めてから3日。ヒスパニア軍が空港の横に基地を設置したから空港にも被害が出ている。

ビショップ軍曹の原隊に連絡して、軍曹をウチの隊に派遣して貰えるように頼まなきゃならんし、問題は山積みだな……

「隊長～航空輸送隊が来ましたよ」

「了～解～っと」

補給か……。書類仕事の甲斐が有った。

C‐5輸送機、アルバトロス1Sｉｄｅ

「アルバトロス1からバルセロナ空港へ。到着まで後……10分、10分だ」

『了解。補給か……久しぶりにレーション以外の飯が食えるな』

基地との交信を終え、再び操縦に専念する。

『2から1へ。今、何か見えなかったか?』

「いや、何も見えなかったぞ?」

『こちら3。異常無しだ』

『4も同じく』

アルバトロス隊全機は異常無しのようだ。

『こちら2。スマン、思い違いだったようだ』

そのままの進路を保ち飛行していく。

『…こち……リカン1……の……撃を受けて……』

「ペリカン1!どうした?ペリカン1、応答せよ!」

先頭を行くC-17輸送機隊の片割れ、ペリカン隊から通信が途絶えた。

「バルセロナ空港へ。ペリカン隊と通信途絶!応援を求む!」

『了解』

SideOut

スコーピオンSide

『スクランブル、スクランブル!輸送機隊が敵の攻撃を受けている。各部隊は速やかに発進せよ!』

「アンタレス隊、出るぞ!」

空港の駐機スペースから滑走路に愛機を移動させる。

「管制塔、点検は省略だ！すぐに離陸させる！」

『了解した。三番滑走路は前回の襲撃で、ネウロイにより破壊されている。四番滑走路より離陸せよ。Ｇｏｏｄ　Ｒａｃｋ！』

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ。アンタレス１、Ｆ－２２Ｎラプター発進する！」

全てのブレーキを解放し、アフターバーナーを全開にする。

「アンタレスリードからカアンタレス各機へ。フォーメーションダイヤモンド」

『こちら２、コピーライト』

『３、Ｙｅｓ　ｓｉｒ』

『４、了解』

編隊を組み、ペリカン隊の飛行ルートを目指す。

「エンゲージ！全機ブレイク！Ａｌｌ　ｗｅａｐｏｎｓ　ｆｒｅｅ！Ａｔｔａｃｋ！」

ペリカン隊はまだ生きていたが何発か喰らっている。

『Ｆｏｘ２、Ｆｏｘ２！』

３がアムラームミサイルを発射し、ペリカン１の背後に居た敵を吹き飛ばす。

「ペリカン1応答せよ。ペリカン1応答せよ！」

反応が無い。だが、ペリカン1の主翼の端に有るライトが何時もとは違う点滅を始める。モールス信号だと気付いたのはすぐだった。

「『本機は通信機器を全損せり』……か。世話のかかる鳥だな」

俺はラプターをC-17のコックピットに近付け、ハンドサインで俺達が空港までエスコートすることを伝える。

「アンタレスリードからホークス隊へ。我々はペリカン隊をエスコートする」

『了解した。ホークスは現在、ペンギン隊のエスコートを実行中だ』

ホークス隊がもうひとつのC-17の編隊と合流したらしい。他の隊からも輸送機隊と合流したという報告が入っている。

「アンタレスリードからアンタレス各機へ。絶対に守り抜くぞ！」

「「「了解！」」」

続く……

輸送機隊、そしてスクランブル前編（後書き）

前後編に分けたのは単に作者が眠たかったからです。すみません。

輸送機隊、そしてスクランブル後編（前書き）

すみません半日以上遅れました。気付いたら朝だったんですよね。
しかも土曜日なのに学校が有りましたし。その上短いｏｒｚ

輸送機隊、そしてスクランブル後編

スコーピオンＳｉｄｅ

「こちらアンタレスリード。まずペリカン隊を着陸させる。それ以外は一番足の遅いＣ－１３０からだ」

『管制塔了解。現在陸戦隊のアベンジャーとスティンガー、ジャベリンを持った部隊がそちらの援護に向かっている』

「了解」

ＳＡＭ部隊が来てくれれば輸送機隊の生存率がグッと上がる。

「管制塔、ペリカン隊を連れてきた。エンジンがやられている機体も有る、緊急着陸の用意を」

『了解。２番滑走路を使用せよ』

「解った」

ペリカン１に尾翼のライトを使ってモールス信号を送る。内容は２番滑走路を使用せよ、だ。

ペリカン１からモールス信号で『了解』と返ってきた。

『ファングクエイクリードからアンタレスへ。敵さんどうもアフリカ方面から来たみたいですよ』

「わざわざご足労ねがったんだ、たっぷりとおもてなししてやれ」

『了解です』

後はアルバトロス隊とペンギン隊、Ｃ-１３０の部隊だけだ。

ＳｉｄｅＯｕｔ

ハンヴィーで輸送隊の飛行ルートの下に移動していた。

「此処で停車しろ！」

車列を止め、携行式のＳＡＭを構えさせる。

「ギリギリまで引き付けてから撃て」

『こちらガードナー１-１。アベンジャーチーム配置完了。何時でもいけます』

「了解。迎撃を開始しろ」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ』

アベンジャーチームも攻撃を開始した。

「俺達もいくぞ！撃て！」

スティンガーやジャベリンが一斉に放たれネウロイを撃破していく。

「兄さん、ジャベリンは残弾ゼロです」

「俺も、スティンガーが一つ残ってるだけだ」

後は航空部隊に任せよう。

アルバトロス１Ｓｉｄｅ

陸戦隊が数を減らしてくれたとはいえ、今だ激しい追撃を受けていた。

「クソッ！　ケツにつかれた！」

「副機長、落ち着け！」

だが状況が悪いのは確かだ。

「ロードマスター、貨物は固定してあるな？」

「Ｙｅｓ　ｓｉｒ」

よし、これなら！

「機長より全クルーへ。本機はこれよりバレルロール機動を開始する。何でも良い、つかまれ！」

機体を一気に回転させる。ちょうどその時ネウロイのビームが機体を掠めた。

「ヒュ～、ギリギリ」

「副機長、このまま行くぞ！」

「了解！」

アンタレスＳｉｄｅ

ペリカン隊の着陸を見届けた俺は部隊を引き連れアルバトロスのもとへ向かっていた。

アルバトロス隊を目視で確認した時、ちょうど１の後ろについていたネウロイがビームを放つ。ダメだ！間に合わない！だがビームはアルバトロス１には当たら無かった。

『おいおい、輸送機でバレルロールかよ！』

「良い腕だ」

Ｃ－５でバレルロール機動を行えるとは相当な腕前だ。

『Ｆｏｘ２！』

３がサイドワインダーを発射し、アルバトロス１の後ろについていた敵を破壊する。

『こちらエンジェルリード。Ｃ－１３０全機着陸完了よ』

「了解。アルバトロス隊、お前達が最後だ。空港へ向かうぞ！」

『アルバトロス１了解』

その後アルバトロス隊を引き連れ無事、帰還した。

輸送機隊、そしてスクランブル後編（後書き）

次回は事後処理と輸送機が運んできた物資の中身です。（多分）

貨物の中身、そして女難（前書き）

コラボ作品とかって面白そうですよね。因みに、猿の惑星見ながら書いてます。

貨物の中身、そして女難

基地に帰還した俺達は空港に向かった。

空港に着き、近くにいた整備士に声を掛ける。

「ペリカン隊は？」

「無事ですよ。ただ……」

「　ただ、なんだ？」

「1と3がエンジンをやられているので当分の間は飛べませんね……」

スペアのパーツも此処には無い。

「ジョンからの補給待ち、という事か」

「はい」

整備士と別れ滑走路に出る。ちょうど補給物資を降ろしているところだった。

「M113？」

C-17から出て来たのはM113装甲兵員輸送車だった。

「本土に残ってる技研の連中が造ったらしい」

「ライトマン中佐」

「C‐5の方にはシャーマン戦車が載ってたぞ」

シャーマン。元の世界では第二次大戦中アメリカの主力戦車だった物だ。

「ハーキュリー（C‐130）は？」

「同じく技研から武器弾薬だな。AK47とM14、RPG‐2、各種弾薬。かなりの数を揃えてくれてる」

技研の連中は良くやってくれた。第五中隊は今まで車両がハンヴィーくらいしかなく、火器もM1ガランド、M1カービン、BAR、M1Aトンプソンサブマシンガンとかだったからな。正直、火力不足だ。ガランドやBARはベトナム戦争でも使われたからまだマシ方だ。

「今日来た火器は全て第五中隊に回しましょう。それでなんとかなるでしょ」

「解った」

ドォォォン

「なんだ!?」

至近距離で爆発が起こる。敵か？　それともペリカン隊の機体が損傷で爆発したのか？

「中佐！アレを！」

コルッカが空を指差しながらこちらに走って来る。

「アレ？　なっ！ネウロイ！？」

ネウロイは全て破壊したはずだ！

「対空戦闘用意！」

命令を出すが全員基地に帰ってきたばかりで弾薬は少なくなっている。

敵も数は少ないが中型が混ざっている。

「敵は中型１、小型６」

「コルッカ曹長、中型をやるぞ！」

「はい！」

最後に一つ残っているスティンガーを構える。

「曹長、俺がこれでヤツの装甲を削る。お前は穴が塞がる前にコアを狙撃しろ」

「了解です」

「いくぞ！」

敵をロックし、発射。ネウロイが気付く、だがもう遅い。命中し、装甲に穴を開ける。

「今だ！」

コルッカがドラグノフを撃つ。

7．62×54R弾がコアに命中し、中型は爆ぜた。

「やった！」

安心したのも束の間、ネウロイの破片から小型ネウロイが現れる。

「曹長！」

俺はコルッカを押し倒し、庇う様に上に乗る。

ネウロイがビーム放とうとするが、放たれる事は無かった。

「ロザリンド少尉！助かった、後で飴玉くれてやる」

『そこまで子供じゃありません！／／／』

「ははっ、ならご褒美は何が良いか考えててくれ」

そこまで言ってコルッカ曹長を押し倒している事に気がついた。

「無事か曹長？」

「重いです中佐／／／」

俺は身を起こして曹長からはなれる。

曹長の顔が赤い気がする。

「どうした？」

「いえ、その……こうやって男性と密着したのは初めてでして／／／」

すまん！

「リーリャは可愛いなぁ」

「言う事と、思っている事が逆になってますよにいさん？」

「みっ湊さん？　どうしてこちらに？戦闘は？」

「あなた達が抱き合ってる間に終わったわよ」

魔王フレデリカも登場なされた。しかたがない、一時撤退だ。

「純一さんはリーリャの方が好みなんですか？」

シルヴィアに退路を塞がれた。だがもうひとつ退路は見出だしている。

『その、さっきのご褒美なんですが……私達姉妹とデートして下さい！』

「もちろん、こんな可愛い姉妹とデート出来るんですから断ったりしませんよね？　隊長♪」

あ、終わった。

「ノォォォオオオ！」

スオムスで似たような事有ったよねー　湊とフレデリカに意識を刈り取られる前、最後に思ったのはそんな事だった。

貨物の中身、そして女難（後書き）

次回、一気に作品内の時間が進むかも。まぁ、せいぜい一ヶ月程度ですが。

復帰、そして愛妻弁当（前書き）

ホントはもう少し書けたんですけどキリの良い所で切らして頂きました。

ストライクウィッチーズの二次創作、増えましたね。現代兵器が出てくる作品も多いので参考になりそうです。

復帰、そして愛妻弁当

輸送機隊が襲われてから半月が経った。あれから、小競り合いは有っても前の様に大規模な戦闘は無くなった。そして……

「ただいま戻りました。任務に復帰します」

「お帰り、キャスパー」

そう、今日からキャスパーが帰ってきたのだ。

「隊長、ファラウェイランド軍とスオムス軍から何か書類が来てるッスよ……ってキャスパー少尉じゃないッスか！怪我はもう良いんスか？」

スタングが書類を両腕に抱えながらオフィスに入ってくる。

「ああ。キャサリン（純一の義母）さんからもお墨付きを貰ってる」

スタングから書類を受け取りそのうちのひとつをキャスパーに渡す。

「復帰祝いだ。キャスパー、読んでみろ」

渡したのはファラウェイランド空軍からの書類だ。

「ウィルマ・ビショップ軍曹のリベリオン合衆国海兵隊への移籍を認める？」

「お前との事情を話して、５００に配属してくれって、言ったんだ

が先方が『二人とも同じ職場の方が良い』って言ってくれてな。それで、それがその書類だ」

「ボス、有り難うございます」

まあ、キャスパーには何時も世話になってるからな。こういう所で借りを返しておかないと。

昼になり、俺とキャスパー、スタングは食堂に来ていた。と言っても、もう1時半なんだけどな。

「だ～れだ？」

キャスパーの後ろからいきなり人が現れ、抱き着く。

「俺の未来の嫁さん」

「せいか～い！」

ギロッ

何だろう？周りの眼が一斉にキャスパーの方を見た気がする。特に男性陣。

「お昼ご飯まだだと思って、サンドイッチ作ってきたの」

「有り難う、ウィルマ」

そう言ってキャスパーは木でできたカゴ受け取る。

「ヒュ～♪　愛妻弁当か」

口笛を吹いてキャスパーをからかう。

「か、からかわないでくださいよボス！」

「愛妻……、愛妻かぁ……うふふ」

「軍曹、帰ってこ～い！」

ダメだこりゃ。

「隊長、少尉がうらやましいッスよ。俺、向こうでも彼女居なかったんスよ？不公平ッス！」

「ビショップ軍曹の場合はおじ様好きだからな。仕方ないさ。お前にも良い人が見つかるって、な？」

「なんすか？勝者の余裕ッスか？」

なんか怒りの矛先が俺に向いてきた。

「だいたい、隊長もモテますよね？顔も良くて、優しくて、その若さで佐官で、特別名誉勲章の受賞者。世の女がほっとく訳無いですもんね？」

「だから、俺には恋人なんか居ないって！あと、〇〇ッスていう口調を忘れてるぞ！」

『都筑中佐、都筑中佐。至急ブリーフィングルームまで来て下さい。

繰り返します。都筑中佐、至急ブリーフィングルームまで来て下さい』

「隊長？」

「ちょっと行ってくる」

ブリーフィングルームに呼ばれるって事は緊急事態だ。敵か？　それとも一ヶ月半後にアフリカへ行くのが早くなったとか？

俺は急ぎ足でブリーフィングルームへ向かうのだった。

復帰、そして愛妻弁当（後書き）

次回は前半ブリーフィング、後半戦闘……かな？しかも、多分前後編にわかれます。

避難民、そしてブリーフィング（前書き）

すみません、また朝になってしまいました。しかも、戦闘パートに行くはずがブリーフィングだけで終わってしまいましたし……ｏｒｚ　全部あの腹痛が悪いんだ！（泣）

避難民、そしてブリーフィング

「何事だ？」

「遅い！」

部屋に入ってすぐフレデリカに叩かれた。

「それで？」

「ガリア南部から避難民がこっちに流れて来てるのは知ってるな？」

ライトマン中佐が質問してくる。そう、ガリア南部地方は今だこちら側の手に有る。だが、俺達の突破を諦めたネウロイはそちらに戦力を回したらしい。

「ええ」

「その避難民の一群が、此処の近くに来ている。だが、ネウロイもそれに気付き、追撃中だ」

「護衛部隊は？」

「ごく少数だ」

ガリア軍も何を考えているんだ？　民間人を無防備な状態にするなんて！

「救出に行こう！」

「そう言うと思って既にプランは考えてあるわ」

「さすが、フリン。仕事が早い」

「別に貴方の為じゃ無いわよ！／／／あくまで、民間人の為なんだからね！」

フレデリカの顔が赤くなっている。愛称で呼ぶと照れるんだよな～あいつ。

「作戦決行は明日。此処から６０ｋｍ先の都市にある学校に民間人が避難する予定だ。そして我々がそこまで迎えに行き、バルセロナまで護衛する。これでどうだ、司令官殿？」

「はい。それで行きましょう」

各中隊長も呼び、細部を詰めていく。

翌日の早朝。分隊長以上の隊員達とウィッチを集め、作戦概要を説明する。

「作戦内容は民間人の救出だ。作戦区域は此処から６０ｋｍ離れたこの街だ」

ブリーフィングルームの黒板に張り出したＵＡＶ撮影の航空写真を指揮棒で指しながら話す。

「民間人を含む少数のガリア軍が此処……この学校を確保している。我々はその学校まで行き、ガリア軍と合流。民間人をバルセロナま

で連れていく」

分隊長の一人が手を挙げる。

「少数のガリア軍と言ったが、どのくらい居るんだ？」

「民間人２５８名に対し、一個小隊だけだ。ただし、武装した民間人も居るから、実際にはもう少し居る」

「たったそれだけかよ」

「気持ちは解るが今は黙っててくれ」

ぼやく兵を黙らせブリーフィングを続行する。

「先ず、キール少佐率いる車両部隊が第五中隊と共にウェイポイントアルファまで行き、到着後は待機。その後、ゲーボ中隊に分乗した第一中隊が学校の四隅にロープ降下、そして確保。それと並行してレイザー中隊に分乗した第四中隊が学校に降下。民間人とガリア軍を誘導する。車両部隊はこの通りを使い、学校の正門前の道路まで移動だ」

「第二と第三の名前が挙がっていませんが？」

「質問は挙手してからしろ。名前が挙がって無いのは基地で待機だからだ」

「待機……ですか？」

「即応部隊としてな。それに何時バルセロナにネウロイが来るか解

らないのに全軍出動ってわけにはいかないだろ？」

「了解」

「では続けるぞ。レイザー中隊は校庭に着陸し、優先度の高い民間人から搬送する。それ以外は車両部隊に載せる。ゲーボ中隊は上空から援護だ」

キャスパーが挙手し、質問してくる。

「航空支援や砲撃支援は？」

「航空支援はレイニーが作戦区域上空を旋回するのと、コブラ、アパッチ、リトルバードが援護してくれる。また、オコーネル中佐麾下の航空隊とＶＴＯＬ部隊が要請に応じて出撃する。砲撃支援は自走砲部隊が２０ｋｍ離れた所から砲撃をおこなってくれる。内陸の為、艦隊からの支援はトマホークだけだ」

「了解です」

次はウィッチ隊だな。

「ウィッチ隊はヘイヘ、コルッカはヘリから狙撃。ロサレス姉妹はコンボイの護衛。ララサーバル、ビューリング、ビショップは対空警戒をしつつ、地上部隊を支援だ」

「「「はい！」」」

「作戦は2時間後だ。今の内に飯を食ったりしとけよ？　解散！」

さて、俺も準備しますか。

避難民、そしてブリーフィング（後書き）

次回こそ、戦闘パートを！

民間人救出作戦、そして包囲網前編（前書き）

眠い……ＺＺＺ

民間人救出作戦、そして包囲網前編

いよいよ作戦開始だ。既に車両部隊は出発している。

『こちらユニフォーム１－１。ユニフォーム並びに第五中隊はウェイポイントアルファに到着』

「了解。作戦進発コード発令！アイリーン！」

『アイリーン！クソッ、ファ○キンアイリーンだ！』

『離陸するぞ！』

基地から輸送ヘリ部隊が離陸する。

『本日はラファール空港をご利用頂き、有り難うございます。本日の機内食は５．５６ｍｍＮＡＴＯ弾、７．６２ｍｍＮＡＴＯ弾、７．６２ｍｍカラシニコフ弾、７．６２ｍｍラシアン弾のサラダ。主菜はネウロイのビーム。付け合わせは各種ロケット弾。デザートはアップル型のグレネードでございます』

「機長、ふざけてないで仕事しろ！」

『やってますよ、中佐殿。それに、これはお約束です』

「まったく」

『こちらアーバレスト１－１。アーバレスト隊以下、各自走砲隊配置完了！』

「了解。要請が有るまで待機せよ」

『Ｃｏｐｙ　ｔｈａｔ』

支援砲撃隊も配置に着いたらしい。後は俺達だけだ。

『後３分！』

「後３分！」

ヘリ部隊も順調に進んでいる。今回は順調に行きそうだな。民間人を全員バルセロナに連れていく。今はそれだけを考えればいい。

『後１分！』

「後１分！降下用意！」

気合いを入れ直し、降下に備える。

「ロープ！Ｇｏ　Ｇｏ　Ｇｏ！」

目標に到達し、降下を開始。他の部隊も次々と降下し、学校の四隅を確保する。

「ロメオ１‐１からユニフォーム全車へ。移動を開始しろ」

『了解した。ストルッカー、出せ！』

『こちら第四中隊。民間人、並びにガリア軍の誘導準備完了。ですが少し問題が……　一度来てくれませんか？』

「解った。ジョンソン、中隊の指揮を任せる。ロメオの指揮はシャドウが執る」

『了解』

「はい、主」

俺は急ぎ足で民間人とガリア軍の居る学校の体育館へと向かう。

「いったいどうした？」

俺は呼び出した元ＳＡＳの曹長に尋ねる。

「あれを」

曹長が指差す方向に居たのはガリア軍だったのだが、陸戦ウィッチ４名、整備士８名。後は老兵や少年兵、だった。

「おいおい、冗談だろ？」

「悲しいけど現実みたいです」

なんてこった、一応全員武器は持っているらしいが……　正直、使い物になるのはウィッチ４名だけだな。

俺はガリア軍ウィッチの中で１番年長らしき人物に声をかける。

「君が指揮官か？」

「ええ、私はソフィア・ルイーズと申しますの。階級は中尉ですわ」
育ちの良いお嬢さんらしいな。
「よし、ルイーズ中尉。君達はシールドを使って車両部隊の盾になってもらう。」
「わかりましたわ。えぇっと……」
「都筑純一だ。階級は中佐」
「わかりましたわ。中佐殿」
ルイーズ中尉が部下の3名に命令を出す。
『こちらユニフォーム1-1。到着したぞ』
「よし、老人と子供、負傷者や病気の者を優先してレイザー隊のヘリに載せろ!他の者はユニフォーム隊に分乗だ!」
第四中隊がヘリに民間人を載せていく。
『こちらスーパー1。旋回中のレイニーが北東から陸戦型ネウロイが接近するのを確認した』
「ロメオ1-1了解」
上空でヘリ部隊の調整に当たっているヘリ部隊のブラックホーク、スーパー1からレイニーがネウロイを発見したと通信が入る。

『ボス、敵に攻撃されてます！』

「北東のネウロイか？　さっき報告を受けたばかりだぞ！」

『連中、最初から此処に居たみたいです！』

なっ！　待ち伏せ？　という事は、北東の部隊は駄目押しって事か。

クソッ！　連中め、中々やってくれる。

「民間人を早くトラックに載せて、先にバルセロナへ向かわせろ！
護衛はルイーズ中尉以下、ガリア軍と第四中隊が担当だ！」

『ユニフォーム了解』

とにかく、此処で踏ん張って、民間人を逃がす時間を稼がないと。

民間人救出作戦、そして包囲網前編（後書き）

次回……で戦闘、終わるかな？

民間人救出作戦、そして包囲網中編（前書き）

結局短くなってしまいました。すみません

民間人救出作戦、そして包囲網中編

キール少佐の車両部隊の半分。民間人を載せたトラックと護衛の兵士を載せたハンヴィーがバルセロナへ向かって出発する。

「ロメオ１‐１からレイニーへ。ＣＡＳ（近接航空支援）を要請する！」

『レイニー了解』

レイニーが中型と小型の群れを叩き潰す。

『スーパー１からロメオ１‐１へ。北東の敵がもうすぐそちらに接触する。中型ネウロイを多数確認した。注意しろ』

「ロメオ１‐１了解」

クソッ！　潰してもまだ出て来る。

「ロメオ１‐１からバッジ１へ。北東から接近中の敵を排除されたし」

『バッジ１了解』

アパッチ隊に支援を要請し、敵を排除して貰う。

車両部隊指揮官のキール少佐が先行したストルッカー一等軍曹率いる車両部隊に無線を繋いでいる。

「状況は？」

『今は手が離せません、少佐！　それどころではなくて。……おい！　どうした？』

『リックが撃たれた！　リックが撃たれた！！』

無線の奥から怒号が聞こえて来る。いったい何があった？

ストルッカーＳｉｄｅ

俺達先発隊は来た道を帰っていた。だが、行きとは違い、激しい抵抗に遭っている。

「クソッ！　行きはあんなに静かだったのに！」

『状況は？』

無線でキール少佐が状況を聞いてくる。

「今は手が離せません、少佐！　それどころではなくて。……おい、どうした？」

運転中に後ろが騒がしくなったのに気づいた。

「リックが撃たれた！　リックが撃たれた！！』

グチャっという音と共にハンヴィーの５０口径座に就いていたＳＡＳの兵士が倒れ落ちる。

『どうした？　負傷者が出たのか？』

俺は後ろを見遣り、確認する。

「もう死んでる」

ＳＡＳの隊員がリックの死を告げる。

『答えろ！　ストルッカー！』

「死にました！　リックは死にました、少佐！」

『了解。ユニフォーム１‐１からスーパー１。ＫＩＡ一名！　ジェームス・リック伍長』

『スーパー１了解』

キール少佐がリック伍長の戦死を報告する。

「誰か５０口径座に就け！」

だが、リックが死に、次は自分かも知れないという恐怖が彼等の動きを止める。

「俺が行く！」

言葉を発したのはフート一等軍曹だった。

彼は５０口径座に就き、射撃を開始する。

『こちらバタフライ1。ストルッカー、助けに来たぞ！』

飲み仲間の操るコブラが屋上に居た敵を２０ｍｍガトリング砲で吹き飛ばす。

俺達は、コブラとガリア軍ウィッチに守られながら、基地へと帰還するのだった。

ＳｉｄｅＯｕｔ

俺達は未だ学校の付近で足止めを喰らっていた。

そんな中、ひとつの無線が皆に衝撃を与える。

『こちらスーパー1。ブラックホークダウン。繰り返す、ブラックホークダウンだ。ウィールのブラックホークが墜ちた』

「クソッ！　生存者は？」

『此処からは確認出来ない』

『こちらレイニー。サーマルで小火器の発射炎を確認した』

救援に行かないと！　仲間は見捨てない。たとえ、死体であったとしてもだ。

続く

民間人救出作戦、そして包囲網中編（後書き）

次回は恐らく中編の後編。ズルズルと長くなってるｏｒｚ

民間人救出作戦、そして包囲網中編 - 2（前書き）

久しぶりに両親のケンカを見ました（ガクガクブルブル）

民間人救出作戦、そして包囲網中編-２

フレデリカＳｉｄｅ

私の隊が墜落現場に一番近い所に居た。

『フレデリカ！　ヘリの乗員はまだ生きてる。湊をそっちに送るから一緒に救出に向かってくれ！』

「了解。第三小隊、出るわよ！」

湊と合流し、徒歩で墜落したスーパー３に向かう。

「ＲＰＧ！」

屋上から小型ネウロイＢ型（動きは遅く弾速も遅いが歩兵携行式ロケット弾並の威力を持つネウロイ）がこちらにビームを放つ。幸い誰も被害を受けなかったが、移動の足が止まってしまったのは確かだ。恐らく、ブラックホークを墜としたのもあのタイプのネウロイだろう。

「フレデリカさん！」

「解ってるわ！」

一刻も早く救出に行かないといけない。だけど、此処からも動けない。

『こちらスター１。そちらの援護に回る。その間に行け！』

「了解。助かるわ！」

リトルバードで編成されたスター隊がミニガンとロケットポッドで屋上に居るネウロイを掃射していく。

「一気に行くわよ！　Ｇｏ　Ｇｏ　Ｇｏ！」

通りを駆け抜け、ヘリを目指す。

墜落現場に着き、回りにたかって居たネウロイを排除し、湊をヘリに乗り込ませる。

「機長は死亡、副操縦士は重症、機関銃士並びに随伴していた兵士（各ヘリに二名ずつ搭乗）は軽傷です」

「了解。治療は出来る？」

「難しい……というより無理です」

「解ったわ。ジュリエット１-１からスーパー１へ。重症者発生、緊急搬送の要有り。救護ヘリを要請する」

『スーパー１了解。司令部と連絡を取る、待機せよ』

スーパー１が司令部に連絡を取っている間に湊が副操縦士に簡単な応急処置を施す。

『スーパー１からジュリエット１-１へ。リブ隊の一機をそちらに回す。その場を維持しろ』

「了解」

程なくして、リブ３が下りて来る。随伴の兵士達と湊が協力して戦死者と負傷者を乗せた担架を運ぶ。兵員搭乗スペースに担架を載せ、リブ３のブラックホークが離陸する。

「ジュリエット１－１からロメオ１－１へ。救出に成功。次は何をすれば良いのかしら？」

『こちらロメオ１－１。あ～、ちょっと待ってくれ。また墜ちたのか？』

「　？　」

ジュンとの無線が途切れる。

「どうしたんでしょうか、フレデリカさん？」

「解らないわ。ただ……ただ、悪いことが起こった可能性が高いわね」

ＳｉｄｅＯｕｔ

「ボス、またヘリが落とされました」

キャスパーのその言葉を聞き、通信途中だった無線を切る。

「また墜ちたのか？　何処に？」

「メインストリート近くの広場です」

「メインストリートか……ロメオ1-1からユニフォーム1-1へ。メインストリート近くの広場にゲーボ6が墜落した。救出に行けるか？」

俺は先程出発した残りの車両部隊に連絡を取る。

『無理だ！　こちらも激しい抵抗を受けて車両はボロボロ、負傷者も出てる！』

「了解。クソッ！」

何とかしないと、被害がどんどん増える一方だ。

ライトマンＳｉｄｅ

「ストルッカー達が帰還しました！」

「ライトマン中佐、二機目のヘリが墜ちました」

また墜ちた。最初に奇襲された時から我々は主導権を失っている。このままではじり貧だ。そこでひとつの決断を下した。

「即応部隊を出す！　第三中隊をプロウラー隊に載せ出撃させろ！　それと、車両という車両を全て出せ！」

「全て、ですか？」

「そうだ！　装甲とエンジン、タイヤが付いていればそれでいる良

い！」

「了解」

「ヒスパニア軍にも増援を要請しろ」

「了解」

急いでくれよ。仲間を失うのはゴメンだからな。

続く

民間人救出作戦、そして包囲網中編 - 2（後書き）

次回で戦闘終了です。作者的にも、物語的にもこれまでの中で最大の戦闘ですね……

作中の被害も、プロローグを除けば死傷者や被害も最大ですし。

民間人救出作戦、そして包囲網後編（前書き）

やっと終わった～

長かった。ズルズルと引き延ばしすぎた。反省します。

民間人救出作戦、そして包囲網後編

ストルッカーＳｉｄｅ

再出撃を命じられ、今は弾薬の補充を行っている。

「ハンヴィーの中の血は洗っといた方が良いぞ」

そう話し掛けてきたのはフート一等軍曹だった。

「次に乗り込む奴らが怖がる」

そう付け加え、そのまま弾薬の補充に行ってしまった。

「一等軍曹！」

「どうした？」

今度は同じ車両部隊の仲間が話し掛けてきた。

「戻るって本当ですか？」

「ああ、まだ仲間が残ってる」

「戻りたく有りません」

「それは皆同じだ！　だが仲間を見捨てる訳にはいかん。それに、その時何をするかによって漢が決まる。後は自分で考えろ」

「……了解」

弾薬の補充も終わり、ハンヴィーのエンジンをかける。

「私達も行ってよろしいかしら？」

先程のガリア軍ウィッチが近付いて来る。

「あんたら、武器は？」

「有りますわ。弾薬も」

「良し、向こうのトラックに乗れ！」

先程の彼も覚悟を決めたようだ。自分のハンヴィーのエンジンをかけている。

それで良い。そういう想いを込め、彼に頷きかける。彼も頷き返してくれた。さぁ、出撃だ！

ＳｉｄｅＯｕｔ

二機目のヘリが墜ちてからそれなりに時間が経ちネウロイがヘリの第二墜落現場に迫っている。そんななか、シルヴィアがひとつの提案をしてきた。

『私とリーリャでヘリを守ります』

「救出部隊は何時来るか解らないんだぞ」

『構いません』

「コルッカも了承しているんだな？」

『はい。私に異存は有りません』

「好きにしろ。ただし、条件が有る。必ず生きて還って来い！……良いな？」

『『了解』』

無線が切れる。

「ボス、ライトマン中佐が即応部隊として、第三中隊と機甲部隊をこちらに送ってくれたらしいです」

「そうか」

「それと、艦隊から機銃を搭載したＳＨ‐６０も来てくれるみたいです」

やっとこちらに風が向いてきた。

シルヴィアＳｉｄｅ

ヘリからストライカーごと降下し、墜落したヘリに取り付く。

「友軍です」

誤射を避ける為に友軍である事を伝える。

「ウィッチ隊か……救出部隊は？」

「私達です」

生き残っていたのはパイロット一名だけだった。

「身体の状況は？」

「左足の感覚が無い。背中も変な感じだ」

「今出してあげます」

リーリャと協力してパイロットをヘリから近くに在った建物に運ぶ。

「リーリャ、私は右をやる。貴女は左を」

「了解」

私はヘリから持ってきたサブマシンガンをパイロットに渡す。

「裏口から敵が来たらそれで撃って下さい」

「解った」

後は救出部隊が来てくれるのを待つだけだ。

ＳｉｄｅＯｕｔ

待ちに待った救出部隊がやって来た。

「中佐！　帰りのバスを待ってると聞いたんですが、バス停は此処で良いんですか？」

「合ってるぞ！　良し、円周防御！　負傷者から優先して載せろ！」

Ｍ１１３が円周防御陣を築き、歩兵部隊の盾となる。上空援護にはＳＨ‐６０、ＡＨ‐６４Ｄアパッチロングボウがついてくれている。

『こちらレイニー。燃料と弾薬の補充が完了した。現在、滑走路をタシキング中だ』

『こちらアーバレスト。全ての榴弾を撃ち尽くした。これより撤退する』

支援部隊から無線が入る。自走砲部隊が撤退する代わりにレイニーが砲撃支援に入ってくれる。

Ｍ１１３に乗り、第二墜落現場へ向かう。シルヴィアとコルッカ、そしてヘリの生存者を迎えに行く為だ。

シルヴィアＳｉｄｅ

建物に篭って１時間が経った。

『ロメオ１‐１からヘイヘ少尉へ。今向かってる。もう少しだけ耐えてくれ！』

「了解。聞いたわね、リーリャ」

「ええ！　でもそろそろライフルの弾が無くなりそう」

更に数分経った時、リーリャが撃たれた。

「リーリャ！」

『ヘイヘ、今着いた。何処に居る？』

「建物の中です。そんな事よりリーリャが！」

『解った。待ってろ直ぐに行く！』

ＳｉｄｅＯｕｔ

中に入るとヘリのパイロットがリーリャの傷口を押さえていた。

「脇腹に喰らってる。魔力不足でシールドを張れなくなった所をズドンだ」

俺はサバイバルナイフから針と糸を取り出し傷口を縫合する。

「中佐、心臓が止まってるぞ」

「クソッ！」

俺はコルッカの胸に手を当て、心臓マッサージを始める。

「還って来い！　還って来い！　還って来い！！」

「んっ……」

「良し！」

曹長が息を吹き返した。

「……隊長？」

「ああ、俺だ。今は喋るな」

俺はコルッカ曹長とパイロットを救護ヘリに載せる。

ヘリを中心とする航空部隊と俺達地上部隊も撤退し、戦闘は終了した。

民間人救出作戦、そして包囲網後編（後書き）

次回は事後処理です。そろそろアフリカ編かな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5371w/

誇り高き海兵隊と空を裂く魔女達

2011年11月26日01時48分発行